
特殊能力？ハイ、馬鹿力です。

panda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特殊能力？ハイ、馬鹿力です。

【Nコード】

N9835W

【作者名】

panda

【あらすじ】

ある単純で強力な能力を持つおれ『ジーク・クルード』

その気になれば国でかなりの職に就けるけどメンドクサイから生まれ故郷でゆったり

と傭兵業を営んでいたんだけど・・・

あの少女『エリーナ』と出会ってからおれの人生は変わったんだ

処女作です。自分なりのハッピーエンドを目指したいと思います。

魔王とかそんなのはまだ先かな…

プロローグ（前書き）

ついにやっちゃった……書いてやった

作者は色々な意味で初めてです（ネットとか）

いけないところは感想で書いてくれたらうれしいです。

プロローグ

剣・魔法・モンスターが存在する世界『リアース』

地上を住処とする主に人間や亜人の種族、

魔界を住処とし『魔王』率いる魔族、

そして、まだ誰も見たことがないという『天界』にいる天使
これら三つの勢力があった。

人間は特に秀でた力を持たず、それでも剣や魔法を使い、特に強いわけではないが多様性があり、亜人は人間を基準に一部の能力が高かったり低かったり、種族によっては『固有スキル』を持っている。

魔族は全体的に高い能力を持ち、姿が様々、より強い魔族には爵位がつけられる。

天使はおとぎ話や歴史書に登場し存在さえわからない、しかし、天使が出る話には必ず災厄が現れるという。

そしてこれは、そんな世界で生きる一人の馬鹿力と仲間たちがおくる物語である。

プロローグ（後書き）

やっぱり『神様』は荷が重いので削除しました

1話 はじまり（前書き）

今更書いててなんだけど恥ずかしいですね

1話 はじまり

森

「ラストっ！」

斬るというよりは叩き潰すような大剣の一撃を受けた1メートルほどの岩のような塊は“ゴシヤッ”と潰れる音を出して血を吹き出しながら大地に沈んだ。

「ッー。ひーふーみー、……。よし、これで依頼されたのは全部かな」

その状況を作り上げた青年は周りにある同じような赤い塊を数えろとそれぞれの塊に近ずくと素手でそれに生えている角を枝のように折り始めた。

青年がちやくちやくと角を回収しているとき、背後の木の裏で息を荒くし血走らせた眼でその背中を見る青年に殺されたその生き残りがいた。そして目標は武器を収めて無防備な背をこちらに向けている。

距離もさほどなくこれ以上にはない条件がそろって勝利を確信したそれは全力で突進した。

青年はこちらに気づき振り向いて構えたが大剣を抜刀する間もないだろう。それは絶対の勝利を脳裏に浮かべ青年へ突っ込み“ドン！”という音が響いた。

side 青年

「あつぶねーな」

ギリギリでアックスボアを受け取ることができた。相手は魔物だが驚いてるのがなんとなくわかる。

いや、ふつうの人だったら死んでたぞこれ。

「惜しかったねえ、この奇襲はよかったけど相手が俺だったからな。」

としゃべっている間にも両手で押さえられているアックスボアは前進しようとしている。

「おまえでホントにラストだな」

自分を少しヒヤツとさせたこのイノシシ君には賞賛を込めてこの拳で決めてやろう

押さえていたうち片手を上げグーをつくるとみけんめがけ殴りつける。

原形は保っているものの最後の一匹も屍の仲間入りをしたのだった。

side end

「で、ジークよお。結局は何体ぶちのめしたんだ？」

「んー、十三くらい？」

今回の依頼は畑を荒らす魔物の群れの討伐だった。簡単に説明してるけど被害がでかいのでかいの…

「相変わらずテーマは規格外だな。アックスボアつつたら体がまんま石だから剣じゃ斬れねーし、

魔法が撲殺するしかないんだぞ。……まあ、あの大剣なら鈍器になるか」

「最後のは押さえつけてグーでやったけどな」

「…もうあきれて何も言えねーよ」

今、俺はクエストを終えていつものように酒場で友人のダロンと共に飲み交わしている。周りでも同じように仕事を終えた男たちが酒やつまみを片手に騒いでいるがここでは日常だ。そして俺たちも互いの成果をいいあったりする。

「おまえホントにスゲーよな。こんな田舎で傭兵するより王都とかで騎士やったほうがよっぽど儲かるだろ。」

はあ、またこの話かよ。こいつ酔うといつも言うなこれ

「だからいやつつてんだろ。俺はこういうドンチャン騒ぎができる楽なのがいいの」

「んだよっ勿体ねー。てゆーかテメーのやってること全然“楽”じゃねーからな、せつかくの”加護”持ちなんだから優遇されっただろ……でもって俺にいいところ紹介しろ、したら俺は……うふっ」

こいつそうとう酔ってんな、もう面倒くさくなってきたよ……

「はいはい、そろそろ帰って寝るぞ」

わーったよと言いつつ夢の世界へ旅だっていくダロンを見て会計をすます

（あー、明日は何しよっかなあ…）

キャラ（前書き）

作者には表現力がないとです……。
みなさんの豊かな想像力にまかせます。

キャラ

ジーク・クルード（19）“加護持ち”

男・180cm

武器

大剣・圧倒的な力

容姿

ボサボサした茶っぽい黒の髪・瞳も黒・笑顔が似合う好青年？

主人公

加護持ちで種族の壁を越えた怪力の持ち主、あまりの力に全力は出したことがない

加護の能力は主に筋力に影響し腕力・握力・脚力など、肉体に関しては他の追隨を許さない

魔法の才は皆無

耐久力に関しては人がベースなので頑丈な部類に入るが攻撃が効かないとかはない

おせっかいやき

エリーナ（16）

女・165cm

武器

おもにサポート

魔法

容姿

ショートの青っぽい白の髪・瞳は水色

ジークが依頼の途中で助けた少女。表情が少ない
精霊との意思疎通が出来る特殊体質の持ち主

普通の生活を送っていなかったなので色んなことに興味を示す
魔法は教えてもらえなかったため治癒しか知らない

救出後

メツチャ元気な女の子

暴食（一部限定）

ジーク大好き子

ジェレイス・ドレル（16）

男（魔）・168cm

武器

長剣（魔）・魔法

容姿

短く赤い髪・瞳も赤　・少し童顔

エリスについてる護衛みたいなもの、性格は魔族にしては温厚、
やさしそうな顔をしてる

魔族なので身体能力は成人した獣人より少しないくらい

戦い方は職業で言うなら魔法剣士

魔剣を所持してるがまだ発動してない様子

おまけ

エリスとの付き合いは彼女が魔界を出るときに会ったときから

一人だったエリスに手を貸し一緒に旅をしていたのは勢いで、彼

女に一目ぼれしたから

エリス・ヴァーティア（18）

女（魔）168cm

武器

魔法（攻撃系）・ジェスに対する理不尽な体罰

容姿

ポニーテールの金髪・目は強気な金

雰囲気からしてお姫様、言葉使いはジェスに対しては理不尽
誰にでも強気で大人っぽさを感じるが意外といろんなところでウブ
魔力に特化した魔族で後衛タイプ

リゼ・ガルデア(?)

女(魔) 175cm

武器

剣・影を使った固有魔法

容姿

銀髪のショート・瞳は青

正規のエリスの護衛、子爵でも上位の力を持ち影を使うという珍しい魔法を持つ。

影をゲートとして移動が可能。自身の影を物質化させての攻撃も可。

顔にあまり感情が出ないのでよく誤解されるが根はいい(魔)人

ユーヴェルト・クアトス(28) “加護持ち”

男 178cm

武器

魔剣・?

容姿

短い銀髪・瞳は七色が揺らめいている

元ギルド階級2の経歴を持つ現騎士団長。加護持ち

その能力は視覚や聴覚、反射神経などが異常（かわすだけなら弾丸とか余裕）、下手したら第六感とか持つてる。

目は特殊でいろんなものを見ることができ（単純に距離・魔力の流れ・精霊・・・）魔法などで姿を隠しても何の意味もなさない。姿を隠すなら存在自体を消すか彼の視界に入らない遠くに逃げるべし！

ジークとは魔剣一本で戦っていたがあまり武器に不得意はなく、魔法もこなす万能型。

戦場ではその目を生かし弓の魔装具を使う。

元が傭兵のためあまり堅苦しくない（むしろヤンチャ）。楽しいこと好き

モブキャラ

ダロン・ブル（21）

男・175cm

めんどくさいから以上

ティーナ・リズニー

女・155cm

武器

ティーナスマイル！！（対象は男限定）

容姿

シヨートの栗色の髪・瞳は茶

何気にメツチャ登場したギルドの受付嬢

デック・オルタン ジッちゃん (55)

男・110cm

武器

鍛冶道具(おもにジーク用)

容姿

ハゲ!ムキムキ!いかつい!怖い!(あれ容姿?)

キャラ（後書き）

ジーク＋ユーヴェルト÷2＝完璧超人？

2話 予兆（前書き）

あれ？1話よりメツチャなげー

2話 予兆

「ふあ…つく」

いつもより少しだるい体を起こす、きのう飲みすぎたかな…

水を飲み着替えや朝食を済ませると気分転換に散歩することにした。

俺が住む都市は大陸でも海に面していて資源は豊かだから色んな商人がいたり、此処の船を使って別の地を目指す様々な種族を見たりすることがあった。人生の大半をここで過ごしてるが飽きは来ない。そして何よりこの地域の周辺には土地が豊かな分それを糧とする魔物が生息している、だからここは俺たちのような傭兵の良い拠点でもあり、互いの武を競い合う場所でもある。

半年に一度行われる闘技大会は近隣の地域のお偉いさんなんかも来て運がいいやつはスカウトされたりする。

（おれも出てえけどなあ…、出場禁止になるならやりすぎなきゃよかったよ

）

ひととおり歩き終えたとおれは何かないっかなとギルドへと足を向けるのだった。

「おはようございます。今日は早いですねジークさん」

「あ、おっはようティーナちゃん。今日も相変わらずかわいく頑張ってるね」

「ふふっ、ありがとうございます。」

朝一番、ギルドには人影はないがあいさつをしたのは我らがギルドの看板娘ティーナちゃん、愛嬌があって男ばかりのギルドにとって

は欠かせない癒しだ。

…にしても早えなオイ…

「今日は何か入ってない？できれば“おれ向け”で」

「そうですねえ……。残念、今日は特にないみたいです（ニコッ）」

“おれ向け”というのは生活上の力仕事の一つで、別に「ドラゴン？バッチこーい！」というわけじゃない。

「そっか、残念だけどティーナちゃんのスマイル見たからいつかなまたあとでおじやますとするよ」

「はい、いつでもお待ちしております（ニコッ）」

ホントいい笑顔だよなあ、マジで悪い気分吹っ飛んだ……。…つく、これで一体何人の傭兵たちがオトされたのか…。

たいていの人は依頼を受け魔物を倒すことが傭兵になる最初の試練だろうが、ここではまずこの“ティーナスマイル！！”が大きな試練となっているのだろう（男限定）

ギルドを後にした俺はある場所を目指し歩いた。途中で5歳のガキンチョから50代のオバチャンまでたくさんの人から声をかけられる。

内容は「あそんでえ（boy子）」や「前はありがとねえ。はいアメちゃん（あれ？）」など、まあこの怪力を生かしたダイナミックな遊びをしたり、暇な時に無償で手伝っている結果だろう。

それから様々な誘いをかわしつた目的地は鍛冶場、いつも使っている大剣をときどき預けて調整してもらってる。

「ちーっすジツちゃん。どうよおれの愛剣？」

そう聞きながらも来るであろう衝撃に備え両手で耳をふさいでいると…

「バーっキャローっ！ジーク、またてきとーに剣をブンブン振り回しやがって！！

いつも大切に使えつつってんだろっ！！まるで鈍器じや…省略」

（うるせー、これすげー近所迷惑じゃね？）

耳をふさいでも聞こえる大音量に頭の中で悪態をはく目の前ではトンカチ片手にこんがり焼けて引き締められた屈強な筋肉に頭を丸めているいかついジジイがブチ切れていた。

この表現だけじゃムツチャ怖いだろうがジツちゃんは180ある自分のへその辺りの高さからこちらを見上げている。（それでも十分迫力満点だ）

そつ、ジツちゃんはドワーフだ。この道30年の大ベテラン（55）で武具をこよなく愛する人だ

「…はあ。おまえ今度はどんな使い方した？見ろ、表面がぼこぼこだ」

そついうと壁に立てかけられているちょうどジークくらいある大剣を指差した、

あらら、ホントぼこぼこだあ。やっぱり力任せにアックスボア殴るんじゃないかったか…あれ？

「ほう、あの岩の塊をバカス力殴ってたねえ…」

「あれっ、声出してたおれ？」

「ばつちり」

……やっべ、…ちよっ…まっ……あっ『ガスッ』

「もうこのやり取り何回目だぁ？つつかいいかげん買い替えろ…は
ずむから」

「金が溜まつたらってことで…テテ、強く殴りすぎだろコレ」

おれは頭にできたできたてのコブを指さして言うが「うつせい、それ
でお前に使われる武器の気持ちもわかんたろう」といわれたため
何も言えなかった。

仕方ない、予備の剣使つか…

結局この日は特に何をするでもなく気づけば空が赤みをさしている
せめて明日は、と予定を立てるためギルドへと向かう。

途中、人混みでダロンを見たがきのうのがまだ効いてるらしくダル
そうに歩いていたら無視することにした。

そしてギルドの玄関前についていざ入ろうとすると中から出てきた
真っ黒のローブをまとった人（？）とぶつかってしまった

「っすまん、だいじょうぶか？」

向こうは数歩あらずさるだけだったが反射的に謝る、が

「…ふんっ」

少しいらついたのか少しこちらを馬鹿にしたように鼻で笑うと人混
みに消えていった

（何だったんだ、あれ）

ポカーンとしながら男（多分）が消えたのを見ると

「っと。依頼、依頼」

期待を胸にギルドに入った

2話 予兆（後書き）

すいません。

ヒロインはあともう少しです。

3話 前日（前書き）

思いつくうちにバンバンかこー

3話 前日

夕方のギルドは朝とは違いガヤガヤとにぎやかだ
どれも依頼を達成して仲間同士で宴を上げ酒のにおいがする。

「おっ、ジークじゃねーかあ！こいつ、テメーも飲め」

「わりいな、おれ明日がんばるから今日はカンベン」

「なにい、お前ほどの奴が頑張るなんてでけー仕事あつたっけか？」
「んにゃ、今から見つけんの」

んだそりゃ、とガハハとわらって男は元の位置にもどって行った

「また来たぜティーナちゃん、さっそくだけど依頼表見してくんない？」

「今からですか？さすがにちよつと遅いんじゃない？」

「違う違う、明日する分。今のうち決めておこうと思って」

「わかりました。…はいっ、これが今日の依頼表です」

んー、どれどれえ……………。

「……………ない」

「えっと、どんなのが希望ですか？」

悩んでるのを察したのか尋ねられた

「いやあね、最近おれの剣ダメにしたからこれを機に買い替えようとおもってね」

すこしでも高い依頼がないかなと…

「そうですねえ……。最近はそういった被害や魔物は出ていませんし、んー……」

しばし悩むティーナちゃん。

時間はたつぷりあるのだが少し冷や汗をかく俺、理由は簡単、後ろのみんなが怖い……

この辺の野郎は皆ティーナちゃんのファンであるため此処に長居するとやっかいなことになる。

そんなことを考えていると「あつた」と嬉しそうな声がした。

「ちょうどいいのがあつたんです。はい（ニコッ）」後ろで“ふおおおおお！！！”と声上がるが無視

「んー、なにになにい……へえ、こりゃあ良い。内容は護衛で……あれっ、目的地書いてねーじゃん」

「あつ、本当ですね。これ、ついさっき依頼されたものだったんです」

「どんな人？」

「真っ黒な人でした」あつ、それ見た……

「へー」

「はい（ニコッ）」後ろで“ふお……省略

「よし決定っ」

「わかりました」

近くで聞いていた人は（いや、いいんかいっ！？）と頭でツツコンだだろう

「護衛の数は4人と書いてあるけど……」

「はい、こちらで選んでおきますね」

この子にかかれば2秒で此処にいる大半が名乗りを上げるだろうな

……

「じゃあよろしく頼むよ」

用がすみ明日に備えるためにあとを離れるとでてすぐに、

“はいっ！！俺行きますっ” “おれもだっ！！” “テメーはすっ込んでろっ”……

(……誰が来るんだろ)

3話 前日（後書き）

まだあと少しです…

4話 出会い part 1 (前書き)

やっとプロローグが終わった感じ…

4話 出会い part 1

いつもよりはよい朝、ジークは依頼のための旅支度を済ませ、いつもの大剣とはちがい二つの一般的な大きさの剣を腰に刺していた

(……やっぱりしっくりこねえな)

家を出ると辺りに霜がかかっている、少し冷えた風が吹く中でジークは集合地点を目指して歩き始めた

都市には外へ出る時に通る門がありそこが集合地点となっていた門の下にも霜がかかっている(十人くらいだろうか?)人影があるのがわかる

徐々に近づいていくと一人が気がついたのかジークに向かってきた、見るからに同じギルドの人間だろうその人物はほとした表情で話しかけてきた

「あつ、やっと来た。遅いすよジークさん、あんたが最gであれっ?いつものバカでかい剣はどうしたんすか?」

「馬鹿とはなんだ馬鹿とは、あれは今ジツちゃんのトコにあるんだよ」

(…こいつの名前なんだっけ)…あまり覚えは良くないジークだった…

「あゝ、まーた剣をダメにしたんすか?だからあんなうるさかったわけっすか」

「え、聞いてた?」

「聞いてたじゃないっすよ、あの人の声50メートル圏内はあんまり変わんないんすから怒らせるのもほどほどにしてくださいよ」

(そんなにか…、そりやすまん)

「いや、思うくらいなら言ってくださいよ」

「なんでわかった!？」

顔に書いてるっスよ、などと話していると「ゴホンッ」と中断される、見るとそこには6人の集団がありその全員が黒いローブをまとっている

「なにあの不審者たち、夜逃げか？」にしては荷物が少ないような…

「ちげーよ、あれが護衛対照で依頼主だっつーの」

突然の乱入者のほうを向けば、大剣(おれのよりは小さい)を背負い何かエラソーな顔をした明らかにボンボン(坊ちゃんでもいいか)とその部下っぽい奴がいた

「テメーやる気あんのかよ? いいんだぜ別に、この依頼はおれが達成してやるから」

(何だこいつ…、こんなうち『ギルド』にいたっけ?)

(新入りっスよ、覚えてないんスカ…。てゆうかジークさんおれのこと覚えてます?)

(……………)

小声のやり取りだったがちよっと聞こえてたらしく、坊ちゃんはこめかみにあおすじを浮かべ

「このっ「その辺にしてもらえないだろうか、我々は少しでも早く場所に着きたいのだ」

痺れを切らしたのか集団は進み始め、坊ちゃんは「チッ」と舌打ちすると部下を連れてあとをついていく。

そして自分たちも続こうとするとあることに気付いた。

（一頭だけの馬に荷物を乗せずに人を乗せてる？…本当の対象はアイツか…）

そして青年は少女と出会い、物語が始まる

4話 出会い part 1 (後書き)

そろそろかな…

5 話 p a r t 2 (前書き)

やっとしゃべった――！！！！

5 話 part 2

隊列は馬を引くリーダー格の初老の男、そのすぐそばにB & a m p ; B (坊ちゃん & a m p ; 部下) が控え

馬の後ろに他のローブ達男、そしてそのまた後ろにおれ・ロイズ (さつき教えられた) の順である

(馬に乗っているのは体格からして女か…)

一度確かめようとするローブ男たちの“近づくんじゃねえ!” という視線で止められてしまった

森

「にしてもよおロイ、こいつらどこ行ってると思う?」

「さあ? この先はずっと森や山が続いてるっすから、皆目見当もつかないっす」

「だよなあ、だから魔物も多いし人が立ち入るところはほとんどないはずなんだけど…」

「今更っすけど、ホントに大丈夫なんすかねえ。不安になってきたッス…、ティーナちゃんが言うから勢いできちゃったけど、ぶっちゃけやめときゃ良かったっす」テメーもかよ…」

「まあ大丈夫だろ、魔物が出るけど良い実践ができると思えよ」

と励ますようにおれはロイの肩を“パンパンッ”と叩く

「いや、そっちはジークさんもいるしいッスけど、…自分は魔物よりこの連中のほうが不安っす」

…確かに全身真っ黒の集団がこんな所でピリピリした空気を発しながら歩いてたら不気味だな

「もしかしたら、こいつらどっかの宗教の信者で“神をいでよっ”的な儀式でもすんのかもなあ」

などとジークはジョークを言い笑っていたが、そのとき前の4人がピタツと止まったがすぐにまた歩き始め、それを見てしまったロイズは（ま、…まさかあ）と思い、気をごまかすためジークと共に笑うことでやり過ごすことにした

夕暮れ

「また来たぞッ、かたまれ！今度はかこまれてるぞっ！」

もう5度目の襲撃、さすがに慣れたようでローブ男たちは集まって身構えている

「くそ、さつき来たばっかだろっ！いいかげん休ませろっ」

「…全くです…ねっ」

連続の戦闘に愚痴をはきながらも敵をたおすB & a m p ; B

（…あいつら普通に使えんのな、正直口だけかと思ってた）

そう考えながらも自分も大剣を大きく横なぎにはらいウェアウルフ

数体をつぶす

えっ、いつの間に大剣かって？ずっと見栄張ってた坊ちゃんと交換したんだよ…

回想

「あー重てえ！！くそ、いつもの長剣にしときやよかった」

大剣は普通の人じゃ使えないからむしろ良くそれで魔物と戦ったな
って感じだけだな…

（あっ、ちょうどいいかも…）

「おい坊ちゃん、その大剣とこっちの長剣二つと交換しない？」

「んだと？カツコつけようとすんじゃん」「いいからえんりよしな
い」っな！？」

坊ちゃんの言葉をさえぎり、持っている大剣をヒョイと片手で取り
上げ、代わりに腰の長剣を渡す

目の前の信じられない光景に口をぱくぱくさせる坊ちゃんは氣を取
り戻すと

「か…、貸してやるだけだぞッ」

回想終了

「……はあ、やっと終わったあ…」

もう無理とばかりにおれ以外の三人が腰を落とす、さすがにこれ以
上は無理だろう…

死体を確認し、自分も武器をおさめて一息つくこうとしていると

「きゃあっ！…！！」

あわてて振り向けばすぐそこには暴れた馬が突っ込んできて、のっている人は急な行動に耐え切れず振り落とされかけている

（ヤバいつ、落ちる！）

落とされればケガするが下手すりゃ踏みつぶされる

「…っ、あぶねえ！！」

ついに落ちるそれを寸でのところでスライディングしそれなりに痛かったが受け止めることができ、ホッと息をつく

「…っ、…大丈夫か？」と尋ねれば、腕の中にはかぶっていたフードは衝撃で外れ、

まるで雪のように白い髪、目は青く、きれいな顔をした少女がいた

……

おまけ（前書き）

ちよつとした過去

おまけ

少しだけある少女の話をしよう

その少女はある貧しい夫婦のひとり娘としてこの世に生を受けた
肌は白く、瞳も透きとおった青、夫婦はたくさんの愛情をそそぎそ
の子を育てていた

それから3年が過ぎ、もともと貧しかった家庭はいつそう酷さを増
し、毎日満足な食事をすることもできず三人の容姿はまるで枯れ木
のようにガリガリになった
それでも幼い少女は笑い、夫婦もその笑顔を見てはがんばるのだっ
た…

だがそんな日常は続くわけもなく、少女は笑うが夫婦の顔から光は
なくなりつつあった

そんな時…全身を真っ黒のローブでつつんだ一人の男が現れた…
男は言った…

「その子は魔法の才を秘めている、このまま終わりを迎えるより我
らと共に神に仕えないか？共に歩むなら神はあなたたちに慈悲を与
えるだろう」

そして男は懐からこぶし大の皮袋を出すとひもを緩め中身を夫婦に
見せる、そこには今の自分たちでは到底稼げない額の金が入ってお
りこれを使えば間違えなく生きながらえることができるだろうと目

の前の光景に夫婦は喉を鳴らす

「神は慈悲を与えるがそれを受け取るかはあなたたちの自由だ…考
えるといい」

結局は選択肢なんか存在しない、受け入れなければ死ぬ

だがそれは娘をこの得体のしれない輩に売ることだ、神など
とほざく不気味な奴に

だがしなければ娘も死ぬのだ…

夫は苦悩の末、涙を流しつつ首を縦に振った

それから娘は男に連れられてある施設で暮らすことになった

そこには自分と同じくらいの子共がたくさんいて、皆同じく魔法の
才を持っていた

娘は中でも精霊と話せるという特殊体質でそれを知られると娘は『
巫女』として扱われるのだった

そこでの一日は簡単に機械的だ

朝起きて、いつも同じ黒一色の服を着て、祈って聖書を読んで、食
事の時も祈る、あとは意味のわからないしきたりを教えられる、周
りも例外なく同じ作業を繰り返す。

施設からは出ることはなく毎日毎日同じものを見る。いつも同じ
で時間というものがわからなくなるほどに

そして自分は巫女であり周りは自分を自分と扱ってくれない、初め
はよく話していた友達さえ距離を置かれ会話をしようにも相手はま
ともに構ってくれない

・・・ちがう、私は敬ってなんかほしくない。前みたいにお話したい

そんな日々を送っていたある日、偶然娘は信者たちのある話を立ち聞きしてしまった…

『我らが主の復活の儀式の準備はできているのか？』

『はい、賛となる“巫女”も選んでいます』

そこからは話の内容なんて覚えてない…、だがこれだけはわかる
ここで“巫女”と呼ばれる人物は一人しかいない、そして“復活の儀式”とは聖書にあった『ある特別な少女の命と4人の血肉をささげて我らが主“ゼノ”は再来するだろう』とのことだろう

つまり自分は殺されるために此処にいるのだ、得体のしれない神様を呼ぶために存在するモノ

6歳の彼女では抵抗する力も知識もなく逃げることはできない

儀式までのおよそ十年をなにもないここで暮らしてただ死んでいく…

そして確定された『死』を胸に十年をすごさなければならぬ

…なんで、…なんで自分が…、

少女は絶望を胸に生き、よく笑っていた顔からは光が消え表情をかえなくなっていた。

そして現在、もうすぐ娘が死ぬ儀式が始まる…

そして少女は青年と出会い、物語が始まる

おまけ（後書き）

こんなんでいいかなあ
感想お願いします。

6話 part 3

夜

最後の戦闘で皆の状態と馬の怪我により進むのをやめ、屍のそばに留まるのは危険なためそこから手離れて野宿の準備を始めた

馬は隠れていたウェアウルフに襲われたらしく足をやられていた
いずれにせよ足をダメにした馬は置いていくしかない…、悔しいが
ウェアウルフの作戦勝ちだろう

ローブの男たちは輪をつくり、どうしたものかと話し中だ

「しっかしキレーだったっすねえあの子、びっくりしたッス」
「まあな、おれもだよ、…けどあんな子を連れてくるなんてホントに
にどという目的だ？」

うーむ……、……

「「だめだ、わっかんねえ」ッス」
(こりゃ、考えててもしかたねーな)

「ロイツ、おれメシ調達しにその川まで行ってくつから」

「大量を期待するッス」こいつ、たかる気かよ…

「あいよっ、まかせんしゃい」

さて…、行くか…

川

近くにあつた川に着く、川は澄んでいて月の光で泳いでる魚が見えるほどきれいだった

（よし、いけそうだな…て、あの子は…）

よく見れば近くに例の少女がいた、水際で空を見ている風揺れる髪は月の光と川の反射光でよりきれいに映り、その光景はまるで一枚の絵だ

「なーにしてんだ、嬢ちゃん」

「っ！……あなたは？」

突然の声で驚いたようだがすぐに少女は冷静を取り戻す

「ひでーな、君たちを護衛してる傭兵だよ、ジークっていうんだ。それで？何してんのこんなところで」

おれの問いに少女はまた空を見上げてポツリと「空を…見てた…」と答えた

（空？そんなの見てて楽しいのか？）

どうでもいいこと考えてると少女は何か思い出したような顔をして

「あつ…、馬から落ちたときに…助けてくれた…人？」

（ぎこちないしゃべり方だなあ…、人に慣れてないのか？）

「合ってるよ。その…すまなかったな、…ケガしてないか？」

受け止めたとはいえ危なかったからな、大丈夫だろうか…

「大丈夫…、受け止めてくれてありがとう」

とそっけなく答える少女は無表情で感情の色が見えない
並みの人が見れば10人中10人はキレイ・かわいいと言うだろう
が少女からは年相応の女の子達のような感情は出さず、まるで遠い
ところを見てるように目は虚ろだ

「無表情で言われてもなあ、笑おうぜ嬢ちゃん」とおれはニカツと
笑顔で言う

「傭兵さん「ジークでいいよ」…ジークは…何してるの?」(無表情)

少女はおれのせつかくのアドバイスをさらつとスルー、質問してく
るが表情のせいか全く興味なさそうに見える

「おれか?今から晩メシ用の魚をとるんだよ」

「魚?…、釣り?を…するの?」

少し表情を変えた、どうやら興味があるみたいだな…

「しねーよ、時間がかかってめんどくさい」

そっけなくおれに少女は不思議そうに首を傾け「じゃあ、…どうやって?」と聞いてくる

「楽な方法があるんだよ。あつ、そこはかかるから下がってな」

そっけなくおれはゆっくり、あまり音をたてないようにして川の真
ん中まで歩いた

（びつくりすんだろうな…）と思うとにやけてしまった

side 少女

近くで川を見つけたのでそこで暇をつぶすことにした、

自分はあまりあの信者たちと一緒にいたくない、どうせあとで私を殺す人たちだ

そう考えても逃げようとしないのはもう諦めているから、もう十年も前から絶望していた私は抗おうともしない

そんな事を思っていると、急に背の高い男が現れ話しかけられている
確かこの人は落馬した私を受け止めた人だった。『ジーク』というらしい

落馬の時のことを気にかけてくれた、やさしい人のようだ

魚をとるから離れてるといい、彼は大剣を背負ったまま川の中に立つ（なぜかにやけてる）

“魚”は見たことも、食べたこともなかったから興味がわいて、私は自然と近付いて水際に立って彼の行動を観察していると、彼は背負っていた大剣を振り上げ、おもいきり川にたたきつけた

side end

大きな音と水柱が無くなり、あとからプカーンと魚が浮いてくる、大半は衝撃で死んだり、気絶したりするのだが、信じられないほどの力で生まれた衝撃は何匹かの魚をグチャグチャにしていた（見なかったことにしよう）

そして肝心の少女を見ると離れてると言ったのに近くにいたらしく

全身水浸しでへたりこんでいた

このとき少女は黒いローブではなく寝るための薄着をしていて……

…つまり服が水で肌に張り付いて体のラインがはっきりしているのだ
細い体だが年相応にでていてきれいなラインをしている（ナニがと
は言わん）

うむ、将来は絶対美人になるな…

「って、違う違う！！す、すまん。やりすぎたっ」

必死に謝罪するおれ、こればかりはさすがに怒るかもしれない
覚悟を決めているおれが聞いたのは「ふふっ」という笑い声
えっ、と顔を上げると少女は無表情でも、怒った顔でもなく微笑ん
でいる

「エリーナ…」

「えっ？」

「なまえ、エリーナです。少しの間ですけどよろしくね、ジーク」

と言うと、少…エリーナは戻って行った

ジークはその背中を見ながら

（普通に喋れんじゃん……）

と驚いていた（えっ、そっち！？）

7話 対話（前書き）

わかってると思いますがB&a m p・Bはただの人数合わせです
全っ然からみません

7話 対話

結局自分もずぶ濡れになったが魚を7匹手に入れ川から戻る

「とつたどーっ!」

「いやジークさん一体何したんスカ? あんな爆音出して、ドラゴンでもいたんスカ?」

あと何でびしょぬれ?とロイズが呆れて聞いてくる

「ちげえよ、川の真ん中でおもいきり剣を振り下ろしただけだよ。知ってるか? こういうのケツコー獲れんだぜ」

と自慢するように言ったが

「知ってたツスけど、やりますふっ? こんな魔物がはびこる森で夜に… あっ自分は2匹でいいツス」

…こいつはホントに食わせてもらっ気あるのか?

「ひとこと多いぞロイ、わかった… いらないんだな?」

「すみませんでしたっ!」

いつもの語尾をつけずに謝られたから、まあ許そう…

「それよりもジークさん、さっきあの美少女“も”びしょぬれで帰ってきたんスけど、

…もしかしてなんかしました?」

仕返しとばかりにロイがふってきた話はおれには効果観面、おもわず吹いてしまった

しかもいらつくことにロイは意味ありげな眼をして口をニンマリとしている

「ちがう！ちょっと話ただけだつ、…離れてろつつったのになんところにいるから」

（しまった！パニックッて暴露してしまった…）

「え、話したんスカ？あの子と？」

見るからに無表情だから勿体ないっスーと愚痴るロイズ、（気はそれたか…セーフ）

「笑うとかわいい子だったぞ・・・でも変な子だったな」

説明しながらさっきのやり取りを思い出す…

騒がしかつたのでその方を向くと

『どこにおられたッ！』、『心配しましたぞッ』、『なぜ濡れている？』…

（なんかメツチャ問題になってる！？）

……そして怒られた

.....

各自食事をとっており、おれは捕った魚に枝をさして焼いている
(ちなみに、ロイは既にすませて見周りをしている、… B & amp;
B? 知らね)

あの子たちのほうを見ると6人はかたまつて手を胸の前でくんで
何やら祈りをささげている…

(ジョーダンで言ったけど『信者』っていうのはあながち外れてね
ーかも…)

…となると目的は儀式かつ！とつい考えるが“ないない…”と否
定する

彼らが食べているのは質素なスープとパンだけであまり満足でき
るとは思えない

(そういえば、エリーナは魚に興味を持ってたな…好きなのか?)

そう解釈すると焼き終わった魚を一本とって歩き出す

「おいおい…、育ち盛りの子にそんなメシはねーだろ。ちゃんと食
わせてんのか?」

「…何の用だ」

「だからそんなメシで満足できんのかって言ってんだよ、お前らは
いいとしても
その子にはもっと栄養のあるもん食わせろよ」

「あいにく持ち合わせていないのでな。気にしないでもらいたい」

「ねえならこいつをやるよ、ほらっ」

おれは手に持っていたできたての焼き魚を見せ、エリーナへのはず、エリーナは一瞬キョトンとした後おそろおそろそれを取ろうとするが寸前に横から出てきた手で制され「あっ」と少し残念そうな声を出す

「結構、巫女はそういったものを口にしないのでな」

リーダー格のジジイに言われるがエリーナは取ろうとしていた、つまり本人は食べてみたいのだろう

（今は無理か…）

「わーったよ、邪魔して悪かったな」

とすぐに諦めるおれにエリーナは残念そうな顔をする。とまた無表情に戻り

「気持ちだけうけとる、…ありがとう」

というと質素な食事を再開するのだった

sideエリーナ

「…いつ……ろ、おいっ起きろ」

傭兵たちに火の番を任せ、皆が寝静まったあと意識の外から私に呼び掛ける声に気付いた

「…んっ…誰？」

おもい瞼を上げて私を起こしたのであろう人物を見るとその人物はジークだった

「静かに」と告げてついて来いと言うと火のもとまで連れてこられた

「…何か用事？」

「ホントは食いたかったんだろ？ほらっ」

そういつとジークは刺してあつた焼き魚をあの時と同じように私へやる

今度は誰もいないので邪魔されず受け取ることができた

「何で…」

あの時はちゃんと断つたはずなのに

「いや、おまえ無表情ぶってるけどあの時あきらかに残念そうだったからな。魚好きなのか？」

どうやらまた私の心配をしてくれたようだ、口は軽いけど良い人なんだな

「…ちがう、でも食べたことがなかったから興味があった」

「あれか？『私達の宗派では肉類は食っちゃいけません』てやつか？」

ジークは私たちがどんな人かわかったのか答えをそのまま言うのけ、私はうなずいて肯定した

「マジかよ…、人生の半分は損してんなおまえら。まあ、くつてみるよ」

大げさな表現をして驚きながらもジークは“さあつ”と勧めてくる

「でも、私は巫「今はだれも見てねえって、黙っててやるよ（二カッ）」…」

結局私は魚への興味と彼の押しに負けて食べることにした

side end

「あつっ」

「焼きたてだからなあ、気をつけるよ」

あきらかに遅すぎた注意にエリーナは涙目でこっちを見る

「ごめんごめん、ゆっくり食べればいいさ」

今度は注意しつつ小さくかじる

「……おいしい」

ホントにおいしくエリーナは顔をほころばせている

「だろ？もつと食え」

.....

エリーナがそのまま食べ終わると、おれはころ合いを見てまた話し始めた

「おれはジークだ。『ジーク・クルード』バリバリの19だ。お前は？」

「？...名前は前に行ったけど」

「あれはお互い滅茶苦茶だったからな、ちゃんとした自己紹介しよ
うぜ」

いや、ぶつちゃけ言つとおれスッゲー動揺してたからあんまり覚えてないんだよ

「エリーナ...、私はそれだけ」

「...そうか」

（あんな連中というんじゃ、わけありか...）

「じゃあエリーだな」

「エリー？」

「愛称だ、エリーナはなんか長ーからな。いやか？」

自分で言ってると思うけどたった四文字が長いってどうよ？
親睦深めるつもりだったけど急すぎたか・・・

「違う…、私は巫女だからそんな風に呼ばれたことなかった…」

「巫女？その“巫女”っていうのは何だ？」

と尋ねるとエリーは何故か目に涙を浮かべて自分の不思議な能力、
過去を語った

7話 対話（後書き）

なんか自分が描いてた展開と違ってきてる！？

設定

・加護持ち

常識はずれた力を持つ特殊な人たち

能力は様々で同じ能力はない

数は少なく、十数人しか確認されていない

戦闘には向かない能力もあるが戦闘に特化したものはまさに一騎

当千の力を体現できる（例・ジーク）

大体は確認された国に保護・または軍事的に利用される

・階級

ギルドに属する傭兵に与えられるクラス（剥奪もある）

クラスは1から10までであり、小さな数ほどより強さを示す

ただ強ければいいわけではなく、相応の人格・名声もとわれる

階級： 例え

10階級：駆け出しの傭兵

9階級：1年ほどで誰でもたどり着ける

8階級：そこら辺にいる魔物・一般兵

7階級：国の騎士

↳凡人の壁

6階級：熟練者・獣人・一般魔族

5階級：歴戦の猛者・下級魔族

↳常識の壁

4階級：王族直属騎士・単独でドラゴン激破・中位魔族 ジーク

はココ

↳化け物

3階級：上位魔族（爵位持ち）

2階級：英雄・単独で上位ドラゴン（災害並み）激破

1階級：魔王（天災並み）・歴史上で数人しか確認されてない（

中には魔族がいたといわれる)

上位クラスは百人もおらず、加護持ちや魔装具(例・魔剣)または固有スキルを所持してるものが多い

というか何かしら反則を持つてる

ジークは上を狙えますが階級はそれに見合った成果で決まるのでまだ4階級です

・魔装具

古に伝わる能力を持った武具

中には自我を持つものもあり様々な形をしている

製造方法はわかっていない

・魔法

魔力はだれでもあるが誰でも使えるわけじゃない(確かな知識と才能が必要)

魔法は詠唱することで精霊に呼びかけて行われるもので、精霊と意思の疎通ができる者は感覚で行ったりする(エリーナ)

・魔石

魔力を留める性質を持った石(補充可能)

武具につけての応用も可能(例・切った時に発火。魔石の属性で耐性付与)

生活に使われ、文明を代表する道具(例・火をおこして調理)

・月

順に 黒 白 土 青 緑 赤 黄 灰

季節が春・夏・秋と3つあり、雪が降る地域は一部

・魔界

別世界にあるわけではなく同じ大地に存在する。魔族だけの列記とした『国』がある

ただし環境上そこに生息する生物（魔獣クラス）はとても強く、肉体的に弱い人間や亜人などは不向き。

弱肉強食を体现する場所

・魔族

外見は様々、人と変わらない魔人や人型におさまった化け物が一般的。

魔族の魔力は特殊で、見分けのつかない人型でも魔力に敏感なら見分けることが出来る。

偏見で力が全ての悪魔のような存在と思われるがそれは全てではない

実際は現魔界を統べる賢王（魔王）によって秩序が保たれ社会性がある。

魔族は他種族に一方的に敵視されていて（実際前魔王の時まで荒れていた）人間がその筆頭。それを口実にあらゆる国が打倒魔族を掲げその名声・土地を手に入れようとしている。

・獣人・亜人

昔、進化の過程で異種族と交わったり、環境によって変化した人間の親戚のような種族

獣人は祖とする生物の特徴を残していて全身が毛深かったり尻尾があつたりする。（翼人だったら羽）

顔は人が動物に似てたり動物が人に似てるようでそれは種族による。

亜人はエルフが一般、特徴は金や銀の色をした髪。尖った耳。何故か大体が美形。

（国）

・魔法先進国“アドリア”

大陸を代表する魔法国家。一番魔界に近い所に位置する国
打倒魔族を掲げ軍部に力を上げている。

魔力量に特化した加護持ち“ミスラ”の所有国。その莫大な魔力を
利用し異世界からの『勇者』召喚に成功した後その勇者を魔族との
戦争に参加させている。

人口の大半が人間で構成されていて獣人・亜人にはあまりよろしく
ない。

・アレスティナ

ジークの出身国。アドリアの隣国で海に面している。

アドリアとは違い人口は多種、同じく魔界に近く位置するため一
応アドリアとは同盟関係である。

・・・だが実際両国はあまり仲がよくない（種族問題）

加護持ちは騎士団長ユーヴェルト・あまり知られていないがジーク、がいる

8話 発覚

軽い好奇心で聞いた話は決していいものではなかった

事の発端であるエリイが売られたことに関しては仕方がないことだ
と思うし本人も理解していた。

だがそこから続く話はおれにとって不愉快でしかなかった。

閉じ込められた施設で同じ行動をひたすら繰り返す毎日、そして“
巫女”として祭り上げられ1人ぼっちになった孤独感、4・5歳の
子を送る日常では決してない

“巫女”に選ばれた彼女はこの依頼の到達点である場所で『生贄』
として死ななければならぬと聞いた時にはフザケルナと叫びたく
なった

しかも驚いたことに生贄にはおれたちも数えられていた

（くそがつ、ジョークのはずだったが…悪い予感はあるもんだな）
ピンゴじゃないか…

.....

語り終えたエリイはおれの横で泣いていて嗚咽が聞こえる

（10年も我慢していたのか…、そりゃあ無表情な顔にもなるはず

だ)

自分がいつ死ぬかなんてわかりたくもない

(こりゃあ、動かないと男じゃねえな…)

こんな少女が泣きながらつらい過去を話したんだ、助けるっきゃないっしょ

「…それで？ここまで話したんだ。そんな糞つたれな運命に抗ってみないか？」

「…えっ？」

おもいもよらない問いかけにエリイは泣くのをやめる

「助けてやるよ。心配すんなって、ここまで来て無視できっかよ」

「……の？私…助かるの？」そう聞くエリイの顔は涙や鼻水でぐしゃぐしゃになっている

安心させるようにおれはいつものような笑顔で励ます

「ああ、だからそんな顔すんなって。笑ってたら美人だぞおまえ」

「……うんっ、ありがとうっっ」

涙でぬれていたが今度のは無表情ではない明るい顔だった

このとき、離れて寝ていたはずの男たち5人のうち一人少なかったのだが、エリイは泣き疲れてそのままジークに寄りかかる形で寝て

しまい、ジークも起こすわけにいかずにその場を離れなかったため
気づくことができなかった……

（朝）

「な「サツ」むぐ!?!」

昨夜の話と自分たちが置かれている状況を3人に話すと反応はそれ
それで

『マジっすか!?!』『そういうことだったか……』（ロイズ・部下の
順）

坊ちゃんは激怒して大声を出そうとしたので素早くおさえた
察した坊ちゃんは興奮しながらも小声になって尋ねてきた

『じゃあなんですか俺達に言っただけで逃げなかつたんだよ?!?あの女
を連れて逃げればすむ話じゃねーか』

「…………あつ」おもわず素の声が出た

（そうすりゃよかった！！でもあの状況じゃ寝るしかなかったし…）

などと焦りながら言い訳を探しているおれをゴミを見るような視線が集まり三人は同時に

「「「バカが（ツス）」「グッ…なんにも言えない

「じゃあ朝まで待った理由は特になかったんだな」
「そうです…」

坊ちゃんは“ハア”とため息をつくと部下に「あいつら縛っとけ」と命じる（…なんかムカつく）

男たちの捕縛をB & a m p・Bにまかせているとロイズが話しかけてきた

「まさかこんなことになるなんて…、でもそのエリーナって子も大変だったんスね」

「ああ、たまったもんじゃないだろうな」

と二人はジークのすぐ横で寝ている少女を見る、…よく寝てる
するとB & a m p・Bが戻ってきた、何かおかしい…

「おいっ！どういうことだ！！ひとり足りねえぞっ」

その言葉に全員に緊張が走る

（まずい、ばれてたかつ…）

あの時すでに聞かれていたのかもしれない、とすると仲間に連絡でもしていたのか…

「おいっ、起きろエリイ！！みんなっ用意しろ！」

ゆっくりしてる場合ではないので強引にエリイを起こす

「どうしたの…？」

まだ顔がトロンとしているが状況を察して聞いてくる

「きのうの話が聞かれてて仲間を呼ばれてるかもしれない。さっさと逃げるぞ！」

手を引いていっせいに走り出そうとすると「まってっ」とエリイに止められた

「時間がないっ、急げっ」

「あの人たちは私がどこにいるかわかるようにしてる、…一緒に逃げるのは危険」

「じゃあどうすんだよ！もう時間がないんだぞッ」

坊ちゃんの言葉にエリイの顔に影がさす、そして決心したように顔を上げた

「私がおっ「おまえらは三人で行けっ、俺が連れていく！！」ッでも…」

「“俺が連れていく”っておまえはどうするんだよっ？」

おれが犠牲になるような行動に坊ちゃんは異を唱えるがロイズはすくなくならず

「そっちのほう也得策ッス、行きましよう！」

「得策って、いいのかよ！」

「ジークさんなら大丈夫ッス、むしろ自分たちは早く逃げるッス！」と走り出すロイズ

ロイズの言葉がよくわからず戸惑っていた坊ちゃんだったが「チッ」と舌打ちをするとあとを追うようにして部下と走り去って行った

「おれ達もいそぐぞっ」

8話 発覚（後書き）

おそらく次、バトルが入ります

9 話 追手（前書き）

な……長かった……

9 話 追手

side 3 人

「…はっ…はっ、…っ」

朝の人がいない森で3人は走っていた

二人を囲にしてる自分に文句を言いたくなるが今はそんな場合ではない

相手の素性がわからないから呼ばれる援軍の数も予想できない、こ
っちの人数を考えると逃げるしかない

「い…、一旦休みましょましよう。ここまで来ればもう見つからな
いかと…」

木々の生えていない大きな広間にでると、あまりしゃべらない部下
が声絶え絶えに言う

3人はかなり走っていてもうすでに4キロを超え、武器を所持して
るのでさらに疲労がかかっていたので全員賛成で腰を下ろす

「…くっそ！朝からこんな走らせんじゃねえよっ」

「仕方ないっす、ジークさんがあの子を受け持つてる以上こっちは
逃げ切らないと」

「…おまえ、わかってんのか？あいつを犠牲にしてんだぞ！」

「え…もしかしてホントにジークさんのこと知らないっすか？」

真面目に話すのにロイズは“こいつ何言ってるの？”という様な反
応をする

そんな態度に怒ろうとするが部下も「あの人なら大丈夫でしょう」

と制する

「とにかく、ここも早く離れましょう。追手に会わないにしてもここは危険です」

10分の休憩に3人は腰を上げまた走り出そうとする…、そこで知らない声が聞こえた

「それは困る…、あなた達にもしてもらいたいことがあります」

「来たかつ」

「誰っス!？」

予期していない声に3人とも驚きながら声のほうに身構える

すると木々の間から5人の男たちが出てきた、5人とも同じ格好でやはり黒いローブを着ている

（なんでここに現れる!？）

それが3人の疑問である、少女はジークが連れていてこっちの行方は分からないはずだ

「5人か…、人数からして分けてるっスか？」代表してロイズが尋ねる

「いえ、これで全員です」

その言葉で3人に希望が見えた、相手が5人なら例え魔術師がいても突破できる

「こんなに早く見つかるならこっちが最初っスか？」

「あつちは足が遅いようなので、あなたたちのあとでも追いつくことはできます」

よほどの自信があるのか男は不敵にこたえる

「なら話は早え、たつた5人だつたら逃げる必要はなかったぜ」

勝機はあると坊ちゃんが前にでる

「もとよりそのつもりです」

男の言葉で相手は何か唱え始める、やはり相手は魔術師のようだ
距離が離れていたので無暗に斬りかかることができず出方を見る
すると男たちの前の地面にシミがで始めそれが徐々に模様のある
円をつくる

「これは、…まさか召喚陣!？」男たちの魔法に気付いたロイズが
驚いて叫ぶ

「なにっ?止めるぞ!!」

「はっ、もう遅いつ」

そして陣からでた黒い霧がはじけた

s i d e e n d

3人と別れた後自分たちはべつのほうへ進んでいた、これで両方が
追手に会う確率は下がる

本来ならばして走りたいがエリイに合わせてるため遅くなっている

「無理しなくていいぞ、休むか？」

心配して尋ねるおれにエリイは顔をよこに振る

「大丈夫…早くしないと追いつかれる」
「そうか…」

つらい顔をして断るエリイに胸が痛む

（くそっ…、おれがちゃんとしてれば）
「…ちがう、これは私のせい。だから気にしないで」自分を責めるようにエリイが言う

顔にでてしまったらしく逆に言われてしまった、励ますのはおれのはずなのになんてバカなことしてんだ

「心配すんなって、こう見えても“すごく”強かったりするんだぜおれ」

誤魔化すように頭をなでてやった

そして招かれざる客が現れた

「探しましたよ巫女」

男の声にエリイは固まり、おれは守るように前へ出る

（来たか…）

「あなたが巫女をそそのかした方ですか…、まったく面倒なことをしてくれる」

男の言葉に手に力が入るのが分かる

そそのかす？ふざけるな、それじゃあまるでエリイは死にたいと願っていたとでも言うのか・・・

「そそのかす“？馬鹿言うんじゃないやねえ。普通に生きようとしてるだけだよ”

「それはいいけません、彼女には役目があるのです、…そしてあなたにも手伝ってもらおう」

「はっ！てつとり早く“死んでくれ”って言えば、回りくどいんだよ”

相手はあまり時間をかけたくないのか少しの沈黙を置くと「…やれ」と合図する

5人で同じ詠唱をしている様子を見るとそれは召喚魔法だと分かった

「デメエらが出す奴なんてたかが知れる、さっさと出せよ…」

挑発する俺に相手は笑いだす

「そうですか、ではご覧いただきましょう。……出る『ベヒモス』」

すると陣から出た黒い霧がはじけるとそれは姿を現したそれを見たエリイは「ひっ」と悲鳴を上げ震えている

高さはざっと3メートル、全長はもつとあるだろう

4本足で黒い巨体を覆う筋肉でできた天然の鎧、頭から背中にかけて荒々しく生えた獣毛、ギョロリと動く大きな黄色い目、大きく開きそうな裂けた口にズラリと並ぶ牙、そして目の上に生えた2つの

大きく捻じれた角

魔獣といわれた化け物がそこにはいた

「ベヒモスだと！？クラス5の魔獣じゃないかつ」

騎士団が総出でやっと討伐できる化け物だろつ、…そうか、だから5人同時詠唱してたのか
驚くおれに男は額に汗をながしつつも笑って告げた

「ふはは、さつきはあっけなく終わってしまいましたからね。あなたは頑張ってくださいよ」

「…さつきだと？まさかおまえつ？」

なぜだつ、そうならないために2手に分けたのに。

コイツら確実に全員捕まえるためにあいつらを優先したのか！！

「ええ、3人は先にやらせてもらいました。実に呆気なかった」

よく見ればベヒモスの角は赤く濡れている、3人はあれに貫かれたのか…

「…おい、テメエ覚悟できてんだろつな」怒りが立ちこみ殺さんとはかりに男を睨みつける

「やる気ですか？あなた一人で？」

気圧されるような殺気を受けて少し怯む男だがそれでも平静を保つ

て聞き返す

「だめっ！にげて！！」

エリイが声を上げて必死に止めようとする、人の本能がアレには絶対勝てないと悟っているのだろう

「だめですよ巫女、あなたにはこの方の最後を見てもらいます」

相手はそれをあざ笑うかのように勝ち誇った笑みを浮かべて言う

フシュウと荒く息をたてるベヒモスは狙いをジークへと向ける、目標は背中の大剣も構えずに下を見ていた

「エリイ、離れてろ……」

「ダメ！ジークが死んじやうよっ」放さないとばかりに抱きついてくる

「信じる、大丈夫だから、なっ。それに言っただろ？おれって“すごく強いんだぜ”」

いつもと変わらない笑顔で言うおれを見てエリイはしばらくするとスッと離れ「絶対…勝って…」という涙を流して下がっていく

「もういいんですか？」

「ごたくはいいからさっさとしろよ」

「いいでしょう」

男が指をパチンと鳴らすとベヒモスは猛烈な勢いで地面をかける、

その突進はもはや何にも止められない
それを前にしてもジークは避けようもしない
あと数瞬でのところでエリィはおもわず顔を両手でおさえた

.....

side エリーナ

「...ば...、バカな...」

男の驚きが聞こえる
少しずつ手をズラすとそこにはベヒモスの後ろ姿があるがジークの
姿は見えない

(やっぱり.....、...えっ)

よく見ればベヒモスの下には地面がえぐれて長い2本の線がほどで
きている。それはさっきまではなかったものだ
そもそもあの勢いで走っていたベヒモスがあれだけの距離で止まれ
るはずがない

じゃあジークはどこへ行つたのか

「ブオオオオオオオオオ!!!」

ベヒモスが叫んでいるがそれは驚きの故、今まで止められたことのない必殺がたかが『人間』に止められたのだ
そしてベヒモスの向こうで声が聞こえる

「おい……、こんだけか？」

10話 ジークの力（前書き）

時間が…

10話 ジークの力

side 男

(…ありえない、ありえないっありえないっありえないっ！！)

目の前の光景にその場にいる自分を含めた全員が驚愕する

視線の先にはベヒモスの角を両手でつかんで突進を止めた男がいる。普通ベヒモスと戦うなら(まず滅多にいない)まずベヒモスの最大の攻撃である突進は避けてそこから攻撃をする。素手で受け止めるなんて聞いたことがない

本当なら一撃で男をしとめてそのあと巫女を生贄にささげるだけだった。たったそれだけで終わる楽な作業だったはずなのに…

「何なんだアイツは!?!」

焦りを隠せず声を吐き散らし答えを探して巫女を見るが自分たちと同じように驚愕して言葉をなくしている

衝撃の光景に魔獣も驚愕してるのが魔力をとうしてわかる

「何をしているっ！早くそいつを殺せ!!」

増加した魔力で力を増したベヒモスは渾身の力で頭を振り払い、男もベヒモスの急な変化に手を放して後ろに飛んで距離をあけた、おそらく耐えられなかったのだろう。

「放したなっ、はっ今度は止めれると思わないでくださいよ！」

「ああ、メンドイからな言われなくても普通に戦ってやるよ」

そついうと男は大剣を構え不敵に笑った

s i d e e n d

先ほどよりも力を上げたベヒモスの突進を今度は受けずにかわしどれくらい力が上がったのか確かめる。

その行動が逃げの姿勢だと判断した男たちが余裕を取り戻す

「そつだっ、そのまま引き殺せ！！」

何度かすれ違いスピードや威力を見るが結局それは自分の脅威にならないことが分かりジークは仕掛けることにした

勢いが止まらず進むベヒモスを追撃して攻撃を仕掛けようとするがそれよりも早くベヒモスは反転して両前足を振り上げおれが来るタイミングに合わせて振り下ろす。その威力に地面にヒビがはいり小さなクレーターができるほどだ。

バックステップで後ろに避けたが攻撃の衝撃が地面を揺らしおれが体勢を崩したところにベヒモスは角で刺すように頭を突き出してきた。迫る角を大剣を当ててはじき堪えきる

接近戦に持ち込み横に回りこんでこっちのペースにしようとするがベヒモスはその巨体に似合わない足さばきで向きをかえたり、ときには壁のような体でタックルをかましてくるなど割と賢いようだ

決定的な攻撃ができていないがそれでもときどきジークは大剣ではなく素手で殴ったり、回し蹴りを放って着実にダメージを与えてベヒモスを傷つけていく（むしろ武器よりも生身の体で魔獣にダメージを与えていた）

「そこだっ！」

そして生まれた隙を逃さず横に回るとガラ空きの横っ腹に大剣をたたきつける

斬るつもりだったが体が剣よりも頑丈らしく浅い傷しかつかない。

さすがは魔獣といわれるだけはある。

悶絶するベヒモスだがすぐに前足で後ろ蹴りをする。真横からの攻撃に間に合わず大剣を盾にして防ぎ2メートルほど飛ばされるが着地してすぐスタートを切りベヒモスもちらに体を向けるがまだダメージが残っていて次の行動が遅れる。そしておれは頭めがけて飛び大きく振り上げた大剣を振り下ろし“バキンッ”という大きな音が響き5分も満たない戦いが終わりを告げた

沈黙の後地面にザクツと大きいとがったものが刺さる。

それは捻じれた角であった。

ベヒモスにとってはいくつもの敵を貫いた勝利の象徴そのものであり、それが折られたと同時に闘争心も碎かれ敵は自分“が”殺す相手から自分“を”殺す恐怖の対象となった

「ブ、ブオオオオオオオオ！！」

雄叫びから悲鳴になった声を上げベヒモスは向きを変える。その先には召喚陣がある、逃げているのだろ。その光景を見て男が「ま、待てっ」と制するが恐怖一色に染まったベヒモスにはその命令が届かない。

…その姿を見るジークの目は冷たくさめていた

「普通だつたらメンドイから無視したけど…、お前には仲間を3人やられてるからな。

…悪いが今回は逃がすわけにはいかない」

そう言い放つと走り出し大きく飛んで大剣を振りかぶり召喚陣目がけて投げつけた

ザンツと音をたてて大剣は陣に深く突き刺さり召喚陣は消える

「きつきさまっ、なんてことをしてくれる…！」

召喚陣が消されたことに男達が焦り始める。ベヒモスが負けたこともあるが召喚陣が消えたことでさらに顔を青くしている。

召喚陣には空間をつなぐものであると同時に召喚者とその呼びだされたモノをつなぐラインの役目もしていてそれにより召喚者は使役することができる

…つまりそのラインが消えた今ベヒモスには敵味方の区別はない、ただ目に映るものを破壊するだけの野生の魔獣へと戻ったということだとだ

そしていま目に映るのは黒いローブで体を包んだ人間が5人…、どこからか「ヒッ」という小さな声を合図にベヒモスは駆け出す。

結果…ベヒモスの残った捻じれた角は再び赤く染まった

・・・・・・・・・・・・・・・・

そして再びベヒモスの目に映るのは同じく黒いローブを着たエリイ。エリイは自分が見られてることに気付くが殺気を当てられ動けない。

そしてベヒモスが駆ける。…だがエリイは絶望していない、なぜなら今は自分を助けてくれる人がいるから、ジークが自分を助けてくれるから…。

そしてその信頼に応えるように突進してくるベヒモスの前に大剣を手にしたジークが立ち塞がり、今度は今までにない力で”ズウンッ”と風切り音を上げてベヒモスに振り下ろし……決着はついた

11話 自由そして選択（前書き）

今作者はテスト中により更新が遅れているとです…

11話 自由そして選択

最後の一撃にベヒモスは脳天を潰されて絶命し、その巨体は音をたてて崩れ落ちた

「…ふう、手間かけさせやがって」

辺りには無残な状態になった男たちの死体が転がっている。本当は死なせるつもりはなく捕まえて受けるべき罰を与えるつもりだったのだが…

「結局自分の召喚獣にやられるなんて、ふざけてんじゃねえよ…」
逃げられたようで何だかむなしくなってきた吐き捨てるように呟いた言葉がその場にさびしく響く

「大丈夫か…？」

気を切り替えるために笑ってエリイの頭をなでようとしたら手に違和感を感じて伸ばした手をひっこめた
見てみれば手はボロボロになり血で赤くなっていた。突進を素手で受け止めた結果だろう

「あっ」

手の怪我に気付いたエリイは心配した顔をして駆けよってきて両手でつつむようにおれの手をとり目をつむった、するとエリイの手が温かくて白い光を発した

「お、おいつよこれるぞ！…ってアレ？」

驚いて手を離すとボロボロのはずの手がなんと元に戻っている

「これは… 治癒術？ エリイおまえ魔法使えたのか？」

そういえば巫女と呼ばれていたから当然といえばそうかもしれない

「うん。でも攻撃魔法は教えてもらえなかったからできるのはこれだけ…」

「いやでも凄いぞ？ ありがとなっ」

「……うんっ」

顔をほころばせるエリイを今度はちゃんと撫で本人は慣れたようで気持ちよさげな顔をした

ずっとジークにまかせっきりだったため少しでも役に立ててうれしいみたいだ

そこからすぐ近くで遺体となった3人を見つけた。儀式で使うつもりだったため男たちが運んだのだろう

3人ともボロボロで体に大きな風穴があいている。それぞれの横に立つと遺品になりそうな物を見つけて回収し、連れて帰れないから埋めることになった

「ロイズ…………… B & a m p ; B、ごめんな助けてやれなくて」

埋葬の準備をしているとエリイが3人に償いがしたいといって近づいて座り込むと魔法を使ったのか傷だらけの体についた汚れを落としてキレイにしてくれた（本人曰く精霊さんに頼んだそうだ）
そしてエリイは埋葬の間ずっと目を閉じて祈るように待っていた

それから身支度を済ませエリイと向かい合い考えていたことを聞くことにした

「エリイこれでおまえは自由だ、もうおまえを縛る物はない、けど…どうする？」

「えっ」

その質問にエリイはこたえきれずに下を向いて考えだす。どうやらさっきまでのことで頭がいっぱいで考えてなかったらしい

（ハア、やっぱおれっておせっかい焼きなんかな）

答えが見つからず目に見えて暗くなっていくエリイを見ておれは微笑みながら手を出した

「おれと来ないか？」

「えっ？」不安そうだったエリイの顔に光が戻りこっちを見る

「さすがにこんなカワイイ子を一人にするなんてできない主義でね。まだおれのことを頼ってみないか？」

やさしく言った言葉がエリイの中に響く、そしてふるふると体をふるはせ目には涙が浮かんでいた

「おっおい、もしかして嫌だったか？」と予想外の反応にジークがオロオロする

「私もジークと行きたい！！」

それは今までの少女とは思えない張った声で晴れた顔をしていた

「ああ、よろしくなエリィ」

11話 自由そして選択（後書き）

やっとこの話が終わった

12話 帰還

「あつジークさんおかえりなさい」

都市についたおれらはまずギルドに向かった。相変わらず受付で笑顔を放ちながら迎えてくれたティーナちゃんを見たら帰ってきたんだなと実感する

「あれジークさん、ロイズ君とデルさんとラツカさんはどうしたんですか？」

「依頼は無しだ、そのことで話がある」

いつもと雰囲気の違い真剣なジークの表情にティーナは何かを感じ場所を変えましようと思立った

（あいつら『デル』と『ラツカ』って名前だったのか…）

「そう…ですか。じゃあ、あの人たちは」

頼まれた依頼の真実の目的、彼らの正体、そして大切な仲間の死を同時に知らされティーナはうつむいて何かをこらえように手は強く握りこんでいる。彼らを誘ったのは彼女でありその責任を感じているのだろう

「ごめん、助けてやれなかった。それと…これを身内の人に頼む」

そいつって回収していた彼らの遺品となる装飾品を取り出して落ち

込んでいる彼女へと渡した

「はい…確かに受け取りました。責任を持って送り届けます」

それを受け取った彼女は力強く答える。

「ああ、頼んだよ」

ひととおり話し終わると気を変えるようにティーナちゃんがおれの隣に座るエリイへと視線を送る

「それでジークさん、その女の子ですがどうするんですか？」

「それだけど…おれが面倒を見ることにしたよ、エリイも嫌じゃないみたいだからな」

「そうですか、でもジークさんならきつと大丈夫ですね。ちゃんと守ってあげて下さいね

……… 変なこと しちゃだめですよ（ニコッ）」

笑ってるはずの彼女の背後には鬼の顔が浮かび上がってなんかどす黒いオーラが見える

（ちがう！なんかいつもものやつと違う！？）

「し、しないってイヤマジで。…だからそのエガオをやめてください」

注意（という名の命令）をしてくる我らが看板娘に恐怖を感じ敬語でお願いする

ぶつちゃけべヒモスよりこっちの方が怖い、てゅーかエリイが怯えて腕つかんでくるんですけど…

（あれ？それなりにシリアスな場面だと思っただけど…）

慌てているジークを見てティーナが「冗談です（ニコツ） 戻った」といって席を立つと今度は真剣な顔をしていた

「今回のことは周辺のギルドや上へ報告します。少しは例の信者たちへの警告になると思います。ジークさんたちはゆっくりと疲れを癒してください」

話を終え二人がギルドを去る、いつもは騒がしい建物が今日ばかりは沈黙を放っていた

（1週間後）

「ジークーはーやーくー！」

皆さん久しぶり、ジークです

たったこれだけのセリフだと今誰がしゃべったのかさすがに誰かわからないだろう？

そしておれがなんでこんな質問をしてるのか、そんな疑問に答えてやろう

それはおれも少しびっくりしてるからです

そしてこの元気にはしゃぎながらおれを急かしているのは誰かというと・・・

・・・エリィだ

13話 発見

ギルドへの報告をすませるとおれたちは真っすぐ家へ直行してそのまま一先ず寝た

お互いけもの道を歩いてきたのでクタクタなのだ

「次の日」

おれはエリイを連れて都市を巡り歩いた。新しく暮らすことになる土地の紹介を兼ねてエリイの服など日常品を買っていた。（だって持ちモノが今着てるものだけだぞ）

おれには見慣れた光景だがエリイにとってはどれも新しい発見で驚いている。本人は世間に疎く本など呼んだものばかりだったらしい。

ときどきおれの手をとって「あれはなに？」と目を輝かせて聞いてくる姿は子供のようにでんだか妹ができたような気分だ。初対面の時と違い口数も増え笑顔が出ている、本来の性格が戻ったのか新しい生活に自分を変えようとしているのか、どちらにしても良い変化に違いない

「けっこう歩いたなあ。エリイ、メシ食うか？」

「うん。何食べるの？」

「昨日までおれたちまともに食べてないからな、…そうだな肉でも食べてみないか」

「ニク……肉？」

「そう肉。どうせ今まで肉も禁止だったろ？ うまいんだぜーあのそ
 するような肉汁に癖になる味は説明できん、これこそ食わなきゃ人
 生損つてもんだ。…食うか？」

「食べるっ」 即答かよ

まだ知らぬ未知の味にエリイは期待を膨らませウズウズしている。

（意外と食いしん坊なのかもな）

そんな事を想像するとなんだか笑えてきた

のちにジークは語る

「肉は勧めなきゃよかった……」

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

「モグモグ……」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

騒がしいはずの酒屋では静かに緊張が走りその場にいる全員が同じ場所を見ていた

そしてその状況を作っていたのは1人の少女だった

「モグモグモグモグ……」

「……………」

「ゴクンッ……………」

（ドキドキドキ…）

「……………おかわり」

「ぬつがああああ！！マジかっ？またかっ？まだ食うのか！？」

無情に告げるエリイの言葉にとうとう耐えられず雄叫びを上げて立つてしまった

なおも食べたいというエリイの前にはキレイに平らげられた皿が10枚ほど積み上がっていた。

それをこんな女の子が1人で食べたとはとても信じられないがこの目で見てしまったため認めるしかない

だって最初運ばれてきたときにダロンに声掛けられて1分ほどで済ませて振り返ったら

何もなかったんだもん「…………肉は？」って聞いたら「すごくおいしかった」って凄い輝いた顔で言われたよ。

よほど腹が減ってたんだと思ってさ「そんなにウマかったか。食いたいならいっぱい食っていいぜ」なんてカッコつけて言わなきゃよかった！

もともと買い物が目的だったので財布にはそれなりの余裕があった

のだがエリイの底なしの胃袋を見て次第に皿が積み上がることにチラッと確認してしまう

「ジークは“いっぱい食べていい”って言ったよ？」

「限度があるわっ！おまえスッゴイ特技もったのなっ？、こっちが腹いっぱいになるわっ！

っ！かあん時質素なパンとスープだけだったろーが！！」

明らかに『努』の感情を見せるおれにエリイは残念そうな顔をしてうつむいた

ちよつとやりすぎたか

そして再びエリイが顔を上げると目に涙を浮かべていた

「・・・・・・・・だめ？」

結局あと10枚も食われてやっと地獄から解放されたジークだった

「今度もまた行こうねっ（ニコッ）」

「……そうだな。当分はお預けだ」

燃え尽きたよ……おれも……金も……。

……

気持ち良さそうにベッドで眠るエリイを見て「やっと寝たか」とため息をつく

エリイのハラハラさせる行動はあれだけではなかったということだ

ほんとにあの時の無表情からは想像できない

夜エリイの日常品を整理し、「買って来た服を試しに着てみたら？」と言ったら

突然エリイがおれの目の前で躊躇なく服に手をかけて着替えようとしたので慌てて止めた

「ばつ馬鹿！ここで脱ぐな！？」

「？」

エリイは「え、なに？」と不思議そうに聞いてくる

どんな生活を送ってたんだろうか

こいつを育てたあいつらをマジでぶっ殺したいと思った

（ハア、こりゃ別に教えることがたくさんありそうだ）

・・・つーかおれの方が持つのだろうか？

13話 発見（後書き）

追加

・エリイは肉好き

おまけ その2（前書き）

先の出来事を別視点で書きました

おまけ その2

ある日僕は1人の女性と出会った。

長く伸ばした金色の髪を頭の後ろで1つに結んで

顔はうつむいていて見えないけど服は貴族のような黒いドレスを着ていた

他に分かったことといえば彼女が泣いていたこと

そんな彼女につい声をかけたのが始まりだった

「ねえ、大丈夫？」

・・・しかし

「気安く話しかけるな下郎！！」

いまだに僕はこのとき彼女はホントに泣いてたのか自信がもてない

・・・

鉱山資源で有名とされる都市『リッガル』

昼間に人が行きかう道の中でマントを頭までスッポリかぶった奇妙な2人がいた

とうりすぎる人から奇妙な目で見られているが2人は気にすることなく何かを話していた

「おいジェスさつき頼んだ食いものはまだか？私は腹が減った」

「待ってって言うてるでしょエリス。だいたい僕たちは追われてるんだから少しは我慢してよ」

「そんなの知らん。いいからさっさと行ってこいっ！」

どうやら内容は普通（？）のようだが察するにあまり仲は良くなさそうだ

「もう、わかったよ。ちょっと行って来るから絶対ここから離れないでね。」

知らない人に話しかけられてもついてっちゃだめだよ。それから……」

「いいから早く行け！おまえは母親か！」

「はいはいわかったから。まっけて「何すんだこの餓鬼！！」……」

騒ぎの出所をみるとそこには冒険者風の大きな2人の犬顔の獣人（男）が2人とそのすぐ前で尻もちをついた白い色の髪をしたきれいな女の子（僕と同じくらいだろうか？）がいた。片方の男の腹のあたりが何かのソースで汚れている。

少女は手に串が刺さった肉を持っているのを見るとおそらく少女がぶつかってその拍子に汚してしまったのだろう。

「おい、どうしてくれんだよガキ。これまだ新しいんだぞ！それを汚しやがって

……ん？よく見ればお前良いツラしてるなあ、どっかの貴族の子か？

ならちようどいいこれ弁償してもらおうか」

「ご、ごめん……なさい」

「謝罪はいいから金出せって言うてるんだよ！」

もうこれはカツアゲに近いな

男は自慢の一張羅を汚されたことに激怒して一方的に怒鳴りつけていて少女はそれに怯えながら謝っているが許してもらえず今にも手に持った財布を取られそうだ。

だが周りの人は我関せずとそれを避けて歩き誰も男を止めようとはしなかった。

その光景にエリスはつまらないようなものを見る目で見ていた。

「おいジェス、あの子が持つてる食いものは何だ？」

「クニールっていう味付けして焼いた肉を串に刺した一般的なものだよ。それがどうしたの？」

「ふむ、私はあれが食べなくなってきた。あの少女に聞けばどこにあるかわかるだろう

ジェス、行つて聞いて来い」

つまりそれはあの子を助けて来いといううことなのだろうか・・・

「でもエリス、あの2人見るからに獣人で強そうなんですけど・・・

」

僕はまだ15歳だよ

「それがどうした、お前も戦士だろう。安心しろいざとなったら助けてやる」

「それって僕が行く意味ないじゃんつ。心配なら自分g」いいからさっさと行け」はい！」

え、情けない？しょうがないじゃん。だってあと数瞬でアイアンクローが決まってたんだもん

もう、根はいい人なのに性格が歪んでるんだ

「あのう、すみません」

「ああ！なんだガキ、俺は今お取り込み中なんだよ。シッシ」

勇気を出して言ってみたが全然相手にされず軽くあしらわれてしまった

だが見なかったことにもできないのでつづけて言う

「大の大人が女の子に怒鳴り散らすなんてみつともないからやめましょうよ」

それなりにやさしく包んで伝えたが頭に血が上っていた男にはただの悪口にしかな聞こえず逆切れを起こしてきた

「なんだと人間？じゃあなんだ、お前らが何かしてくれるって言うのか」

「え？“お前ら”？」

「後ろのそいつも仲間だろうがよ、同じ格好してんじゃねえか」

相手の指摘に後ろを向けばエリスがいた

・・・てあれ？明らかに僕たちから半径4メートルに人がいない。危険な空気に皆非難を始めている

「ちょうどいい、こっちはストレスがたまってたんだ。ちょっと相手してくれよ」やばい

「説得失敗しちゃった！どうしよう!？」

相手が獣人じゃ分が悪い

「やはりこうなったか、やれやれ仕方がない」

そうするとエリスは片手を前に出して魔法を使おうとする

「やはりつて、……ってだめだ。力を使ったら居場所が知れる！」

僕の声に反応してエリスは固まった。

するとそのすきにもう一人の獣人が素早くエリスに接近した

犬型の獣人のスピードは俊敏で僕は止めることが出来ずに油断したエリスが拘束されてしまった

「くそつ、放せ！」

「あつぶねえ魔法使えんのかよ、だがこれで使えねえ」

エリスは暴れて抵抗するが獣人の力は子供が対抗できるものではなく意味をなさない

それに暴れてたせいで顔を隠していた部分のマントがとれていた

「おい、こっちは抑えたからソイツもうやつちま……え……よ？」

一気に形成逆転したはずのエリスを拘束した男が僕を見て不思議そうにしている

いや、正確には僕の後ろの光景に驚いていた

「いやーうちの連れが世話になったみたいだな、お礼ならおれが代わりにやってやるよ」

そこにはいつの間にか高めで笑顔の青年がいてその足元では少女に怒鳴りつけていた男が悶絶して沈んでいた

14話 支度(したく)

あれから1週間がたった

エリイは見違えるほど明るくなって感情がだせるようになっていた
(もういちいち『…』て打たなくていいくらい明るくなったな)

近所の人達にも受け入れられ今ではおれの妹として扱われてる

・ ・ ・ 近所のガキ達と一緒に遊ぶのは精神レベルが近いから
だろうか

ただ昔の習慣が抜けないのか朝起きたら1分くらい窓の前で祈った
り食事の時にもそれが少し出てしまっている

本人にとっては癖みたいなもので別に強要して止めるなんて言
わなかった

ちなみにエリイが自分もギルドに入りたいと言ったのでギルドの仲
間となった

その時の野郎どもの反応ときたら

「ヒヤッホーウ！美少女来たー！」

「いくつ？おれとパーティー組まない？」

「どけっ俺が組むんだ！」

「ティーナちゃんもイーけどこっちもスゲーぞ！」

「おいっ、なんでジークと一緒に連れてきてんだ！？」

「しょーかいしろっ！！！」

男たちの波に気圧されてエリイは俺の後ろに隠れるようにしがみつ
いてる

(コイツラヤツチャオウカナ)

さすがに頭に血が上ってきた

「チレ・・・ヤルゾ」軽く殺気を飛ばす

ホントに蜘蛛の子のように散る男たちは何とも言えない光景だった

エリイはもういくつか依頼と一緒に受けているが主に都市内での手伝いだ。実践はまだいいだろう。

魔法の才があるというのはわかったがあいにく教えてくれるやつがないので

唯一使える治癒術を役立たせていた

護身用で使えるよう誰かに頼みこんでみるか

「あつ、そういえばエリイ今日から別の都市に行くぞ」

「べつのところ？えー、なんで？」

こいつ言うようになったなあ

「ああ、『リッガル』って言ってなそこは鉱山資源が有名でな。頼まれモノがあるんだよ

ほら、あのちっちゃいジツちゃん」

「あつ、おじいちゃんだね？」

エリイが『おじいちゃん』と呼ぶのは鍛冶屋のじっちゃんのこと
いやあ、連れて行った時は面白いものが見れた

回想

「ちーっすジッちゃん」

「“ちーっす”じゃねえ！お前いいかげんに・・・て、そのこ誰だ？」

おろ？怒んなかった？

視線の先には目をキラキラさせたエリイがいた。なんかウズウズしてる

「エリイって言います。わあちっちゃいんですね『おじいちゃん』」
「ぶー！」

今こいつは何といった？

ジッちゃんは見た目があれで現役バリバリで怒鳴り散らすから誰も『おじいちゃん』なんて言ったことがないしジッちゃんも年寄り扱いされるのを凄く嫌がる

「なっ、誰がお？」うわあ、ちっちゃいのにムキムキですごーい」
・・・むう」

怒ろうとしたジッちゃんだがエリイののほほんとした空気に負けて声が出せないたようだ

相手が怒ろうとしたにもかかわらずエリイは小動物のような雰囲気を出してはしゃいでる

（ジッちゃんが負けた！？）

まさかのエリイの勝敗に驚愕する。

ほう、ジッちゃんはこのタイプはだめなのか。

だつたら今度来る時もエリイを連れてくれば・・・「ゴスッ」

「いてえ!？」

なんで殴られた!

「テメエは顔に出すぎなんだよ」

「くそう、いいぜ!このことギルドで言いふらしてやるう!」

「ちよっ、おい!」

「行くぞエリイ!じゃあなージツちゃーん」

「あの・・・よろしくおねがいます!」

して退散

残されたジツちゃんはポカーンとしていた

回想終了

「そ、ジツちゃんの頼みモノ。さあ準備するぞ」

「むー、昼からフェレ君たちと遊ぶつもりだったのに」

プーと頬をふくりますその顔はまるでリスのようで保護欲がわいてくる

・・・仕方ない

「あー、そーいえばリッガルにはクニールっていゆー『肉』のメシがあつたなー」

ピクッ

串に刺さつてて食べやすくってうまいかつお手頃でいーっぱい食えるのになー。

シュンッ

そーかーエリイは行かないのかー。残念だったなー、行きたくない

ならしょうがないかー

サッ
」

そういつて振り向くと

「ジーク何してるの？早く行こう」

もうすでに支度を終えているエリィがいた

（金は多めだな…）

14話 支度(したく) (後書き)

今日中にまた投稿したいな

15話 鉾山の都市『リッガル』

side エリイ

リッガルには馬車を使って3時間ほどで着いた。

本当は近所の子たちと一緒に遊んでいたかったのだが聞き捨てならないことを聞いてジークについていくことになった。

お肉をもち出してくるなんて卑怯だ。

でも、“安くていっぱい食べれる”というのでがんばろう 何を頑張るというのだ

ジークは馬車の中で何故か私を見ながらしきりに財布を見ていた

「大丈夫だよな?・・・さすがに足りるだろ。・・・でもな・・・」

なにか考え事をしているようなのでそっとしておくことにした

着いたと言われ馬車から下りると鉄と土の匂いがした。

私たちがいた都市ほどではないが人でにぎわっているところが似ている。

都市のすぐ後ろには大きな山がそびえ立つように連なってる。

私たちが住む都市を『海の都市』と例えるならここは『山の都市』だろう

とうりすぎる人は比較的男性が多く筋肉質な体をしている。

「ねえジーク、ムキムキがいっぱいだよ」

「ぷつ、ここは炭鉱で食ってるやつが多いからな、必然的にそうなるんだよ。」

ほら向こうにデッケー山があるだろ？みんなあそこで働いてるんだ。あとはそこで取れた鉱物を他の都市に運んだりここにいる腕利きの鍛冶屋がそれ使っているんなモンをつくるんだよ。

だから武器も安かったりしてな、ここで1本買うつもりなんだ」

ジークは私の素直な発言に笑いながら答えてくれる。

並んで歩いていると急に良い匂いがしてきた。……これは！

「おつ、あつたあつた。エリイ、お待ちかねのクニールだぞ。

金を渡しとくから好きなd「10本くださいっ！」って早、えっ10!？」

ジークが言い終わる前にはもう頼んでしまった。

店員は私の急な注文と10本という数に目を丸くして驚いていた

「じゅ、10本はさすがに……。あつもしかしてお嬢ちゃんはおそろこの兄ちゃんと食べるのかな？」

なら納得とうなずく店員だったが私が「ううん。私1人だよ」というとさらに固まってしまった

「おいおい、別にいいけどそんなに持てるのか？持ちやすいように串に刺してるのに」

そんなに持ったら意味ねーだろう。……すみませんやつぱ2本で」

「2本じゃ足りないもんっ」

「いや、威張って言うなよ。少しずつ食べればいいだろ。ほら」

ジークは受け取った2本のクニールを1本と膨らみのある袋を私に渡すとどこかへ行こうとした

「あつ、私のお肉!」

「そこかよ!? 別にいいだろまだあるんだから。ちょっと用事済ませてくるからこちら辺で待ってるよ」

そういつてジークは手をふりながら去って行った

「すいません。もう1つください」

「あはは、はいよ嬢ちゃん。熱いから気をつけてね」

.....

それからジークはちょっととしても帰ってこない。暇だから探検してみようかな?

もともと好奇心が強いエリイは周りのものに興味を引かれていてずっと我慢していたが

堪えきれずにその場を離れてしまった。

「~~~~」

ここはあの都市とは違うけど不思議なことがいっぱいあって楽しい。ジークがいないのは不安だけど我慢するでしょう。

このときエリイは鼻歌交じりにスキップしていて周りを見ていたの
で前への注意が散漫になっていた。
そして前に立っていた獣人2人に気付かずにそのまま「ボスッ」っ
とぶつかってしまっただった。

s i d e e n d

s i d e ジーク

（あー、思ったより時間がかかってしまった）

用事というのは武器の調達のことと武器屋に行っていたのだ。
当然買うのは大剣なので安くなると言っても金がかかるので頑張っ
てまけてもらってたのだ。

「ここら辺だったな。……あれ？いなくね？」

見渡してもエリイの姿が見えないのでクニールを売っていた店員に
聞くことにした。

「なあちよつと、さっきまで白い髪の女の子がいたはずんだけど
知らないか？」

「あー、あのすごい嬢ちゃんね。ほんとに10本平らげるんだから
驚いたよ。」

あつ、居場所かい？そうだねえ、さっきここを離れて向こうにスキ
ップしていったよ」

（そういえばあいつは好奇心の塊だったな。1人にしたのは失敗だ

ったか)

「そうかありがとなっ」

「いいえいいえ、それとここはゴロツキがいるのも有名だからね。気をつけて」

店員の言葉が不安をあおる。

そういえばあいつの底なしの胃袋を考えて多めに金渡したし何よりあの容姿だから獲物にもってこいだろう。考えれば考えるほどいかなことしか浮かばない。

そんなことを考えてると歩行人がとんでもないことを話していた。

「おい、あれ大丈夫かよ。相手は獣人二人だったぜ？」

「確かに、それにあんな少女が獲物じゃ」「おいあんた!!」「うおお!!な、なんだよ兄ちゃん?」

「その少女って白い髪をしたきれいな子だったか!？」

「なんでそんなの、あ、ああ。確かにそんな子だったよ」

間違いないっ!!

「そこに連れてけ!!」

有無を言わず案内してもらつとそこは人だかりの中にぽっかりと空間が出来ていた。

見ればガラの悪い犬型の獣人が2人いて1人はエリイの手をつかみ財布を奪い取ろうとしてその前に何か話しているマントの人が何か話しかけている。

もう一人の獣人は後ろに立っていたマントの人に接近していた。

おそらくマントの2人がエリイを助けにくれようとしたのだろう。だがすきを突かれて1人のマントが捕まり一気に勝負が決まってしまったようだ。

エリイを見れば怯えながらも必死に抵抗して頑張っていた。

・・・もうあれだね？ヤツチャツティイヨネ？

我慢の限界に来たおれは“おそらく…”の時にはすでに行動を起こしていた

チヨンチヨンとエリイをつかんでいた獣人を後ろからつつく

「あ？なんだよ！外野はすつk「ドスツ」・・・っが」

「っ！ジークー！！」

我慢の限界だったのはエリイも同じだったようで俺にしがみつくと泣き出してしまった。

乱暴に耐えていたせいでエリイは体を土で汚し顔も涙でグシャグシヤである。

絡まれたのが獣人なのでさらに怖かっただろう

「おい、こっちは抑えたかソイツもうやっちま・・・え・・・よ?」

向こう側でもう1人の獣人がこっちを見て不思議な顔をしている。

今おれはどんな顔をしてるのだろうか

「いやーうちの連れが世話になったみたいだな、お礼ならおれが代わりにやってやるよ」

・・・まあシケイは確定だな（笑）

16話 オシオキのちに出会いそして正体（前書き）

キャラ設定追加します

16話 オシオキのちに出会いそして正体

「さて、そこな獣人さんや。覚悟はできてるかな（ニコツ）」

そこには沈黙が出来ていた。立っている獣人は何が起きたか分からず顔を白黒している

「なっなんだよ teme - ! ルドに何しやがった! ?」

「べつにー。ただ殴っただけですけどー。へーこの犬さんはルドくんっていうのかー」

ジークは場違いなまの抜けた声で相手を馬鹿にするように答えた・

・あ、倒れてる獣人を踏んでる。

仲間がやられてるのを見て獣人は拘束していた人を放してせめよってきた。

「殴った？ふざけるな！普通の人間が獣人に素手でやれるわけねーだろ！

仮にも俺達は6階級なんだぞ!!」

「わーすごいねー。でもなんできみたちはこんなことしてるのかな？」

不気味なほどに笑顔顔を張り付けて拳をボキボキ鳴らすジークはまさに不気味だった。

異常な雰囲気纏うジークに獣人の野生の感が“こいつはヤバイ！”と警告をつける。

「そ・・・それは、そのガキが・・・俺達にぶつかってきたから」
「まあそんなのはどうでもいいさ。俺が言いたいのはな・・・」

押しとどめられた怒りが爆発しジークは獣人に殴りかかった

「エリイにアザができたらどうしてくれんだコノヤロー!!!」
「ちがつそれはダメーがやったルd「ドギャツ」ギャイン!」

問答無用の『ジーク怒りのアップー』をあとにモロに喰らった獣人は人混みの頭を越え

きれいな放物線を描いて10メートルほど飛んでいった。

人々が見つめる先には大の字になって1発KOしている獣人。

本人は獣人で6階級だったらしいがあのとんでもないアップーは見事に決まっていた。

・・・生きてるだろうか？

・・・

かくしてカツアゲ事件を済ませたジークは助けに入ってくれた二人組と一緒に食事をしていた。

マントの2人はもう頭を隠してはいない（男が『ジエス』、女が『エリス』というらしい）

他の客の中であの出来事を見ていた人たちはチラツと見てはビクビクしている。

「いやー助けてくれてありがとな君たち」

「いえっ僕たち結局何もできなかったし・・・逆に助けられたし、いーんでしょうか？奢ってもらっちゃって」

「本人がいいと言ってるのだから奢らせればいいだろうに。すまない、これとこれをくれ」

「え・・・エリス、この人助けてくれたんだよ」

「いって、出て来てくれてなかったらエリイがどうなってたかわかんなかったし、

ほら、エリイお礼言っとけ

「あの・・・ありがとうございます!」「ど、どういたしまして」

「うむ、いい子だ」

それよりそちの子は助けはいらなかったんじゃないか?」

「あ・・・どうでしょうか?」「ほう」

なにか触れられたくないところを突かれたのか少年のほうは言葉を濁し始め、

少女のほうは感情のまま動いていた男が意外にもよく“視ていた”ことに感心して呟いた。

「まあ言えないことだったと言わんでいいぞ。格好からして“ワケあり”なんだろう?」

「すいません。あのっ、ジークさんってすごく強いんですね。」

6階級の獣人を素手で倒すなんて何したんですか?」

話を変えようと少年は逆に質問を始めた。

「だから“ただ殴った”だけだって、別に魔法つかったわけじゃないし」

「魔法も使わずに!?!」

ジークの意外な答えに驚くジェスだが、さらに続く言葉はとんでもなかった。

「こちらら4階級なもんでね、あんなの何匹いようが一緒なの」
「4・階級」

驚愕の答えに言葉を失うジエス。
それもそうだろう、

6階級でさえ国の騎士以上なのに4階級といえば単独でドラゴンを撃破できるといわれる種族関係なしの異常階級である。

そんな桁外れの存在が自分たちと一緒に食事をしてかつお話してるのだ。

いつの間に仲良くなったのかエリスとエリイは隣同士でまるで姉妹のように話している。

いつも強気で冷静なエリスもさすがに驚いていた。

「ねえエリス。『4階級』ってどれくらい強いのか？」

「そ、そうさな・・・魔物でも魔獣に属される化け物を1人で倒せる。」

我らの種族でいえば伯爵か侯爵に匹敵する力はあるだろうな」

「エリス!!」

「なんだジ・・・しまった」

「?」

まさに隠していたことを言ってしまったことにエリスがはつとする。
エリイのほうはよくわからなかったようだが4階級に属するジークのほうはいやでもわかってしまった。

「あのさあ、もしかしなくてもお前ら魔族だったりする?」
「ココから小声」

「えっ、驚かないんですか?」

「驚いてないわけでもないけど、魔族は見たことあるからな。」

わかってるよ魔族にもお前らみたいなのがいるってことくらい」

内心ドキドキしている2人をジークは安心させるようにニツと笑う

「言わないから安心しとけて。何よりお前たちはエリイの恩人だからな」

「・・・ありがとうございます。ジークさんみたいな人間がいてくれてうれしいです」

それでも小声で話すのは人間と魔族が決していい関係ではないからで、

もし人間の領内で魔族が見られれば問答無用で殺されてしまう。
むしろジークのような理解者がおかしいのだ。

ジークの反応にジェスはホツと胸をなでおろし、エリスもすまないと言った。

食事を終えてジェスとエリスに別れを告げたジークとエリイはそのまま帰っていた。

「ねえジーク、エリスとジェスいい人だったねー」

「また会いたいなあ」と笑っているエリイ、まあそうだなと言うところだろうが・・・

ピシィ「あうっ」

エリイは俺から受けたデコピンに可愛い声を出して怯む。

「全く・・・、ホントに危なかったんだからな。しっかりしてくれ

「よ」

怒ってはないが心配そうな声でいう

「うん、・・・ごめんなさい」よし許す

おれ達は帰る途中にすごい発見をしました。

「ジーク、見て見てージエスとエリスだよー」

「はあ？いるわけないだろ・・・て、張り紙かよ。えーとなになに・・・」

『この2人求む！（注意）女は生きて、男は生死問わず』・・・・・・
「・・・」

「エリイ・・・」

「んー、なにー？」

「多分また会うと思う」

「ほんとっ？やったー」

おれの悪い予感がよく当たるんだ・・・

16話 オシオキのちに出会いそして正体（後書き）

爵位

低い方から

男爵・子爵・伯爵・侯爵・公爵

17話 嵐の前の静けさ（前書き）

更新遅れてすいません。

長く続いたてすがやっと終わったので今日から更新していきたい
と思います！

17話 嵐の前の静けさ

リッガルの出会いから3日過ぎ、予想していたあの2人との再会はなかった。

あの2人は魔族だから身を隠していたのかと思っていたが手配書が回つてるとするとそれ以外の理由があったのか。にしても魔族を生け捕りにするなんて国もどという魂胆だ？

「ねーねージーク。何だか最近いつもよりもにぎやかになってきてない？」

街中を二人で歩いているとエリイはいつもと違う雰囲気気付いた、そうかもうそんな時期だったな。

「そういえば言ってなかったな。ちょうど明後日にこの都市の闘技上で大会があるんだ。前に見せたる？デツケー丸い場所」

闘技上は都市の中心に位置し、参加者たちが戦うリングを3メートルの高さの観客席が円に囲み客席は段を増すごとに高さも増し一番高いところで6メートルもあり、見ただけで迫力を感じさせる。

間近で見たときエリイは驚いて口をあけてぽかんとしていたな。

「うん。それで大会って？」

「ここは傭兵の都市でもあるからな腕に自信のある奴らが集まってお互いの武を競い合うんだ」

「へー。じゃあジークは出ないの？」

うつ、痛いところを突いてくるな・・・

「まあ・・・おれはいいんだよ、十分強いから」

「なんで？ジークなら優勝できるでしょ」

「それはまた今度で。それよりこの時期は出場者以外にも商人やいろんな所のいろんな人たちが集まってくるから出店なんかもでるんだぞ。滅多に見られないものが見れたりするかもな？」

知りたがり屋のエリイにはさぞ楽しめるだろう。目を輝かせて両手でウキウキと弾ませている。

「お肉もあるかな？」

「ほんとお前は肉好きだな。あるよ、だから楽しみにしとけ」

ああ、出費が、話それたからいつか。

「でも当日は気をつけろよ、金持ちも集まるからそれを狙った奴らも出てくるんだ。」

ほら、リッガルの時みたいになりたくないだろ？」

「はあーい」

不安の塊だからな、二の舞は起こしたくない。

それから渡し忘れてたジツちゃんの頼みモノを届けにおれ達は鍛冶屋に訪れていた。

ほったらかしにしていたからまた大目玉を食らい頭に立派なタンコブができてしまった。

もはやおれがここでタンコブを作るのは来た時の定番となっていないのではないだろうか。

「あのなあ、今回の仕事で頼んだんだ。この時期は注文が多くて大変なんだぞ、つたく」

「だったらギルドで依頼しろよ！フツーに言ってきたから私情かと思っただろーが！」

「たまたま teme が近くにいたんだよ、teme が悪い」

「ジツちゃん・・・さすがのおれもキレることってあるんだぞ」

「ああんっ、なんだ怒ったらなんかあるのか？」

「んだとジジイ」

二人の間では火花がなり今にもたがいに掴みかかろうとしていた。

「ケンカはだめだよ！」

「「うつ」」

見かねたエリイの仲裁に2人が止まる、結局おれとジツちゃんはエリイに弱いらしい。

咳を鳴らしてジツちゃんが気を取り直し仕方なくやめた。

「でもホントに大変そうだね、ここ人がいっぱいいるよ」

「大会に向けて装備品を鍛えなおしたり新しく新注する奴が多いのさ。大変なことには変わらないがこれが生きがいだからな、腕が鳴るってもんよ」

エリイの言葉にジツちゃんはまるで自分が誉められたかのように言う、

確かにこの時期の鍛冶職人たちは大量の仕事に追われているが楽しそうにしている。

「ところでジーク、 teme も新しくしねーのか？」

「え？ああ、リッガルで買った」

「なんでだよ！」

「アンタの所の利益になりたくないんだよ！」

「ンだと teme ー！」

「やんのかオラ！」

「いいかげんにして！」

結局ケンカしかしいおれとジツちゃんは引き離され、いたら邪魔にしかないのでさっさと立ち去った。

「あれ？ジークじゃん、またエリイちゃん引き連れてデート？」

「あ、ダルンさんだ」

「茶化すなダルン」

声話掛けられその方に向くとダルンがいた。買い物の途中だったのか手には大きな袋を抱えている

「うそうそジョーダンだって。こっちも明後日に向けて準備してるから忙しいんだよ」

「なんだお前今度の出るのか？いつもはでないのに」

ダルンは意外にも6階級で双剣を使った素早い攻撃をしてくる。

まあ確かにダルンほどなら上位を狙えるだろう。

「知らねえのか？今日王都の騎士団が来てるらしくてな、なんでもその中で何人か出場するらしいんだ。

だからここで活躍して稼ぎ先を見つけようってな」

「騎士団？それも王都の？珍しいな、いつもは来ても出場はしないのに」

「訓練の一環じゃねえの？」

「そうだな、もうこの頃厄介事によく会うから考え癖がついたよ」

「そのお人よしを直したらお別れできるかもな」

「余計なお世話だ」

「頑張つてねダルンさん」

「おつ、エリイちゃんに言われたら頑張っちゃうぜ」

まかせなさいと力を誇示するようなポーズをとって決めるダルン、
なんか調子のいいやつだ。

「それじゃジーク俺は用事があるから行くな」

「ああ、おれの分もがんばれよ」

「ははっ、そうするよ」

ダルンと別れたジーク達はとくに何もすることがなかったなのでそのまま家に帰りその日を終えた

・・・はずだった

18話 再会それは必然

「ん・・・あー。なんだまだ夜か」

今日は早めにねたが逆に寝すぎて夜中に目が覚めてしまったのだ。窓を見ればまだ魔灯の光がぼつぼつと光っている。

エリイも同じくらいに寝たはずだが起きる様子はなくすやすやと眠っている。

またすぐに寝ればいい話なのだがジークの目は完全にさめてしまったため横になってもなかなか眠りにつくことが出来なかった。

しかし、しばらくすると外で何か音がするのが聞こえた。それは金属がぶつかりあう音やときどき人の声も聞こえる。

人が消える夜には聞けない金属音。この時期は鍛冶職人が夜も惜しんで鉄を打ったりするらしいがあいにくここは遠すぎて聞こえることはない。そしてその音は段々と近付いてきている。つまり・・・

「厄介事か」

ジークは事の正体を確かめるため起き上がるとエリイを起こさないようにそつと部屋を後にした。

side ジェス

「エリス！ここは僕が引受けるから早く逃げてー!!」

「しかしっ「いいから早くっ」くっ、スマン」

援護に回ろうとしたエリスだが逆に強く逃げると言われ仕方なくその場を任せて走り出す。

その肩には彼女よりも大きな女性が腕をまわして、腹をやられたのか血を大量に流している。

エリスは捕まるわけにもいかないし、何より仲間がけがを負ってるので自分が頑張るしかない。

対峙するは銀色で統一された鎧を身にまとった騎士5人。1人1人の力は僕には及ばないが巧みな連携を繰り出され防戦一方になっている、幸い相手は街中ということで騒ぎを大きくすることが出来ず魔法を使わずに剣や槍などで連携して襲ってくる。

それぞれをいなし、かわし、うける。反撃を試みるがすぐに敵の援護が回って止められてしまう。

自分が足止めになればそれで勝ちになるが相手はそれをよしとはしなかった。

「くそ、やむを得んな。多少の被害なら仕方ないだろう。各自魔法の使用を許可する!」

リーダー格の男の命令に反応して騎士のうち2人下がり詠唱を始める。

ジェスが止めようと奮闘するが3人の騎士が必死に守り手が届かない。

「風よ、その身を刃とし我が敵を切り刻め『エア・スラッシュ』」

「水よ、その身を変え我が敵を貫け『アイス・スピア』」

「っ!」

途端に目の前の騎士たちが飛びのきその先からジェスめがけて数本の氷の槍と見えない風の刃が殺到する。

すんでのところまで横に飛んで氷の槍はかわすことが出来たが目視できない風はかわせずジェスの太ももに掠めてしまい切り裂かれてしまった。

「ぐっ」

「機動力は削いだ、とどめを刺すぞ！」

勢いづいた騎士たちは武器を掲げどんどん距離を詰めてくがジェスは足のダメージでにげられない。

（ッ、このままじゃ…）

勝機と見た先頭の騎士が走り出しそのあとに続いて残りの騎士たちもジェスにとどめを刺すべく走り出す。

初撃はかわせるがそのあとに続く騎士たちの連携はきつとかわけない。

「ガッ！？」

ジェスの横でビュンと音がしたかと思うと先頭で走っていた騎士が突然後ろにはじけ飛んだ。

突然の事態に騎士たちは攻撃を止め倒れた騎士を囲むようにして警戒を始める。

「どうした！？」

「くそっ、詠唱した様子は見られなかったぞ！」

（違う、僕はなにもししていない。・・・じゃあ誰が？）

夜目の利く僕はすぐに倒れている騎士を見る。

被っていた兜は何かに当たったのか大きくへこみその衝撃で騎士も気絶したようだ。

（・・・ん？近くに石が落ちてる？）

疑問にふけつているとその答えは後ろから歩いてきた。

s i d e e n d

「おたくらこんな夜中に何してんだよ、つーか家壊すな」

緊張が走る場にそこにはいなかった人物の声が響く、ジェスが振り返った先には暗いせいでそこまで見えないが身長が高い男が10メートル離れた場所に立っていた。

男は手に拳くらいの石を数個あつてそれを上に投げて取つてを繰り返している。状況からして騎士を奇襲した犯人はこの男で間違いないだろう。

騎士たちも予想外の乱入者に警戒を高め身構えている。突然の奇襲に仲間をやられ気が立った騎士の1人が今にも戦闘を始めようとする。

「チッ、別の仲間がいたのか」

「仲間？何のことだよ」

「とばけるな！我らを襲ったのはキサマだろう！」

「待てっ、すまない貴殿はもしかこの住人なのか？」

「ああそつだよ。外がうるせーから来て見ればどんちゃん騒ぎして

るわ武器どころか魔法まで使って家を傷つけるわ、ケンカにしては度が過ぎてねーか騎士さんたちよあ」

男の挑発的な態度に冷静な騎士は少し考えると話し始めた。

「それはすまなかった。だが私たちは今罪人を追っている最中でな、抵抗するため仕方なかったのだ」

「罪人？見るからにガキだが騎士が5人がかりで殺しにかかるほどのものなのか？」

男はあくまで引かないようだがその言葉に騎士たちが笑みを浮かべる

「見た目はただの子だがソイツの正体は魔族だ。つまり貴殿がソイツを助ける必要はない。

さあもうお帰り下さい。魔族は私たちがきちんと討ちます」

正体をばらされたジエスはついに逃げ場をなくした。

自分が魔族と分かったなら助けてくれたこの男も敵に回るのは明らか、この6人を相手にしてはもう勝機はない。

体から力が抜け脱力したジエスに騎士は勝利の笑みを浮かべ無防備になったその肩を掴む。

その光景を見ていた男は特にリアクションするわけでもなく平然としていた。

「知ってたさ。指名手配されてた2人組の片割れの方の『ジエス』だろ？」

「えっ、・・・なんで名前を」

ジエスは急に名前を呼ばれて驚きが隠せなかった。

確かに手配書で容姿は知られているが名前は知られてはいないはず。なのにこの男は自分を知ってるという。

男はずんずんジェスと騎士の間に入りジェスを掴んでいた騎士の腕をとった。

このときジェスは初めて男の顔を見てその正体に気づき驚く。

「何をする？」

「1つ勘違いしてねえか？おれはこの騒ぎを止めに来たんじゃない」
「？・・・では貴殿は何をしに来たんだというのだ？」

騎士はまたしても邪魔されたことにいらだち男を睨みつける。
気づけば男はにやりと笑い空いた方の手を振り上げていた。

「恩人を助けに来たんだよ」

19話 種族は関係ない

ジェスを掴んでいた騎士を力づくで引き離す。

そしてよろけて無防備になった（鎧フル装備）腹にうねりを上げた拳が容赦なく突き刺さる。

鉄の鎧はその意味をなさず圧倒的な破壊力で破壊され、騎士は衝撃で吹き飛び2回バウンドしてやっと止まった。

突然の出来事に周りは時間が止まったかのように静かになりその状況を作り出した本人、ジークが動き出すとともにジェスが気を取り戻した。

「じつジーク！？なんでここに！」

「説明はあとだ、今はあつちに集中しろ」

動揺するジェスの横にジークが並んで身構える。

視線の先にはジェスと同じくらい動揺しうろたえている騎士たちがいた。

騎士らはまさかこの男が少年を魔族と知ってなお助けるとは思ってもみなく、さらにただのパンチで仲間がやられたという事に驚愕が隠せないようだ。

「きつキサマ！人が魔族を助けるなんて正気か！？」

「種族は関係ねえ、おれはただ助けたいと思ったから助けただけさ」

驚きが次第に怒りへと変わり頭に血が上った騎士たちが堪えきれずそれぞれ武器を構え始める。

接近戦は危険と判断した騎士がすでに先ほどジェスに放った『アイス・スピア』を詠唱していて

上官の制止を聞かず感情に任せて発動させた。

魔力をさつきより多く籠められたそれはたった1本だけだったがそれを帳消しできるほどの速さと大きさを持っていた。

しかし10メートルの距離を一瞬で無にして殺到する氷の槍をジークは先ほどと同じように殴っただけでそれをコナゴナに打ち砕いてしまう。

「なにっ!？」

「退け、それとも・・・ヤルか？」

「ぐっ!？」

ジークの顔から笑みが消え代わりに殺気をたたきつけると騎士たちが怯む。

彼らは相当な場数を踏み度々魔獣クラスの魔物とさえ戦ったことがあるが今彼らを感じる殺気はそれを上回る、隣にいたジェスも思わずその場から飛びのこうとしたくらいだ。

「・・・退くぞ」

「ですが!」

「こちらに勝ち目はない、もし戦ったとして魔族はやれるにしろあの男は桁違いだ。それにこちらの全滅は免れない」

「・・・わかりました」

命令を下した騎士も怒りと屈辱で唇を血が出るほど噛みしめ堪えていた。

騎士たちは屈辱に耐えながらも倒れた仲間をかつぐとそのまま暗闇の中へと消えていった。

.....

「エリイ様子はどうか？」

「うん。大怪我してたけどこの人すごく体が強いみたいだからもう大丈夫だと思うよ」

騎士たちを撃退した後おれはジェスに事情を聞きすぐにエリスともう1人の仲間を探した。

遠くに逃げてると思ったが仲間の女性はが大きな怪我を負ってるらしくしかも道に血が点々と続いており

それを辿っていった結果すぐに見つけることが出来た。見つけた時は身構えられもう少して魔法を発動されるところだった。ジェスが横にいるのを見ると納得してもらった。

初見の女魔族のほうは血の量からして命にかわりそうだったの急いで家に連れ帰り寝ていたエリイを起こして魔法で治癒してもらいベッドで寝てもらっている、どうやら腹を剣で貫かれたらしい。

「さすがは魔族デタラメだな」

「いやっジークがそれ言うの？」

ひとまずジェス達の治療を終えたが、ジェス達は長旅と今夜の戦闘で心身共に疲労が溜まり2人そろって目が虚ろになり首をカクカクさせていたのでとりあえず寝かせてあげた。

.....

ある屋敷の部屋

「なに？失敗した？」

「はっ言い訳はしません我らのミスです」

「べつに責めはせん。何かしら不測の事態でもあったのだろう？報告を続ける」

そこには1人の20後半ぐらいの男とそのまえに片膝をついて報告をしている3人の騎士がいた。

そして男は騎士たちが撃退されたという報告に驚いていた。

「あの伯爵級の魔族は私が戦闘不能にしたはずだったのだが、まだそんな余力があったか」

それなら納得がいくと頷く男

「いえ、あなたが戦われた魔族は確かに戦闘できる状態ではなく、少年の魔族が1人で我らを迎撃に来ました。」

その行動は想定内だったが、想定内だったからこそ男は逆に疑問を感じた。

「ふむ、それを予想してお前たちを編成し送り込んだつもりだったが、あの少年の魔族にそれほどの力量があったとは。私としたことが見誤ってしまったか」

「いえ・・・それがあと1歩のところまで追い詰めたのですが。突然の奇襲にありました」

「奇襲か、だとするとまだ仲間がいたとは。それでその魔族はどんなだった？」

次々と驚かされた結果にやっとな結果が出た。

新手の魔族がいたなら失敗は必然、彼らに非はないだろう。だがまたしても部下は予想外のことを言ってきた。

「それなのですが・・・我らに奇襲を仕掛け、敵を助けたのは人の男でした」

「なんだとっ、人が魔族を助けた!？」

ありえない、人と魔族は敵同士で会えば必ず殺し合いが起きるほどだ。

そんな常識を覆す言葉に男は初めて大声を出してしまった。

「はい。その男は奇襲とはいえ石と素手だけで仲間を2人倒してしまい魔族と肩を並べて立っていました。あの殺気は並みの魔獣よりも上だったと思います」

「そうか、その評価だとその男はよほど腕の立つ者だったのだろう、撤退は正しい。」

報告はもういい、負傷者を手当てしてやれ」

「はっ」

1人だけになった部屋に静けさが戻りしばらくして出た声は笑い声だった

「ふっ、私が読み外してしまうとはな、珍しいこともある物だ。

しかし・・・人が魔族を助けるとはさすがに予想外だったな、しかも報告からして最低でも5階級以上の強さはあるとみた。

はははっ、暇つぶしで田舎の祭りに来たはずだったがこれは思ったよりも楽しめそうだ」

20話 またもや嵐

朝起きたおれはとんでもないものを見てしまった。

目が覚めたジークはボサボサの頭をガリガリ搔きながら部屋を移動してるとき不意にある物へと目が止まった。目線の先には普通のベッドくらいのソファアがあり、いつもはなにも置いてないただのソファアだったが今日のそれは薄い毛布がかかって大きな膨らみができところどころが凹凸していた。

気になったジークは近付いてばつと毛布をはぎ取った。そして問題はそこに寝ていた。

「・・・ッ!」 声にならない

すやすやと寝息を立てぐつすり眠る少年と少女がいたのだ。

ソファアはベッドほどあるとは言ったがもとより人が2人寝るには満足な大きさではない。

結果的に寝ている2人は落ちないように互いの身を寄せ合い、片や腕を相手の背中や腰に回し（男）

片や抱きつくように両手を相手の背中にまわし自分の顔を相手の胸に沈め足をからめている（女）。

つまり・・・ぶつちやけ男と女が朝から抱き合っていました！

いかがわしい雰囲気醸し出していました！（パ

ニック中）

ジークはそれを見た瞬間眠気が吹き飛びはぎ取った毛布を持ったま

ま停止してしまった。

（マテマテマテマテ！誰だこいつら、あつジエスとエリスだ。
じゃあなんでこんな所で寝てるんだ、あつおれがここで寝せたんだ。
じゃあなんでコイツら抱き合ってたんだ！おれが知るかつ！！）

2人を見たジークは頭をフル回転させ1秒で思案した結果パニックしか起きず

結局導き出した答えは

「おれは何も見なかった」

ファサ 毛布をかけなおした

「ああ、今日のお外は何だか気持ちよさそうだな。よし散歩でもしてくるか」

そこからジークは外に出るまで決してソファアを見なかった。

その日の朝、ある家から鍛冶屋の雷ジジイよりも大きな女の悲鳴と何か吹き飛ぶ音が都市に響きわたった。

•
•
•
•
•
•

「ねえ」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

「あのう エリふさん？」

「なんだジェス（ギロ！）」

「うっ、その……あはからなくて凄くくひから上がひたひんだ

けど、何か・・・知らない？」

「ほう、聞キタイか。ソウカそうか自分ガナニヲシタカシリタイノカ？」

「やっぱいいです」

ジーク宅の朝の食卓は混沌と化していた。

席はジークとジェス、向かい合ってエリイとエリスで並んでいる。

ジェスは顔を大きくはらし横から見たら誰かもわからない有り様で対するエリスはいつもの冷静で余裕のある顔ではなく顔を赤い野菜のように赤く染め鬼のように睨みつける目は少し潤んでいる。

ジェスが目を覚ました時破壊された壁の下で倒れていて気付いたら顔に激痛が走り人相が変わるほどはれ上がってしまった。爆音で目を覚ましたエリイが駆け付け治療しようとしたがエリスによって止められ放置されてしまったのだ。

エリイ曰く昨日の怪我の方が軽傷だったという。

そしてどこからか帰ってきたジークはその状況を見てジェスに近寄り肩にポンと手を置くと

「『知らぬが仏』って知ってるか・・・」

「え、何？僕何したの！ねえジーク！！」

何があつたのか分かつているジークの反応にジェスは尋ねるがお前のためだとはぐらかされてしまい、結局ジェスは自分に何が起こつたのか分からないままテーブルにつきエリスからの無言の威圧感に怯えるハメになった。

もつとも、近くのジークとエリイもその理不尽な威圧感を体験し迷惑をかけていた。

「そ、そういえばジェス達はなんでこの都市にいたんだ？」

朝食を終えなんとか空気を変えようとジークが苦し紛れに話題を持ちだした

「え・・・あ、ふぁいもともとほに寄る予定だったんでふけど。途しゅうでやふはに見ふかってひまってひげながら来たんでふ」

「ジェス何言ってるか分かんないよー。大丈夫？」

辛そうにジェスは話すがその辛さは昨日を思い出しての無念からなのか
それとも単に腫れた顔が痛むのか、どちらにしろ真剣さに欠ける話し方だった。

「そこからはその馬鹿に代わって私が説明しよう」

声に反応しそこを見ればドアの前に腹を刺されベッドで寝ていたはずの女魔族が立っていた。

魔法で治療されたとはいえ怪我が完全に完治してるわけではなくまだ安静にしてるべきだというのに

彼女は剣を腰にさし何事もないように立っている。

その顔は痛みを感じさせない無表情だが以前のエリイとはまた違い鋭い眼には強い意志を持っていた。

おそらく必要以上に感情を表に出さない仕事至上のような性格なのだろう。

堂々とした姿にジーク達は制止するのも忘れ、そのまま彼女はテールブルにつくと話し始めた。

「まずは礼を言おう。人だというのにエリス様を助けてくれて感謝する。そして君も私の怪我を治してくれたのだろう？ありがとう」

「おっ清々しいねえ。おう、どういたしまして」

「えへへ、体もうよくなったんだね。よかった」

意外にも礼儀正しく感謝を告げる彼女に好印象を覚える2人、どうやらとても良い魔族のようだ

「自己紹介をしよう。私はリゼ、『リゼ・ガルデア』だ」

「ジークだ、『ジーク・クルード』。よろしくな」

「私はエリーナ、エリイって呼んでねリゼさん」

「そういえばリゼはケツコーな怪我だったろ、どうしたんだ？」

「そうだな、恩人である君達には知る権利がある。話すしよう」

すべてを話すことはできないがここに来る前からの事を話すとしてエリス様の話によるとリッガルで君たちは出会ったようだがその時私は追手の撃退をしていてな

傍での護衛はジェスに任せていた。まあ逆に助けられたようだが」

と横を見てすぐに視線を戻すリゼ

エリスの機嫌を取っていたジェスが反応しビクツと震える

「うつ」

「追手はかなりの頻度で襲ってくるが私はこれでも子爵の上位に属している。」

たいがいのやつらは何ら敵じゃなかった」

「子爵級だとつ、じゃあなんでそれほど力を持つあんたがあんな怪我してたんだ？」

中位魔族を相手にできる奴なんてそういないぞ」

あの騎士達でも良くて6階級ほどの強さ、とてもじゃないが中位魔族には30人くらいで戦わせても勝てるか怪しいところだ

「ああ、私もそう思っていた。だがあの時騎士の中に1人別格がいたのだ。私はそれに気付かず戦っていてな油断していたところをやられてしまった。しかもその騎士たちは私たちの追手ではなくこの都市に来ていた途中だったようだ」

「すると、あいつらとあんたを倒したっていう奴はこの都市にいるのか。」

そういやダロンのやつが今度の闘技大会に国の騎士も参加するって言ってたな」

「おそらくそれだろう」

「うーん、じゃあお前ら少しでも早くここは出るべきだな。幸い今この都市は明日の闘技大会でいろんな種族とかでいっぱいだし逃げるなら今が好機だ」

「そうしたかったのだがな・・・」

当たり前前の考えにリゼは顔をそらし言葉を濁す

「ん？なんか問d「それはダメだ！！」うおっ！なんだよエリスっ」

突然身をこちらに乗り出し叩きつけるようにエリスがジークの言葉を否定する

それを見たジェスとリゼは同時にため息をついた。

対するエリスはジークを睨み拳を胸の前あたりでプルプルさせている。

「それはダメだ、今日ここを出たらここに来た意味がない
・・・明日の闘技大会を見れないではないか！！」

～沈黙～

自分たちの立場をまるで無視し言い放った言葉にジークは口をあけてぽかんとする

「え？もしかしてそれ見に来たのかお前ら。逃亡中のくせに？
それで偶々騎士たちと居合わせて昨日のあれなのか？

・・・「はぁ」「」

ため息が重なったのは決して偶然ではないだろう、そして誰と誰が重ねたのかも聞くまでもない

のほほんと聞いていたエリイもこの時はさすがに

困った笑みを浮かべて「あ、あははっ・・・」と乾いた笑いを出していた。

「エリスはこっちの文化や行事にすごく興味を持ってるんだ。

だから闘技大会を知った時はここに来ることは即決だったんだよ」

知らない情報ありがとうジエスくん

エリスはその意思を変えず本人の中では闘技大会を見ることが決定事項のようだ

結局ジークはエリスに根負けし今日の逃亡計画はとりやめとなった。

20話 またもや嵐（後書き）

リゼは多く見積もって伯爵級、あくまで子爵級

21話 黒歴史そして仕返し

闘技大会は参加者も多くなるので前日から予選が行われ100以上いた参加者は何組かに分けられて任意の数になるまで戦いあう。そうして最終的に参加者は16人になり、当日にトーナメントで抽選で選ばれた相手と戦い優勝者を決める。

だから大会は1日前から行われ闘技上は歓声が響き、その中にエリヌたちを含めたおれらもいた。

そこはおれも楽しんでたからいいけどさ・・・
いくらたくさん人が集まるからといってもマントで正体を隠した魔族を連れて歩くなんて心配でたまらなかった。

参加者にはやはり騎士も混ざっていた。

勝ち残ったのは1人でリゼにあれがお前を倒した奴かと聞いたが首を横に振られた

「いや、奴は騎士達とは違う格好をしていた。何より強さはあんなものではない」

「そりゃそうか、子爵級をやったやつだ。見たところ参加した騎士たちはだいたい並みだし」

ちなみに勝ち残った16人はほとんどが獣人やエルフ（魔法バンバン使ってたな）

人間の勝ち残りは何と我らがギルドのダロン・顔に仮面をした男知り合いの方は見ていたが仮面の男の方はノーマークだったのでその戦いは見ていない。

白熱した予選に興奮し機嫌を良くしたエリスが感想を言う。

「やはり残った者は大半が獣人・亜人か。それからするとあの人間の2人はなかなかの腕前だな」

それに対しエリイは何故が不満げにおれを見ていた。何だ？

「どうしたのエリイ？」

その様子に気付いたジェスが質問する。

「ジークが出たら1番だもんっ」

「あっ、いわれてみればそうだね。この大会賞金も出るし傭兵には出世口にもなるんでしょ？」

ねえジーク、なんで出ないの？」

エリイ！！いらんことをっ・・・！！

「それはだっ」ジークさんは1度この大会に出たことありますよ」
だれだっ、ってティーナちゃん！？」

急に後ろからティーナちゃんが現れた。話を聞いていたのかきちんと話に合わせている。

仕事の方は？あっ、この2日は休みだった・・・
やべー！この子言う気満々！？」

ジェ「どちらさまでしょうか？」

「はい、この都市でギルドの受付をしますティーナです（ニコッ）」

ジエ「あ、はいっよろしくお願いします！」 顔真つ赤

ティーナスマイルに負けたジエス、やはり初見の男は撃沈か。

「……」

「いたっ、何するのエリス!？」

「デレデレするな気持ち悪い」

過去をばらされそうになり心配していたが、何故か変な空気になっていく場をエリイが「あっ、ティーナちゃんだぁ」と言ってティーナと2人でホワホワした雰囲気を出したことで回避された。

せっセーフ……

「それよりもジークが1度出たことがあるってどういうこと?」

「おいっジエス!せっかくそれなのに!」

焦るおれに周りは顔を変える……っつか笑ってる。

ティーナちゃんを止めようとしたがこの流れはもう止めることはできなかった。

「今から6年ほど前、ジークさんは13歳ですね。傭兵なり立てだったジークさんはこともあるつかこの闘技大会に参加したんです」

もうなにも言うまいよ……

「それでそれで」

早く先が聞きたいと急かすみんな。

ジェスあとで路地裏こいや・・・

「当然周りは大反対で止めたんですが聞かなくて、大剣1本持つて出場したんです」

「13歳で大剣持つてたんだ・・・」

「誰もが予選で負けるだろうと思ってたんですが・・・ふふっ」

堪えきれず口に手を当て笑いだす受付嬢。

ジークはもう止めようとせず耳を塞いでいた。

「予選は滅茶苦茶でした。ジークさん以外その組に勝者はいませんでした」

「・・・なんか想像できる」(ただテキトーに振り回したただけだろうな)

「本戦なんかもつと凄かったですよ、ほとんど一撃でしたから。獣人亜人関係なく吹き飛んじやいました。ジークさんはそのまま優勝、会場は茫然としてましたよ」

淡々と続くおれの過去話にジェス達は驚愕したり納得したりしてる

「でもジークは優勝したのだから？自慢できるではないか、なぜ秘密にしたかったのだ？」

当然の疑問にエリスがティーナに質問する

「そこですよ。最初は本人も喜んでたんですが・・・

この大会は皆さんお分かりのように様々な方々の出世口にもなる重要なものです。

ですからジークさんが参加した時の参加者は見せ場なんて全くなくてそれを審査員達が議論した結果、ジークさんは以降出場禁止になってしまったんです」

「そこまでなんて・・・、ジークの怪力は規格外だね」

「ジークかわいいぞー」

「ん？それではスカウトの方はどうだったのだ？そんな規格外が放置されるはずがないだろう」

リゼが疑問をこぼすと暗かったジークがさらにドーンと沈んだ。

ティーナも言いにくいのか困った表情で続けた（やっぱり言うんだ）

「まあ、まだ幼かったジークさんにはショックだったそうでその場から消えるように走り去って行っちゃったんです。それはもうすごい速さで」

「スカウト“しなかった”のではなく“できなかった”のか・・・」
「確かにそれは言いたくないかもね」

予選とおれの黒歴史物語が終わり腹をすかしたおれらは出店を回った。

普通に金を払おうとしたらさっきの謝罪として金は自分が持つとジエス達が言ってきた。

そうか、なら遠慮はしない。

・・・仕返した

「・・・いいんだな」

「うんいいよ。ジーク達には世話になってばかりだしね」

笑顔で遠慮しないでほしいと返すジェス、エリスたちも同意らしく何も言ってこない

ふっ、お前たちはお礼の選択を間違えた！

そしておれは復讐を実行に移すべくある人物へと振り向いた・・・

「だによ・・・エリイ、何が食いたい？」

「お肉！」

・・・

「おかわりっ」

今、エリイに初めて肉を食わせた時の悲劇が繰り返されている。

テーブルに積み上げられる十をゆうに越えた皿（もちろん肉料理、それも高め）、周りの客は皿が重なることに声を上げる。

エリイは目を輝かせて次々と出される肉をその口の中へ収めていく。

（ほんとコイツの体どうなってんだろっ）

対してジェス達は皿の枚数が増えることに顔を青くさせている。

おれは笑ってるがな！

「はははっ、相変わらずエリイは肉が好きだなあ。うんいいぞ、ここはジェス達が払ってくれるからな、

あいつら金持ち（出まかせ）だから遠慮せずどんどん食べなさい。
あつすいませんおれもおかわりつ。

・・・ん？なんだお前ら手が進んでないぞ、どうした」 すっごい
笑顔

「どうしたの？お腹の調子が変わなの？」

（腹の調子が変わるのはお前だろっ！！）

声に出てないそれは全員が思ったことだった。

全く遠慮しないジーク達（半分以上がエリイ）にジェスたちはプル
プル震えていたが今の言葉でとうとう限界が来てしまった。

「食べれるかつ！てゆうかこうなること知ってたでしょジーク！」

「お前らは限度というものを知らんのか！？」

「さすがに食べすぎだ」

それはおれも最初に言ったな・・・

反応は2つで2人が怒りと1人が呆れだった。だがそれでもジーク
達の食べる手は止まらない。

「いやっ、だから止めてって言うてるじゃん。

あつすいません、勘弁して下さい、もう食べないください」

・・・魔族の土下座なんて初めて見たな

22話 決勝戦そして発覚

闘技大会は本戦を迎えた

試合が一巡した時点で勝ち残った8名は

(人) 仮面男

(獣) 5人

(亜) 2人

僅かだった3人の人のうちダロンと騎士の2人が負けてしまった。それでも様々な種族が集まるこの戦いで基礎能力が劣る人がここまでするだけでも称賛ものだろう。

そして残った仮面の男の実力は相当なものだった。

何しろ奴は無傷だ。攻撃は防がずただかわすだけ、当たり前そうに見えるがそれはただ単に奴が最低限の動きでかわしてるからにすぎない。奴と対戦した選手たちは魔法も剣も何一つ奴には届かせることが出来ず急所に鋭い一撃をもらって負けている。

ある意味コイツが一番不気味だ。

そして魔法を主に使っていたエルフ達はほとんどが負けてしまった。理由は単純、魔法は強力で殺傷力が高い。

ルールで殺しはもちろん反則負け(犯罪)なので使える術が制限されてしまい、使ったとしても威力を抑え過ぎてしまい相手はそれを見越して全力で突っ込んでくる。

というかここまで来ると相手は呪文の詠唱をさせる暇なんか与えてくれない。

結果接近戦で劣るエルフはこの大会では不利となってしまう負けてしまう。

それでも勝ち残った2人はそれを克服していた。

つてな感じで結局は身体能力でずば抜けた獣人が多く残った。

・
・
・
・
・
・
・

「・・・ここまでとはすごいな」

「ああ、獣人とエルフが接近戦でやりあうなんてそう見れるものじゃねーぞ」

目の前では狼の獣人とエルフが試合をしている。

ただその戦い方はお互いの体を使った格闘戦だ、獣人が圧倒的かと思えるがエルフの細身の体からは考えられないスピードと力で獣人と打ち合い時には投げ技も使用し応戦している。

珍しいエルフもいたもんだ。

戦っているエルフは今までの試合で魔法を使用していたが明らかに戦い方を変えていた。

大会後半からのタイプチェンジ、あのエルフにとっての奥の手ということだ。

「ふむ、あのエルフは肉体強化の術でもかけているのか？」

「いえ、それでもエルフの身体能力では到底追いつけるものではないはずなのですが・・・」

「あのエルフの人、魔法は使っていないみたいだよ」

「ん？エリイおまえあのエルフが何してるかわかるのか？」

「よくわかんないけど試合が始まった時、あの人の体に精霊がはいってたよ」

「そんな魔法あったけ？エリス」

「精霊を纏うなんて聞いたことがない。おそらく秘伝の術もしくは、・・・まあこっちの方がありえそうだが固有スキルだろう。にしてもエリイよ、精霊が入ったことがなぜわかった？」

「そっいえばエリイは精霊が見えるんだったな」

忘れてたな、エリイは下手すりや会話もできるんじゃないかな？

「・・・おまえたちは事あるごとに私たちを驚かせるな」

何気なく言った言葉にエリスは呆れたため息をこぼす。

手を額に当ててうつむいてるところがなんか馬鹿にされてる気がする。

「魔族のお前らに言われたくないけどな」ボソッ

「だまれ人外」

「んだとお！おれは馬鹿力なだけだ！！」

ふざけるな、どう見たって“いけめん”でカッコウイー好青年じゃないか！！

「馬鹿力で済ませるなたわけ。エリイに聞いたぞ、お前あのベヒモスを真つ向から受け止めたそうだな
十分人の域を超えておるわ」

「それ魔族でも無理なんですけど、ていうか今のほんとジーク？」

「そうだが（キリッ）」

「・・・人外でしょ」

人外に人外と言われてしまった。（しかも魔族のお墨付き）

「そこまでにしておけ、見るエルフが徐々に押されているぞ」

「おっマジ？」

見れば獣人と互角に打ち合っていたエルフが防御に回っている、その額には脂汗をかき段々と出力も落ち初め勝負が決まりそうだ。

「魔法と違って精霊を纏うのは体力の消費が早いかな。となると持久力も持ち合わせた獣人が有利のようだ」

「みたいだな。あつ、良い蹴り入った、惜しかったけどエルフの負けだな」

体力の疲労にガードが甘くなったエルフへ会心の一撃が入りそのままふっ飛ばされてしまった。

『勝者、フェオール！！みなさん勝者に拍手をつ。そしてその体からは考えられないすばらしい格闘戦を見せてくれたユルダ選手にも拍手を！！』

両者に贈られる大きな拍手、倒れた相手を勝者が手をとって起こした後互いに熱い握手を交わすという気持ちの良い終わりをして両者は退場した

・・・・・・・・

『それではっ！最後は勝ち残った4人一斉の決勝戦を始めたいと思います！！』

・・・え？なに、他の試合はって？気にするな、ていうか察してくれ。

☞ 決勝戦の出場選手を紹介します。

1人目は狼の獣人、そのずば抜けた速さと自慢の拳で相手を沈めてきた、フェオール選手！

2人目は熊の獣人、その手に持つ巨大な戦斧で敵をなぎ払う、タイン選手！

3人目はエルフ、魔法の詠唱は早すぎて止めることは出来ない、ヴイレン選手！

4人目は何と人だ！彼に触れたものはまだいない、レーガン選手！

さあ！彼らはどのような試合を魅せてくれるのか？

それでは……はじめ!!!!!!」

Side
フエ
オイル

司会の声と相手めがけて駆ける、俺が狙うのは・・・エルフ！
そして同時に大きな体のタインが仮面の男に狙いを定めて走り始める。

実は俺とタインは試合前に話をしていた。内容は“互いに違う相手を倒さないか？”だ。

別に仲間ではないが、タインも了承してくれた。

理由はある、それはあのエルフと人の選手がそれぞれの脅威になるからだ。

あのエルフの高速詠唱は並みの速さでは止めることはできず、出される魔法は中級を超える。

故に力重視のタインはただの的にされるだけ。

そして仮面の男はとにかく反射神経が逸脱している。大会中に俺と同じタイプの選手が戦っていたが奴は嵐のように迫る攻撃を全てかわしつくしてしまった。速さが売りの俺では戦いづらい。だが圧倒的な力で巨大な戦斧を使うタインならもしかしたら可能性があるかもしれない。

結果

俺「エルフ、タイン」仮面の男

で互いの天敵を倒してそれから俺たちで戦おうということになったのだ。

エルフは自分が狙われることに全く動揺せず構えをとる。
距離は10メートルほど、狼の獣人である俺にとっては無いにも等しい！

「フレイム」

「っ！！」

とつさに横に飛びのき飛んでくる炎の固まりを回避する

「ちっ、下級に至ってはほとんど無詠唱か！！」

近付ける隙を与えないよう小刻みに様々な魔法を放ってくる、容易に近付くことはできないが相手も魔法を俺にあてることが出来ない。そうして時間が過ぎる。

だがそれでいい・・・

互いに力を消耗するが俺は獣人、そんなことで体力が減ることはない。

そしてエルフは魔力を消費する、使う魔法は下級ばかりだが俊敏に駆けまわり隙あらば懷に潜り込んでくる俺に神経を限界までに集中し魔力と共に精神も擦り減らされていく。

そうしてどちらも攻めることが出来ず、先に痺れを切らしたのはエルフだった。

「くっ、悪いがあなた1人にこれ以上手間をかけるわけにはいかない。喰らえ！『バーニング』！！」

「ぐあああああ！！！！」

とつさに防御に入ったが突然俺の前で爆発が怒り吹き飛ばされた。

中級魔法を無詠唱で！？

詠唱なしということだ標準が定まってないおかげで直撃は避けることが出来たが吹き飛ばされたせいでエルフとの距離が生まれた。そしてトドメに移るエルフが笑みを浮かべ勝利を悟る。

「これで終わらせます」

詠唱と共にその身に膨大な魔力を集める光景にゾツとする。

この量なら上級、それも広範囲のが来るだろう。言葉どおりエルフは次の一撃で俺どころか近くで戦ってる2人もろとも倒す気だ。阻止したいがダメージが抜けずすぐに立てない。

「ツガ!!?」

あと一息で魔法を発動させようとしたエルフの体が力なく倒れた。そしてエルフを倒したのは近くでタイムと戦っていたはずの仮面の男だった。

side end

「ふう危なかった。一撃で全員を仕留めようとはつまらない真似を」

その言葉にエルフと戦っていた獣人が我に返り体制を立てなおし周りを見回す。

そして近くで息を荒くさせ地面に膝をついてるもう一人の獣人を見つけると傍によって仮面の男への警戒を始める。

「2人して挑むか? 良いだろう、うまくいけばお前たちの攻撃でももしかしたら当たるかも知れんぞ?」

明らかな挑発、そしてそれに応えるように膝をついていたタイムも立ち上がり獣人2人して仮面の男に駆けだした。

.....

「あの2人は仲間だったのか、ふんっ獣人がつまらぬ真似をしよう
て」

マジデツマンナーみたいな顔してんなコイツ、あの仮面野郎と気が
合うんじゃない？同じこと言ってるぞ

「いいや悪くねーよ、あれは互いの天敵を当たらせただけでその後
2人でやりあうつもりだったんだろうさ、よくあることだ。・・・
もっとも“アイツ”は別格だったみたいだけどな」

「そうだね、あの人結局攻撃は当たるところか掠ってすらないよ」
もはや遊んでるなあれ、楽しんでないか？

「確かに・・・やれるチャンスはいくらでもあったはず。それにあ
の言葉からしてそうかもしれない」

あれほどの實力ならやろうと思えばすでに決着はついてる、ってこ
とは本当にそうだってことなのだろうか？

「・・・奴だ」

いつも無表情に近いリゼが緊張のこもった雰囲気で呟く。
その顔には冷や汗を流し若干の焦りも見え隠れしている。

「奴って誰だ？」

「あの雰囲気、そして強さ・・・間違いない・・・っ！」

おれのをまるで無視するリゼには余裕がなく、ゆっくりと右手を刺されていた腹の傷に当てていた。

「間違いない……奴が私を倒した騎士だ」

22話 決勝戦そして発覚（後書き）

間をあけてすいません。

この1週間なにかと忙しくて・・・

23話 優勝 もう一戦 おれ!?

「あああああつあああああ!!!!!!」

闘技上に獣の雄叫びと連続した風切り音が響く。

個々では勝機がないと見た獣人2人が手を組み仮面の男に襲いかかっている。

次々と繰り出される拳や巨大な戦斧、連携はあまりなっていないがそれでも常人には到底さばき切れない猛攻、それは決勝戦にふさわしい威力と速さを持っていた。

だが、それでも、その攻撃が届くことはない。拳は空を切り目標を失った戦斧はそのまま地面を抉る。

男に変わったことと言えばやっと武器を使い始めただけだ。しかも使用法は攻撃ではなく逆に相手の攻撃をいなすこと、さらに渾身の力が籠もった戦斧の一撃を真正面から受け止めたこともあった。

力の違いは明らかだ

そこから男が優勝を勝ち取るのに時間はかからなかった。

「やはり満足には至らない・・・か」

突然男は距離をとると深い落胆のため息をついた。

それはまるで遊びに飽き、遊びに飽きておもちゃを片付けること
のそれを思わせる。

そして相変わらざる構えない棒立ちで二匹の獣へ指をクイツと曲げ
る。分かりやすい挑発だ。

「舐めるなああああ！！」

その行動に耐えきれなかった獣人2人が怒りを露わにして駆ける、
その目には理性を宿していない。もはや唯の獣、一瞬の交差のあと
剣を振り抜いた姿勢をしていた男がチンと剣を鞘に納めると同時に
2人の獣人は崩れ落ちた。

『しっ勝者っ、レーガン選手！！！！』

動揺しながらも仕事をまっとうする司会者。普通なら大きな拍手や
歓声で熱気を帯びる瞬間だがこの時は静まり返った場に司会の声が
むなしくとっさりすぎる。

『それでは優勝者であるレーガン選手から一言もらいたいと思いま
す。では』

そついうと司会は音声拡張の魔道具を渡す（2本持ってた）

『今大会で優勝したレーガンだ。にしてもこの静けさ、やり過ぎたか？』

『すまない、どうやら皆にはお気に召さなかったようだな』

自分がやったことには自覚があるらしい。

悪いと言って頭をかいてるだけでそれっぽい態度は少しも見えない。その態度にさらに静まり返る会場。

ここに来てる人達の大半は白熱した華のある戦いを期待していたのだ。だが期待は空回りした。

確かにレーガンは圧倒的な強さを持っていた、ただ、攻撃をヒョイヒョイ避け続け、最後に一発で仕留めてしまう戦い方はここにいる人達の気を冷めさせるだけだった。しかも参加者達を侮蔑するような言葉にあまり良い感情がわかない。

『そこでなんだが、謝罪の代わりに皆にはもう一戦ご覧いただきたい』

『おーっ！とー！！まさかのもう一戦予告だー！！！！』

して、その対戦相手は誰なのでしょう。しかしレーガン選手が戦いたいという人物はどれほどの強さなのか！！！！』

一転、空気が変わる。離れていた観客の心も徐々に続く言葉に興味を引かれていく

『強さは保障しよう、まだ私は対面したことはないが、もとよりその男と戦うつもりだったのだ。』

『して、その相手とは一体どんな人物なのでしょう。』

『知ってる者は知っているだろう。その人物は6年前に13歳という若さでこの大会に出場し、驚くことにそのまま優勝したらしい。そして今でもこの都市にいて所属しているギルドではランク4だという。』

その人物の名は・・・ジーク・クルード!』

side ジーク

あっさりと優勝を決めたレーガンという奴は司会から魔具を受け取り、

『つまんなかった?ごめん、もう一回するから機嫌直して』みた
いなことを言い出した。

あいつに負けた奴らが聞いたらゼツテ・怒るな・・・。

「強いなアイツ、おれもあんな奴とはやりたくないなあ。まさに柔と剛ってヤツ?あそこまでヒヨイヒヨイ避けるなんて器用にもほどがあるぞ」

「まさに言葉どおりだな、奴の反射神経は以上だ。いかに力が強かろうとそれが当たらなければ意味がない。獣人2人相手に一撃ももらわなかった。あ奴はおそらくまだ実力を隠してるだろう」

「油断していたとはいえ私を一撃した人物です、かなりの実力だと」

一応リゼ達には逃げなくていいのか?と聞いてみたが敵の力を見たい、それにここは人混みの中だから大丈夫と言われたのでほっとくことにした。

そういえばさつきリゼがアイツだって言ってたな。だとするとアイツも騎士なのか?

実力が桁違いなのは確かなんだけどなんであんな戦い方すっかな？

『知ってる者は知っているだろう。その人物は6年前に13歳という若さでこの大会に出場し……』

ん、あれ？なんか知ってるような話が聞こえたような。しかも割と最近おれの心を抉った気がする……

「ねえジーク、あのレーガンって人が話してるやつ、なんか聞いたことあると思うんだけど」

ちょっと顔を引き攣らせかつレーガンを指しながらこっちを向くジェス。他のメンバーも同じく一点を見ている。

「奇遇だなジェス、私もアイツが言う経歴持った人物に心当たりがある」

ウンウンと頷くほか2名。え？誰のこと？そんな現実逃避もむなしくレーガンの言う人物の経歴がドンドン語られていく。

『その人物の名は……ジーク・クルード！』

途端、ざわめきが起こる

「はあっ!!??」

誰よりも驚いたのは他でもないおれの方だ。おい、そんな目で見るな！おれだって知るか！！

「まてまてまてっ、おれはアイツなんか知らねえぞっ。なんでおれ？マジでおれ？」

『出たー！ーっ！！なんと！まさかの！そのまさか！

レーガン選手の御所望はこの都市が誇る最強のギルドランク4の傭兵、『魔人（！？）のジーク』だー！ー！！ええ、私も覚えています。6年前の今日、つわものが集まるこの大会に少年が大剣一本で出場し、対戦相手を種族問わず一撃で葬っていったあの光景を・・。圧倒的な強さで優勝した彼はあまりの強さに出場禁止にされてしまいました』

司会の説明にさらにヒートアップしていく会場

なに勝手に人の過去ばらしてんだっ、昨日に続いておれの心えぐんじゃねえ！！

・つつか“魔人”てなんだ！？初耳だぞゴラ！！（司会のノリ）

「えっ、ジークは魔族だったの？」真に受けるなエリィ！！

「魔族に並ぶ人外であろう」 ザケンなエリス！！

そんなことを思っていると司会が思い出したように聞き返した。それはおれがこの状況から逃げ出せる起死回生の一言だった。

『ところでレーガン選手？肝心のジークさんはどちらにいたのでし

「ようか？」

「っ！！」

「そつだよ！おれ知らねえよあんな変態仮面！」

「考えてみればおれはあいつと初見だ。話すらしたことはない。」

「だったらアイツもこつちの場所・顔も知らないはず。そつだ、当てずっぽうに言つたはずに違いない！」

「そつともなれば早くここから離れなければ！！だれがあんな奴と戦うか………っ！？」

「素早く立ち去ろうとした瞬間、ピタツと止まるおれ、逃げるといふ選択肢は消えた。ただ立ち尽くしていた。」

「どつしたのジーク？」

「不思議に感じたエリイが首をかしげて聞いてくるがよく聞こえない。おれの意識は奴一点に集中されているから。そして向こつちもこつちを向いている、仮面で見えないはずの両眼が真つすぐとおれを見据えているのだと自分の直感が告げている。」

「心配するな。今見つけた」

「奴は言葉を終えると同時に立つて位置から遠く離れた人混みの中のおれの胸ど真ん中に持っていた魔具を投げつけてきた。おれはそれを片手でキャッチする。するとつられたように皆の視線が一点に集まる。」

「いたー！！！！いましたっ！！観客の中に混ざってました！！間違ひありませんっ。あの容姿、そして背中に背負った巨大な大剣、

ジークさんです！！！』

「「「「「「「「わああああああああ「「「「「「「「」

やられた・・・、これじゃあ逃げようがないじゃないか。

さっきまでこつちを見ていなかった隣の人達までおれを指さして大声を上げている。おれの周りにはエリイ達3人しかおらず、いつかのごとく一点を中心とした丸い空間が形成されていた。

次第にあらゆる声がまとまって2人の名前を連呼し会場で大きく木霊する。

「「「「「「「「ジーク！ジーク！ジーク！ジーク！・・・」

「「「「「」

「「「「「「「「レーガン！レーガン！レーガン！レーガン！・・・」

・・・「「「「「「」

一度始まった声は止まらずまだ少しずつ大きくなってきている。

「・・・はあ、これは戦^{たたか}うしかないか」

お返しとばかりに背負っていた大剣を奴めがけて投げつける、当然それは当たりはせず半身になってかわされたがおれの突然の行動に会場が静まり返る。

・・・こんな目にあわされたんだ、覚悟してもらおう。

『・・・上等！！』

・・・・・・・・・・・・・・・・

おれと対峙するレーガン。近くで見れば着けている額から顎まですっぽりと覆う白を強調とした仮面はあまり装飾がされていなかった。穴は口と目だけの最小限しかなく口は三日月のようで気味が悪い道化のようだった。

「それで、レーガンさんよ、おれなんかご指名してどうしたいんだ？ドッキリにも程があるぞ」

「さつきも言っただろう？ただ純粹に君と戦いたかったただけだが」

まじわされる会話はまるで朝の挨拶のように軽い、だが実際は笑っているジークの内心は真っ黒、互いに武器を構えている。

「にとしてはやってくれるじゃねえかよお。覚悟できてるだろうなあ？」

頭の中で目の前に立つこの男を一体どうやってヤッてしまおうか模索する。唯倒すだけじゃ気が済まない。

潰す・・折る・・擦じる・・　　るおっといけない。

「君を倒す覚悟か？」

結構威圧してるつもりだが飽く迄余裕を崩さないレーガン。しかし大会中のような隙だらけだった構えではなく、決勝戦で使っていた薄く紅い剣を持ち腰を低くしていた。

「チゲえ」

『それではっ、ホントに最後の試合を始めます。……………始め！！！！』

「テメエがボコられる覚悟だっ！！」

合図と共にダッシュ、敵は迎え撃つ形で構えている。先制を取って大剣の長所であるリーチの長さを使い相手の間合いに入る前に叩きつける。予想どおりかわされるが距離を保ってそのまま振り下ろす、横薙ぎ、突き、切り上げと連続で叩きこみ自分のペースを作りひたすら攻める。

「早いな。先の者たちとは段違いだよ」

「まだ余裕だなお前！」

そして大剣を振りきったところにタイミングを合わせて身を長剣の間合いに潜り込まされ高速で繰り出される突きが肩に迫るが半身になってかわす。

反撃に出るがどうやらさっきの攻撃でこっちのリズムを読んだらしくうまく攻めに入ることが出来ない。

一旦飛んで距離を置こうとしたが奴は張り付くようにおれを追従して一息で三回の斬撃で攻め込んでくる。

だがまだこれは様子見の域。

あまり力を晒す意味はないけど押されるのもなんだから先に仕掛け
てみるか……

「ッラアア!!」

ペースを上げてさらに力を込めた一撃を振り下ろす。そしてそこで初めて鉄と鉄がぶつかり合う音になった。

「っ!？」

大人の1人ぐらいの大剣とその半分ぐらいの剣がっばり合ってる。

その展開に驚いたのはおれ。客席からも同様の声上がる。

理由は今の一撃が防がれたからだ。

そう・・・耐えられてるのだ。

力は抜いてない、最低でもさっきの熊の獣人が繰り出した一撃よりは数段上のはず、その証拠に敵の足元に亀裂が出来ている。その力を出してる自分が言えることではないがその力は人間が武器一つで耐えられるはずはない。相手がそれほど力を持つてる様には見えない、だが実際に目の前の敵は受け止めて見させた。確認でさらに同じ斬撃を出したが同じく防がれた。

となると・・・

「その剣、魔剣の一種か!!」

「ご名答、この『ハバス』の能力はいたって単純でね、持ち主の身体強化、または打ち合う瞬間相手の力を大幅に削ってくれるのさ」

パワー型の相手にはもってこいだろう?そう告げて今度は逆に虚を

突いた攻撃がおれを襲う。

寸前、大剣を盾に防いだがつさの行動に力を乗せられず、魔剣の効果を発揮した一撃でふっ飛ばされた。

「づっ！！」

「ジークっ！！」

少女の声と同時に背中に衝撃がはしりすこしむせる。すぐに立ち上がるが敵の追撃はなかった。

くそっ、なんつうモン持ってやがる。・・・けど、なんだ、マジで単純じゃねえか。

「この剣は大概は敵の力を無くしてくれるんだがな、それでもこの力か」

手をぶらぶらさせ痛がる素振りを見せる、多分演技ではない、それなりに力はおっているはず。

「感想ありがとよ、・・・だったらドンドン（力）上げてくぞっ。耐えてみる！！！」

最初と同じような感じで走り出し最初と同じように大剣を叩きつけた。

何の変哲もない斬撃が最初のものとは違っていたのは大剣に込められた力・敵が大きく後ろに飛んで避けたことだった。

当たった瞬間に地面が爆ぜ、大きな爆音を起こす。もし当たってい

れば大抵のモノは原形をとどめることはできないだろう。その後は小さなクレーターができ、振り下ろした大剣は3分の1ほど地面に刺さっていた。

「どうしたよ、その剣の能力でおれの攻撃の力無くなるんじゃないかなったのかよ」

刺さった剣を引きぬき肩に担ぐ。おそらく敵は驚いてるだろう。

「打ち消す力の量には限度がある、そして君の力は驚くことにそれを上回っていただけだ」

「えらく素直に教えてくれるじゃねえか？いいのか、そんなにペラペラしゃべっちゃって」

「いや、こんな戦いが出来るとは思っても見なくてね、楽しいんだよ」

魔剣の効果が通用しないことがわかったはずなのにそれでも本当に楽しんでるようだ。

「はっ！だったらその気味の悪い仮面取って顔見せろよ」

「それは無理な話だ、君が取ってみるか？」

「よっしゃそれ乗った！！！」

俄然やる気の話いたおれは今度はただ我武者羅に大剣を振りまわした。だがさつきとは比べ物にならない力で振るわれる大剣は振ったあとに大きな風を生み出し、地面は掠っただけでも大きな爪痕を残した。中途半端に良ければ強風に体をあおられてバランスを崩しかねないがそれでも敵はおれの攻撃の嵐をかわし・いなしてなお且つ反撃まで見せる。

その攻防はすでに常人の理解の域を超えさらに激しさを増しその爪痕を地面に刻む。

『す、すごいっ。なんて破壊力、そしてそれを防ぎ、かわす技術、こんな戦い見たことがありますっ。』

ていうかジークさん！！会場を壊さないでくださーい！！』聞こえない、聞こえない

でもこいつほんとナニ者だ？最低でもランク4はあるぞ。まあおれ以外で上級ランクの強さは見たことはないけど・・・「戦いの最中に考え事かな？」

一瞬の油断、会場の驚愕の声で我に返ったがおれの前にいる筈の奴がいない。

そして振り切ったあと後ろに伸ばした大剣にナニカが乗った感覚を感じる。

「っ！！」

驚いたことに奴はおれが振り切った大剣に乗ってやがった、敵が身を沈めた瞬間、本能にしたがってそのまま大剣を大振りして攻撃の回避と同時に奴を空高く打ち上げる。

チャンス！！いくら避けるのがうまいとはいえ“空中”だったら逃げ場はないっ。

次第に上昇をやめ重力にしたがって落ちてくる“目標”に狙いを定

めて構える。

・・・・・・3・・・・・・2・・・・・・1・・・・・・っ!!!?

突然、間合いギリギリで放たれた『アイススピア』に絶好のタイミングをズラされた。

避けることが出来ず予定より数瞬早く振り上げてしまい剣先を何処かに掠らせることしかできず勝機を逃してしまい相手に着地を許してしまった。

互いに距離を取り体制を整える。

「相手の剣の上に乗るなんてフザケタことしてくれるじゃねえか。どこの大道芸人だよ」

「君ほどじゃないさ。・・・にしても、まだ力が上がるか、下手すれば魔獣に近い筋力だぞ。底が見えないな」

「それを凌ぎ切るアンタもだよ。どんな神経してんだよ、まあそれについてはおれも同感だ。まだ本気は試した覚えがない」

すると途端に仮面の中から笑い声が聞こえてきた。

「はははははははははは。そうかそうかそれほどなのか。やはり君は私と同類なのか」

なに言ってるんだコイツ？同類？どう見ても違っただろうが・・・・っであら？

ぼとりとレーガンが着けていたはずの仮面が落ちた。どうやらさっ

きのが仮面の紐を掠っていて切れかけていたのが今になってきれたようだ。

そして相手が『取れるものなら取ってみろ』的な発言をしたの思いい出し“してやったり！”と喜びが込み上げてきた。さあ露わになった顔を見ようじゃないか。

「・・・は？」

目の前の光景におれの口から間の抜けた声が出た。

うそだろ、なんであんな奴がこんな所にいる！？

晒された顔はよく整っていた戦士とは思えないまるで女性のような肌、その上で風に揺れる銀色の髪。

女性なら正面で向き合っただけでイチコロ、男性なら嫉妬を向けたくなるイケメン・・・

だがそんなのはどうでもいい。アレを見たら容姿の事なんか一瞬でふっとんだ。

それは『目』だった。それに宿した“色”が異常だった。

瞳の色が一色ではなかった。紅・蒼・黄・緑・・・いくつもの色が揺らめいていた。

まるで空に映る虹のよう、虹が人を魅惑するようにおれの意識もその瞳に吸い込まれるような錯覚を起こす。

『おーっつつ、なんということだーっ！！レーガン選手が着けていた仮面がさっきの一振りで取れてしまったーっ！しかも意外に美形！！』

どうやら遠く離れた一般の人たちにはおれの光景は見えないらしくまき上がる驚きはおれの者とは大きく異なっていた。・・・つつか見られたらただじゃすまない。

「大会を荒らすにも程があるだろうが、なんでこんな田舎の祭りにあんたが参加してんだよ」

やっとこの男の強さの秘密がわかった、ふざけてるなんてレベルは超えてる。

「おや、私を知ってるのか？」

落ちた仮面を着け直し、なおもはぶらかそつとする態度がまたイラストくるが抑えよう。

「なあーにが『レーガン』だ、偽名だろっ！その『目』・その強さ、
わからないはずがねえ！」

なあ・・・・・・・・・・・・・・・・アレスティナ騎士の頂点、騎士団長にして
加護持ち
おれと同類

ユーヴェルト・クアトス騎士団長様よっ！！」

24話 報告 おれは化け物

「ジーク宅」

あの戦いの後おれはすごい剣幕で追ってくるたくさんの追手スカウトを振り切り先に帰ったエリイ等が待つ自宅になんとかたどり着くことが出来た。試合が終わって外に出たら二桁を超す人達に囲まれたから一瞬ビビったよ、連中の何人かは目が血走ってたから下手な魔物よりも迫力があるんだよ。

え？試合の決着？そんなのすぐやめたに決まってるだろ。あれでもお互い力を全然出してないんだ。

大体、加護持ちどうしがまともにやりあったら被害（今回の場合は主におれによる）が馬鹿にならん。

それに相手がこの国最強の騎士、分かった瞬間やる気が抜けたよ。まあ要するにメンドクサそうだから逃げただけなんだけども・・・とりあえず報告するか。

「おかえりジーク、スカウトはどうだった？」 「おかえり。かつこ良かったよジークっ」

oh エリイの笑顔が心にしみるぜ

「それどころじゃねえよジェス、おれが戦った・・・おまえらを襲った奴とんでもねえ野郎だったぞ」

「私から見たらお前もとんでもないぞ？それでおまえはわかった風だったけど一体奴の正体は何だったのだ？」

「ギルドに所属してる奴で知らない奴はいないさ。

奴の名前は『ユーヴェルト・クアトス』。

この国の騎士団長で、おれと同じ『加護持ち』、元ギルドランク2だった男だ。

“不敗騎士” “神眼” “百発百中”（ナニが？） 二つ名どころじゃねえよ。この国が誇る生きた伝説だ。おまえらよくはち合わせた時に捕まらなかったな」

やってらんねえよと息と一緒に吐いたおれの言葉に魔族組がまるで石になったかのように動きを止める。そして徐々に体の硬直が取れブルブルと体を震わせながらジエスが聞き返してきた。やっと自分たちの置かれた状況を理解したか。

「ユーヴェルト？騎士団長？元ギルドランク2？・・・オレトオナジカゴモチ？」

「あれ？言ってなかったっけ？あと言葉はあってるけど言い方おかしいぞ」

「すごい、ジークって加護持ちだったんだ」（エリイ）

「っっ！！」

「おいおい、いくらおれがスッゲー奴だって分かったからってそんなに驚くこと・・・どうした？」

「なんでそんな目でこっち見る？」

気づけばおれとジエス&エリスには距離が生まれていた。こっちが一步踏み出せばあつちは同時に一步下がる。何度やってもこの距離は変わらない

ナニコレ面白い。

そのやり取りはジークにとって冗談のつもりが向こうはマジだった。さすがにダメかなと思いい唯一魔族で冷静を保っていたリザに助けを求める。

「リザ、これはどういうことだ？」

「すまない、わざとではないんだ。つまりだな・・・

加護持ちとは我ら魔族にとってはまさに化け物のような存在とされている。魔族と人との戦争では必ず加護持ちが繰り出され、その被害は加護持ち1人につき魔族3桁、中には言葉道理『一騎当千』をした者がいてな、しかも加護持ちは魔族の中からは生まれない。私達にとって加護持ちは恐怖の対象であって忌むべき存在とされている」

納得、確かにそれが本当なら分からなくもない。おれ達でい**人間**えば魔王に置き換えてるようなもの。どっちも桁外れな存在だとしてその化け物が目の前に現れたのだ。そう考えるとこの2人の反応は間違えてはない。

「なるほどな。こつちとそつちじゃ加護持ちの在り方は真逆なのか。それなら仕方ねえな」

「人でも親が子を躾ける為に小さいころに怖い話をするところがあるだろう？それと同じで私達も話だけだがたくさんのお話を聞かされた作り話のようなものさ。だから大概の者はすぐに忘れてしまう」

「それってあれ？『ほーら、早く寝ないと“加護持ち”が来て食べられちゃうゾオ』とか？」

「そんな話“も”あるな」

「なるほどなるほど。ってことはおれは物語に出てくる怪物なのかあ。んで魔族を貪り食べると、おれって怖いなあ

・・・ってなるか！！誰が食うかつ。あと“も”ってなんだ！！。

ていうか魔族意外と家庭的な！」

言いがかりだ！！と強い口調で怒鳴るとそれに過剰な反応をして2人が悲鳴を上げる。

「ひっ！？」

「れる！！！」　　おいしい！！今何て言った！？」

「魔界の教育基準一体どんなだよ。飽く迄賤の範囲なんだろう？この歳でこんなにおどろくものなのか？」

ジエスは思わずビビってるところで留まってるけど、特に意外にエリスはいつものふてぶてしく余裕を持った態度とは真逆のまるで10にも満たない女の子の怯え方をしていた。そのギャップにその場にいた全員が“え？”と思っただくらいだ。

「さすがに今のは私も初耳だ。まあ、エリス様は特殊な環境（親ばかの過保護）で育てられたから少しはずれた思考があるかもしれない」

「その特殊な環境ってスゲー気になるんですけど？」

「聞きたいか？」

「やめときます」

「“れる”ってなに？」

「「きみ／エリイは知らなくていい」」

結局2人が落ち着くまで無駄に時間をくった。

sideユーヴェルト

滞在先のある貴族の屋敷で淹れたての紅茶をもらい、飲みながらあの男との戦いを思い出す。

「……ふう」

コンコンッ

「入れ」

「……失礼します」

入ってきたのは部下の騎士だった。

「君か。どうした、報告か？」

「一昨日私たちが追っていた魔族のことです」

「話せ」

「はい。話は魔族の手助けをし、我らを襲った男について」「私があの時戦った彼か」

「……やはりお気づきでしたか」

「前の報告と実際戦ってからだな。さらに言えば見つけた時奴の隣には3人ともいた」

「それならばなぜ何もしないのですか？団長ならばあれぐらいの相手は敵ではないでしょう」

さも当然とばかりに言いきる部下に思はず苦笑が漏れる。
そういえば彼については話してなかったな。

「あれが『加護持ち』だと言ったら……どうする」「
なっ……！！本当ですか？」

「ああ。しかとこの“目”で確かめた。あの戦いで彼も力を出し切つてはいない、あれだけでも魔獣に匹敵するがまだ上がると言っていたからな。純粋な“力”の加護を得たなら下手をすればドラゴン種に近いだろう」

ドラゴン・・・この世界で生物の頂点に君臨する絶対の種族。

その体は2階建ての家を見降ろすほどの巨体に一对の翼が生え、大地を踏みしめる4本足を持ち

全身を覆う分厚い鱗はあらゆる攻撃に耐え、魔剣にも劣らないどんな防御も貫く爪・牙で敵を打ち砕く。

その口から出されるブレスはタイプで異なるが主に使われる炎ならば一夜で国を焼き尽くすといわれ、たった一体で国落としたなんて昔話は探せばよくあるものだ。

世界に『ドラゴンキラー』と呼ばれる少数のものがいるがそれは大抵が下級ドラゴンを退治したものに対しての言葉であり、中級・上級はそれぞれが段違いの力を誇る。

そんな最強種に近い存在だと知った部下は言葉を失う、さすがの私も上級のドラゴンは相性が悪いからな、私よりも強いかもしれないと思っているのだろう。

それでもすぐに気を持ちかえしそれではと告げて来る。

「それほどの人物がこんな場所で埋もれていたとは・・・すぐに我らの同士とすべきではないですか」

「それこそ難しい問題だ。現に彼はなぜだか知らないが魔族にっている。下手につつけば交戦するかもしれん、そうなれば私を除いて全滅は必須だろう」

確かに私と彼では加護の能力上私が優位に立つ、決して負けない。

だが実際に戦うともなれば多対多となり互いにおもひ（仲間）がつく、こっちは1分隊（10人くらい）にも満たない騎士達に対しあちらは魔族が3人もいる、私が斬った爵位持ちの女も回復がすでに終わってるだろう。結局味方は誰も残らないのは分かりきっている

「一応誘いはしたんだがな？『おれを大量殺戮兵器にするつもりか？誰が行くかアホ』と断られてしまった」

「団長の正体を知って啖呵を切るなんてやりますね。・・・ですがこのまま敵につかれば『いいじゃないか』・・・なんですか？」

「そっちの方が面白い、帰還後手配書をまわせ」

「それだと完全に彼が敵につくじゃないですか！-」

「そっちの方が面白い」

きっぱり言い放った言葉に部下はまたも止まる、先ほどの驚きが感じられないのは彼が私の性格をよく知っているからだろう。

「はあ、団長は自分が楽しいことに優先順位を置くんだから。

・・・わかりました、団長は私の上官で私は団長の部下ですからね、従うしかありませんよー」

もはや一介の騎士が騎士団長に話す口調ではなく友人を小馬鹿にするような態度に変わってきているが所詮傭兵上りの自分からしたらなんも問題もない。むしろこの方がやりやすくていい。最初は誰もが堅苦しい言葉で話すが自分が気軽に話していいと促しつつけるとこんなやり取りができた。

最近、王宮内で“騎士が騎士らしくない”と噂される原因はあろうことが騎士団長にあった。

かくして、ジークは己が知らないところでもんでもないことに巻き込まれていたのだった。

s
i
d
e

e
n
d

25話 ジークがない家で

人でにぎわったあの祭りから3日が経ちジーク宅にはエリーナ・エリス・ジェス・リザのその家の主を除いた4人がそろっていた。

最初は都市を巡り歩いて回るつもりだったエリス達だったがそれをジークは良しとせずあまり出歩くなと言われ缶詰め状態を余儀なくされていたのである。

それに対し、自分達が身に着けていたマントには魔族特有の魔力を遮断する効果を付与していて、それを身につければ問題ないと自信満々に言い張るエリスだったが

「全身マントで体隠した連中が歩き回るってどうよ？すっげー不審者じゃん。魔族云々より別問題だろ」

ときっぱり言い返され撃沈されてしまったのだった。

因みにこの家の主であるジーク本人は2日前に「おれドラゴンキラーになつてみたかったんだよね」と置き台詞を吐いて一人どこかに行ってしまった。

普通なら皆笑って夢物語だと馬鹿にするだろうがこの人物に限ってはそれが可能な力を持っているためジェス達はどう受け取っていいのかわからなかった。

ぶっちゃけ最近の出費が馬鹿にならないので、ちょうど良く見つけた報酬の良い依頼^{とらひたいじ}で金稼ぎしてるのである。

sideジェス

「くそっジークめ、自分は一人で出かけておきながら私達には外に出るななどと一体何様のつもりだ！」

「しかないでしょエリス。こうして僕ら魔族を家に泊めてくれてるんだから、

迷惑はかけちゃダメだ「ガシイイ！！」イタイイタイイタイイタイ顔が潰れる！？」

理不尽なアイアンクローに倒れ伏す僕、同じ場所に閉じ込められ続けられる状況に耐えられないエリスはその苛立ちを僕にぶつけることでなんとか暇を凌いでいた。

彼女は何かといらついてる時なにかと僕に当たってくる癖がある。

女だからって魔族の握力は舐めちゃあいけない。相手が人間だったらその頭蓋を粉碎出来るほどあるんだよ？死ぬるよマジで。

「はぁ……」

「どうしたジエス、ため息は吐くと幸せが逃げるといって……もつと吐け」

「やだよ。いや、僕達こんな普通に生活できてるからさ。ほら、今までずっと追われてたじゃない？」

これまで僕たちは魔界から離れ敵しかいない場所を流れ続けていた。人里に着いて最低限の補給を済ませたら素性がばれないようにすぐ次を目指し、ときには寝ているときに襲われたこともあって、毎日緊張が張り詰めてまともに息抜きなんか出来なかった。

思い出せば思い出す程今この瞬間が幸せだと感じる。

「そつだな。いつもは野宿で碌に眠れなかった」

「えー、エリスは熟睡してたじゃないか。豪華なべ……ごめんな

「さい」
「チツ」

余計なことを言おうとした僕にぬつと誰の手が伸びてきたが本能が素早く反応し口から謝罪が飛び出し、その手は舌打ちと一緒に戻って行った。

「その件では2人にずいぶん世話になっている。エリイよ、すまないな」

「うっん。エリスたちがきて楽しい、迷惑だなんて思っていないよ」

「でも結果的に2人は魔族を匿ってるんだよ？こんな良い兄妹がいるなんて僕は申し訳なくてたまらないよ」

そんなことが知れたらエリイ達も断罪の対象になるかもしれないんだ。今更巻き込んでおいてなんだけどどうしてジークといいエリイはこんなに優しく接してくれるのだろうか？

そんな思考中の僕を見てエリイは首をかしげていた。距離的に聞き取れなかったってわけではないだろう。表情からして疑問を抱いてる・・・何に？

「兄妹？」

「ん、どうしたのエリイ？」

「兄妹って誰のこと？」

「もちろんジークとエリイ」

「なんで？私とジークは血繋がってないよ。ここで暮らし始めたのもジェス達と出会った1週間ぐらい前だもん。それまでお互い顔も知らなかったよ」

「うそ！？」

エリイの思いがけない告白に僕だけではなく目の前と近くで聞き耳を立てていた他の2人も驚きを隠せないでいた。

だって年の近い2人の男女が一つ屋根の下で暮らしてるんだ、誰もが身内だって思うだろう。

周りから見たらジークとエリイの接し方はそれほど親しみがあリ、とても知り合って1カ月にも満たない関係とは全然思えない。

大体そうだとしてもそんな関係で一緒に住んでたの？・・・恋人？

「自己紹介の時ジークの後に名前だけ言ったからてつきりそうかと」「ごめんね。私名前しか持ってないから・・・」

何気ない会話から一変、エリイの顔に影がさしそれにつられて周りの空気に重みがかかる。

その時を見逃さずにすかさず僕に伸びる手

「アタタタタっ！ごめんっ！今のは自分が悪かったです！！」

「馬鹿がすまない。しかしそれなら何故エリイはココで暮らしてるのだ？前までは赤の他人だったのだろう？」

「エリス、それ僕としてること一緒くはっ！」 再度撃沈

「いいよジェス。えっとね、前に私は精霊が見えるって言ったでしょ？」

ジークと会うまで私はある宗教にいたの。中でも特殊体質だった私は巫女として暮らしてたんだ」

そしてエリイはポツポツと自分の過去とジークとの出会いを語り始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それでねそれでねっ、ジークはすごいんだよ！

どんな魔物が来ても一振りで“ドッカーン・・・キラン”（比喻
あらず）てぶつとばしちゃうの。

あと私にいろんなことを教えてくれたし、優しくしてくれるし・・・
お肉食べさせてくれたし・・・」

エリイの話はいつの間にか「ジークはすごい！！」に代わっていた。
今でも両腕を大きく振って大剣を持ったジークを表現し、口だけで
なく手やときには体全部を使ってジークとの思い出を話していた。

てゆうかジークも犠牲者（肉）だったんだね・・・

さっきまでエリイは暗い過去を話していた。両親との別れジークと
出会うまでを話す彼女は俯き何かに耐えるようだった。そして救出
され一緒に来いと言われたところでエリイの体が止まる。

さすがに辛かっただろうと思いきや、それぞれが慰めの言葉をかけようと
した途端にこれだった。

彼女は顔を華のように咲かせその口からは止まることなくジークを
たたえる言葉が出てくる。

その姿はまさに恋する乙女、目にはいる筈のない人（ジーク）を映し、いつも
は感じられない女性ならではの色気が出ていて、元から綺麗な容姿
はさらに磨きが掛かっていた。エリイってこんなだったっけ？

普段近くにいるから長時間いないことでいつそう気が大きくなつて
るのかも知れない。

見てるこっちが恥ずかしい気がしてきた。

でも、死の淵に立たされた少女が出会った人に助けられて一緒に暮らしてるなんて、まるで出来すぎた物語みたいだ。

『運命』、そんなものがあの2人を出会わせたかのように感じる。

「なんて思ってたけどそろそろ止めようかな？ 聞いてるこっちが耐えられない・・・」

目を動かせば、なおも続く話に耐えられないのかエリスが顔をそろし少し小刻みに震えている。

ちよつとだけ見える顔が赤らんでいるのはなぜだろう？

そして話題を変えるべく僕は即行動を実行した。

「エリイにそんなことがあったなんて」

「虫唾が走るな。その連中が目の前にいたら、うっかり握りつぶしてしまいそうだ」

「ホントだよ。あれ、目が見えない？ って潰れる！ 今まさに僕が潰れる！！」

悲鳴がこだまし場が一転する。

エリスも分かっていたのか僕の話に続けるといつものペースを繰り出す。

でもだからって僕を使わないでよ！！

「あははっ、エリスとジエスって仲がいいんだね」

「むっ、そう見えるか？」

「うん。ほら『ケンカするほど仲がいい』って言葉みたい」

「じゃあ違うね。これは一方的な虐待だ・・・ケンカにすらなっ

ないよ」

そう返すジェスは仰向けに倒れエリスにマウントポジションをとられている。

見方によつては魅力的（？）な状態、しかし実際にジェスが感じている感情は『愛』ではなく『痛い』

だ。ジェスに反撃する様子は見られない。

エリスの手際の良さを見るとここまでの旅で何度もこのやり取りが行われていたのだとわかる。

哀れジェス、頑張れジェス、君がその苦痛から逃れられることはまだ先だっ

「えー？」

エリスとジェスのやり取り（一方的な暴行）が功をそうし、エリイは話しをやめていた。

「ねえお外行こうよっ」

「でも、ジークは出るなって・・・」

「大丈夫だよ、私言わないもんっ。それに此処の人達なら大丈夫だよ」

両手を握りしめ胸の前でギュっとして己の意志の強さを主張するエリイ。

あまり根拠がしっかりしてないが彼女が言うことにうそ偽りはないだろう、それにエリスが言うことにも一理あると思う。

この都市は貿易都市でもあり様々な人種が行き来する場所だ。見た目を気にして体を隠すなんて例は港を歩いたら見つかるだろう。当然それを見かける人達もいるが気にしない、種族・見た目隔てなく接するのが此処の良い所だ。

現にエリイも最近住み着いたわけだがたったの1週間で馴染みこめていた（子供経由）

「うむ、エリイがそこまで言うなら仕方がない。無下に断るわけにはいかないな

そうとなれば早く行こうではないか、暇で暇で死んでしまう。案内頼むぞエリイ」

「うん。どこ行こうかな」

「えっ、ちよつと・・・」

着々と準備を始める二人を止めようとするが全く相手にされてない。もはや彼女らの頭の中には僕やジークのことはなくて外の風景で満たされてるに違いない。

助けを求めようとメンバー最後の良心であるリザを探す、しかしそのリザは腰に帯剣しすでに支度を終えエリスの護衛の準備完了であった。

そういえばこの人はエリス一番だったなあ

ごめんジーク。僕頑張ったけど止められなかったよ・・・まっいつか。

結局暇を持て余していたのは僕も一緒。エリスたちに乗便して心置きなく観光を堪能したのだった。

side end

彼らに訪れた久々の穏やかな日常

だが、彼らに安らぎはまだ早い

26話 おれ帰還！そして変化（前書き）

遅くてすいませんでした。

結構前から書いてたんですけど、何度も何度も修正してて・・・

26話 おれ帰還！そして変化

依頼を達成（撃退）させたおれは帰る途中、ドラゴンの巣と都市に挟まれた別の都市にいた。

ドラゴンを退治せず撃退させた理由はちゃんとある。ドラゴンという種族は仲間意識が以外と強く、仲間の死が伝われば仇を打つべくその相手を探し出して更に暴れる可能性があるからだ。

証拠として頭に生えた角を1本折らせてもらったが、まあ殺さないに越したことはない。

そしておれは一息入れる為に酒場で休憩中なわけだ。

カウンターに座り一人で食事していると周りから興味深い話が聞こえてきた。

「おい聞いたか？アドリアが召喚した勇者ってスゲー強らしいぞ」「らしいな。なんでも召喚されて3週間ですでに魔族の拠点を2つ落としてるって話だろ？」

声の発信源は長いテーブルに向き合って座っていた2人の傭兵だった。

酒場はこんな感じで各地の情報が座ってるだけで手に入るというところが醍醐味だな、うん。

そういえば今アドリアは魔族と戦中だったな。こっちと同盟組んでるけどこっちは軽い支援しかしてないからな、ほとんど一国と一國が戦争中だ。

つーか異世界から勇者召喚ってふざけてないねえ？

自分たちの問題に他人を巻き込むって何様？・・・あ、王様か。

召喚された方もすぐに武器渡されて戦争行つて来いつて話だから溜まったもんじゃねえよな。

もしおれが呼ばれたら、敵よりまず先にソイツらからブチのめすわー。

・・・でも、もう拠点を落としたとか異世界人スゲー。

案外いいネタだったから耳を傾けてそれをツマミに食事続ける。

「でも、その勇者って俺らと同じ人間なんだろ？どんな化け物だよ」

「あのアドリアが呼んだんだぜ。なんでも国宝の魔剣を使わせてるんだと」

「あの聖剣と名高い『ヒュペリオン』を？そら納得だな。おまえどこまで知ってたんだ？」

『ヒュペリオン』・・・確か英雄が出てくる本によく出てきた魔

剣の名前がそうだったような。

光を放つ勝利の剣、だったか？・・・ダメだ、単純すぎて能力がよくわからない。

「最近までアドリアに行つててな。勇者勇者うるさくて嫌ほど聞いたのさ。

あと聞いた所によるとだな勇者を中心とした5人ほどの強力な小隊を作ってるらしいぞ。

中には王家きつての魔法使いの王女とかあの凶刃『デュラン』もいるって話だ」

その名前で酒場が沈黙で満たされた。

どうやら聞き耳を立てていたのはおれだけじゃないらしい。周りで騒いでいた連中も体越しに2人を見ている。今この店はたった一人の話に夢中なのだ。

その異変に気付き二人が自分達に注がれている視線に驚き会話が中断されるが、周り（おれ含む）の『いいから続ける』という殺氣じみた無言の威圧を受けて少し怯えながら話が再開される。

「あ・・・あの『デュラン』って言ったらついに階級を剥奪された元3階級じゃないか。そんな奴を入れるなんて正気かよ。あいつは犯罪者だぞ」

デュラン、奴はギルドや傭兵たちの中で有名だ。

噂によると奴が関わった件には必ず死傷者が出る、しかも多数。

いわゆる戦いに快楽を求める戦闘狂らしく、各地の戦場に現れては敵味方関係なく斬り殺すって噂もありおそらく事実でそれが理由で奴はギルドや傭兵達に嫌悪されている。

今まで捕まらなかったのは奴が上階級者であるという計り知れない実力が起因している。

誰も蛇がいると分かりきった藪をつつきたくないということだ。

他にも戦いの中で瀕死に近い傷を負ったことがあるが翌日は完治してたという話もあるけど定かではない。

まあ上階級者ってだいたいはバケモンばっかだしな（笑）。

「あ、ああ。性格はイってるがな、実力は確かだ。犯罪者と自慢の娘すら戦わせてんだ、それほど力入れてるんだよあの国は。

名声も、魔界制覇したら軽く上塗り出来るからな。現に着々と成果は出てる、絶対悪の魔族を押してるって言ったらあの国の連中はそんな些細な問題は頭から吹っ飛んでるんだよ」

「マジかよ……。まともじゃねえあの国は」

「元からだろ？こつちと同盟組んでるのは表面だけ、実際に敵視してるのは魔族だけじゃなくて人間以外の種族だからな。どっちにする今あの国を敵に回すのは危険だってことだ。

・・・あ！そういえばこれは飽く迄噂の域なんだがよ、あの国は今人集めしてるらしいぞ」

男は思い出したかのように手をポンツと叩きさらなる持ちネタを話し出した。

「人集め？当たり前だろ、戦争中なんだから1人でも多くの戦力がいるんだろ」

「その集められてる人ってのが『女』って話さ」

「女？それに特別ねえ。ほんとあの国がやることはわかんねえな」

分からないと言う男に対して話していたもう一人に男が意味ありげな笑みを浮かべる。

「・・・こいつを聞いたのは偶然だったんだがよ、どうもその集められてる女の条件があつてな。精霊を見れたり、会話が出来るっていうことらしいぜ。すでに各地から何人も集まってるそうだ」

精霊が見える・・・会話ができ・・・る・・・まさかつ！！！！

パリン！！

「おっお客さん！大丈夫ですか！？」

「あっ・・・っと、スマンつい力んじまった。別に怪我してねえよ」

答えを知った瞬間思わず興奮してしまい持っていたグラスを粉々に潰してしまった。

店員が心配してくるが適当に受け流しながら2人の会話へと耳を

傾ける。

「ふーん。どうやって“集めた”のかが気になるな。どうせ碌なやり方じゃねえだろうけど」

「だな。・・・はいつ、俺が知ってるのはココまでだよ。散った散った!!」

2人の話はそこで終わり聞き入っていた周りの傭兵たちもはそれぞれのテーブルに戻っていった。

静けさがなくなり元の賑やかさを取り戻す酒場。

しかし、この情報はおれに不安を残していった。

.....

「・・・ということらしいぞ?」

目の前には顔を悩ませている魔族3人がいる。

あれから一日が経ち家に着いたおれは酒場での一件(勇者云々まで)を彼らに報告した。

「私たちが離れているうちにそんなことになっていたとは・・・。
しかも拠点を2つ落とされたか」

「距離的に近いトロン、カタロスでしょう」

「だな・・・。ジークよ話ではどちらが優勢なのだ?」

「アドリア。って言いたいところだけどな、国っていうのはいい結果しか広めないから断言できない」

「そうだな。しかしあそこは国境の2点だ、先手を取られたのは違いない」

おれの中途半端な答えに少し落ち込むエリス。そのままリザと話しこんでんでしまった。

でも、エリスのこの反応、気になるな。魔界でどんな立場だったんだコイツ?

いつも気品を感じさせる態度、おれでもわかる魔法使いとしての才能、護衛は爵位持ちときたまんだ。

以前それに着いて興味本位で聞いてみたが本人にははぶらかされ、

ジェスは知らないと言い、リザは・・・まあ言うまでもない。

魔族社会がどんなのかは知らないけど、きっとかなり上の位だろつなコイツんち。

「さてと、おれはまたちよつと出るぞ・・・て、どうしたエリィ？」

「また・・・遠くに行くの？」

それじゃ、てな感じで玄関に向かおうとすると目の前にエリィがたっていた。

そしてなぜか寂しそうな声と潤んだ目で迫ってきてそれがおれをパニックに陥れる。

「おっおいおい！どうしたっ」

え！なに！？おれ何もしてねーぞ！ああっ泣きそう！？

「寂しかったんじゃない？初日は元気そうだったけど昨日は暗くてさあ『ジークウ』って見てるこつちが辛くなつたよ。」

「え？・・・そうなのかエリィ？」

「・・・（コクン）」

なんと言つことでしょう

放置すればするほど大きく弾けそうな爆弾のような涙がみるみる二つの目に溢れてきているではありませんか。

と、ふざけてる場合でもなくエリィは今にも涙を流しそうでギョ

つと結んだ口はプルプル震えている。

しかあああしー！！長年近所のガキどもと暇さえあれば共に遊び、そして数え切れないほど泣かしてきたおれの経験を舐めるでない！！えっ何したかって？普通に『手放しタカイタカイ』とか『人間風車（両手持って大・回・転）』だよ？

そして発動！幾度の泣かした子供たちを経て習得した『泣く子も黙るゴットハンド』！！！！

まあただ頭を撫でてるだけだけど、これが結構効果ありなのさ。

なんせ今年も10人くらい泣かせたが全員これでピタツと泣きやんでるからな！

（19にもなった大人が子供を泣かすのはどうなんだろうか・・・）

「行かないって。安心しろ。達成報告でギルドに行くだけだよ、一緒に行くか？」

ナデナデナデナデナデナデナデナデナデナデ・・・むっ戻ったか？

「行く！！」

「ぐふう！？」

答えは喜びの返事といつかのアクセスボアを思わせる突進だった。くそ・・・選択ミスった。

「ところでジークさん、着かぬ所を聞きますがその袋から飛び出してる剣みたい鋭くて赤くて綺麗なソレはなんですか？」

一人かやの外だったジェスがおれが持っていた袋から大きく飛び出たアレを指さしていた。

「これ？あー。・・・ドラゴンの角」

「あれはマジだったのか・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「　　」

「えらく上機嫌だなエリイ」

「だってジークが帰ってきたんだもん」

暗くなり魔灯で照らされた道でエリイはおれより前で鼻歌を歌いながらくるくる回っている。

あれからエリイは随分変わったがその姿はあの夜の川の時と変わらず、光に照らされた白銀を思わせる髪と容姿は相変わらずキレイだ。

彼女の窮地を助けたことでそれなりに頼られてるとは知っていたけど、離れたただけでこうだとは・・・。

おれという存在は思いのほかエリイの心にくい込んでしまっているらしい。

「エリイ」

「ん？なにジーク？」

「エリイはこの都市の人達をどう思う？」

「うーんっとねー。とっても良い人達だよ」

「そうか。じゃあジェスやエリス達は？」

「友達ー！。魔族だけど優しいもん」

偽りなく正直に答えるエリイ

「じゃあ・・・おれは？」

するとエリイはピタツと止まってなんか下を向いてモジモジし始めた。

「え・・・と、その・・・ゴニョゴニョ」

「ん？何？」

無粋にも聞き返してしまうおれ。

「す・・・き。なのかな？」

「いや、逆に聞かれてもなあ」

すると徐々に声の大きさが上がる。

でも話してる本人も何だかわからないという感じだ

「私がここに来て出会った人たちは皆いい人達で、みんなスキだよ。でも・・・ジークへのスキとはなんか違う」

うつ、赤くなつて見上げてくるエリイの顔がおれの心を深く抉ってくる！！

急になんだこの気持ちは、こっちまではずかしくなってきたぞおい。

「ジークとはいっても一緒にいたから分からなかったけどジークがいなくなつとき最初は平気だったよ。

だけど・・・1日くらいしてから少しずつ・・・怖くなってきちゃつて。ジェス達と・・・いたのに、

うつ・・・また、1人に・・・つく。なるのになつて」

身の内を話すエリイは終いには目に涙を溢れさせ嗚咽をこぼし始めた。

・・・見てるだけで凄く心が痛い。

「泣くな泣くな。今は目の前にいる。それに言つたろ？お前は笑つてた方が似合うつて」

「うつ・・・ひくつ・・・うつ」

「ああもう!!」

泣きやまないエリイに自分もどうすればいいのか分からず勢いでエリイの手を取ってそのまま自分の胸に抑え込むように抱きしめた。さっきのアレを使わなかったのは単に思いつくよりも早く体が反応したからだ

ただ抱きしめた。それからどれくらい時間が過ぎたか分からないくらいその状態が続く、気づけば腕の中のエリイは泣きやんでいた。充血させた目で見上げ、おれの一言一句を聞き漏らさないよう息すら止めて、ただおれの言葉を待っていた。

「・・・落ち着いたか？」

返事は無言の頷きだった。

「こっからちよつとマジな話するんだけど、聞いてくれるか？」

「うん・・・、聞く」

やっと落ち着いたのを確認してエリイを放し、それでも両手をエリイの肩に残して語りかける

「酒場の一件の話はまだ続きがあつたんだ。ソイツらによると隣国のアドリアがある特定の人達を各地から集めてるらしい」

「それが私に関係あるの？・・・」

告げるのに少し躊躇してしまう。できればこの子にはもう平穩の

中で幸せに生きてほしいのに・・・

「集められてるのは『精霊を目視・会話が出来る女性』が条件だ」

「あっ・・・」

「わかったか？エリイ、おまえはまだ危ない状況にいるらしい」

実際あの国が何をしでかそうとしてるのは分かってはいない。
だが戦争中の国に連れて行かれれば無事に済むわけがないのは明白だ。

そんな事はさせやしない。

いつ死ぬかもわからない生き地獄に帰してなるものか！

「じゃあ、また私は・・・」

「だからおれが守ってやる、絶対だ！」

エリイの言葉が続く前に、それをかき消すほどの声で遮った。

「でもそれだとまた」

「これも前に行ったはずだよな。」おれを頼ってみないか？」って。
あの言葉に期限なんてつけた覚えはない。

それになエリイ、お前と出会ってまだたったの数週間だ。それでも、お前といった時間はスッゲー楽しかったんだぜ。

たった数週間だったけど、お前はもう他人じゃない。おれにとっ

てお前は・・・」

「わたし・・・は？」

ゴクツとエリイから息をのむ音が聞こえた。よく見れば彼女の頬は赤くなっていた。

日が沈み辺りが暗くなっていたがそれでも赤くなっているのがよくわかる。

「いもうとみたいなもんだ」

「・・・・・・・・・・」

エリイのジト目攻撃がジークに直撃！！

「あれ？どしたエリイ。なんか気に障ったか？」

「むー。まだ妹か・・・」

まるで“子供が親からほしがってたものをプレゼントされた時それが予想と違って不満を抱いてる”みたいな顔をエリイはしてる。すると親の立場であるおれはすごい罪悪感に襲われてるわけで・・・

「ふふ、まだまだこれからだもんっ」

何か悪いことをしたと思い落ち込んでいたおれにはよく聞き取れなかった。

文句の一つでも言ったのかと思ったがエリイは両手を胸のあたりに持ってきてグツと握り、何か意気込んでるかのようだった。

「えっ今何て言った？」

「うっん、いいの。これからもよろしくねジーク」

「?・・・。応っ分かった！」

話が終わったところでちょうどギルドに到着した。

「数日ぶりティーナちゃん・・・ん？あいつ等はもう帰ったのか？」

「ほんとだ、誰もいないね」

「よく帰ってきたのうジーク」

誰もいない静かなギルドでおれとエリイを出迎えたのは杖をついた顔に深い皺を刻み長く蓄えられた髭を生やした老人、このギルドの長、ギルドマスターだった。

「あれ、どうしたマスター。此処に出てくるなんて久しぶりじゃん。いつも隠居隠居って言って仕事丸投げしてるあんたが此処に一人つて何事？」

「余計なことは言わんでいいわい。大体ワシはもう80じゃぞ？もう死ぬぞ？別にいいでないか」

「言いきるなよジジイ。んで、一体何の用だ？」

するとマスターは視線をおれから外し空いた手で自慢の髭を撫で

ながらあっちこっちと目を泳がせた。明らかになんか困ってる。

「それなんじゃがのう……。おお！その子が噂に聞くお前が連れ帰ったというエリーナちゃんか」

「は・・はい、新しくこのギルドに入りました。よろしく願いますオジイちゃん」

この子は老人と会ったびに“くちゃん”だなあ。その辺はすごいと思う。

「ほっほ、いい子じゃないか。うむ、合格」

「何がだよ、いいからさっさと用件言えよ。もう忘れかけてるだろ？」

「ふお！・・・そうじゃった」

これだよ。このジジイもう頭がボケてきてるからさっさと話を進めないとすぐ忘れる。

「今朝、このギルドに通達があつてのう。内容が内容じゃからマスターであるワシ自身が伝えねばならぬと思つてな」

「通達？また別の魔獣が出たのか？」

「そうではない。新しい手配書が来てな、よりによってその人物が我がギルドから出たのじゃ」

そういうマスターは何故か呆れ顔だった。

ギルドから罪人が出る、おれ達に取っては身内が罪を犯したのと同義だ。だからその知らせは大きな衝撃を持っていた。

「マジかよ……。その馬鹿はじゃあ誰なんだ」

するとマスターは深いため息をつき、おまけに冷めた目をつけてこつちを見る

「一応聞いておくがお前は心当たりはないのかのう」

「ないな。最近はギルドによく足を運んでないし、ましてやこのギルドにそんなことする馬鹿がいたのかすら知らなかったよ」

そのときのジジイの顔はまるでゴミを見るかのような感じだった。なんだろう……。前にもこんなことがあった気がする。

「これがその大バカ者じゃ」

ジジイが懐から取り出した例の手配書を受け取り、おれはその“大バカ者”を直視した。

「……………あれ？」

26話 おれ帰還！そして変化（後書き）

因みにジークが撃退したドラゴンは下位です

おまけ 勇者

「ほんと、ファンタジーなんだなあ此処って」

俺は黒川純^{くろかわじゅん}。この世界で言うならジュン・クロカワ。つい先月くらいまで日本に住んでた17歳の高校3年生だった。

その俺がなんでこんな所にいるのかというと、異世界から“勇者”として呼ばれたのが原因だ。

道端を歩いてたら突然目の前が光って真っ白になったと思ったら目の前には杖を持った俺と同じくらいで腰まで伸ばした白髪のものですごい美少女がいた。・・・あとその時は気付かなかったけど彼女の後ろには中世の騎士と似てる人たちがズラって2・30人くらいた。

開口一発目で「勇者よ、我らをお助け下さい」だぜ？突然のことで驚いてたけどちゃんと意識を持っていたら絶対吹いてたな。

普通の人たちだったらパニックになってただろう。でも俺はそうならなかった。

召喚？勇者？俺が？この見た目だけはちゃんとしてて実はいつもパソコンにかじりついて運動音痴なこの俺が？クラスの女子から“顔だけ良くてあとはキモい”って言われてた俺が！？

頭の中は歓喜で一杯だった。

だってこれあれだろ？ネットとかでよくある異世界召喚もので俺tueeってやつじゃん！！

しかも俺を呼びだした術者によると元の身体能力は召喚されたことで格段に上がってるらしく、試しに人通り動いてみたら、体に羽がついたように軽くてまるで別の生き物に生まれ変わったかと思った。召喚の後、王様と面会したときこれでもかって思うくらい礼儀正しくそしてカッコよく！振る舞ってやったらすっげー高評価だったぜ。なに？性格が変わった？毎日妄想して、就職先の面接対策した高3舐めてんじゃねえ。

あっちの要求は今この国と戦争してる魔族と一緒に倒してくれだつてさ。最初はどうしようかと迷ったけど、勝った暁にはそれ相應の位をくれるし、良ければ娘（召喚の時目の前にいた美少女）をもらってこないかだつて。勿論即okした。

最初の訓練で一般の騎士達と戦わされたけど初めてにしては結構いけた。連戦で10は超えた。

今では王宮騎士と肩を並べる強さが手に入った。

そしてファンタジーの醍醐味っていったらやっぱり魔剣！！

なんでもその魔剣（いや聖剣か）は時代の英雄や勇者しか使えないように、選択の間といわれる所に深く突き刺さっていた。

内心抜けるかドキドキだったけどあっさりと抜けた。周りも聖剣が抜けたことでスッゲー驚いてた。

これでやっと勇者黒川が誕生ってえわけだ。

で、この聖剣ヒュペリオンがこれまたチートってやつ？

持った瞬間俺の身体能力はさらに倍、魔法もバンバン使えるようになった。

しかもこの剣の名前を叫んで振り切ったら大きな光の斬撃が出るん

だぜ！！

1回だけ使用したさ

回想

「ヒュペリオン!!!」

シュウウン・・・ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオン!!!!!!!!!!!!!!

ちよ
w、
これ
クス
カリ
バー
w
w

回想終了}

目の前でいた50匹くらいの魔族が大きな光の波に飲み込まれて塵になった。何人か味方がいたけど仕方ないだろ？ 思い出したら笑えてきた。

「どうしかったですかクロカワ様？」

「ちょっとね、前の魔族の拠点の戦を思い出してただけさ」

俺専用を用意された部屋に王女様と2人きりだ。名前はシエルフィ
ー、ほら名前からして美女じゃん。

王女っていうから偉そうだと思ってたけど、意外と可愛くてさ。いつも一緒にいる。戦場でも彼女の魔法は活躍し、『アドリアの聖女』と呼ばれてる。うん納得。

彼女も俺に惚れ込んでいる。まさに両思い、ラヴラヴだ。いつもは専用の侍女を連れていてなかなか二人きりになれないから貴重な時間なのだ。

因みにその侍女も姫様専属というだけあって唯者じゃない。何度かシエルフィーを担いで彼女を巻こうとしたことがあるがその度に先回りされてしまう。というか彼女自身戦場でも僕達と一緒に立って戦ってくれるパーティーの一人だ。こういう人に限ってかなりの実力者だから経験不足の僕ではたぶんまだ勝てないと思う。

「あのときのクロカワ様はとても素晴らしかったです!!」

「そうでもないさ、シエルフィー達のおかげだ」

「まあ、クロカワ様ったら もうあなたは誰よりも強いでは「いやまだだよ」あ・・・」

あー、そういえばこの世界って強いのは魔装具とか魔族だけじゃないらしい。

以前隣国の騎士団長が来た時、調子に乗ってちょっかいかけてみたことがあった。

ほら『騎士団長』って名前からして強そうじゃん？この国の奴はそれほど強くなかったからきつとそいつも同じだと踏んでたんだ。

でも結果は惨敗、攻撃は掠りもしなかった。常人では反応できない速さでもそいつはヒヨヒヨイかわしたんだ。それでムキになってヒュペリオンまで使って挑んだでも結果は一緒。しかもアイツは自分の獲物すら抜かなかった。最後は「ふん」って鼻で笑いやがった！！

これ以上にないくらい屈辱だったね、魔法も使おうとしたけど魔力を練った瞬間無力化された。

なんだよあのバケモノ、魔族よりよっぽど強いじゃないか。

あとで聞いたらその男は“加護持ち”という存在で今までアイツは負けたことがないらしい。俺を呼んだ術者もそうだっていうしね。ある人は“人の皮を被ったバケモノ”って言ったくらいだ。

最終的な目標『打倒クソ騎士』が決定した瞬間だ。

その後やつ当たりを込めて遠征中に聖剣使ってうさ晴らししたらすつきりしたけどね。

「そう焦らなくともいずれば超える壁です。私はクロカワ様を信じています」

「ありがとう、頑張るよ」

「はい（真っ赤）」

コンコンッ

「どうぞ」

「そろそろ出発です。したくなさい、クロカワ。・・・王女様もおいでのようで」

入ってきたのは黒い甲冑を着こんだ長身の男性、行動を共にしている元傭兵のデュランだった。なにをして剥奪されたか知らないが元3階級という破格の階級保持者だったらしい。

いつもは冷静で紳士のようなだが戦いになると笑いながら相手を切り刻む変態だ。

その実力は確かで、今では俺×聖剣とサシでやりあえる一人で同時に他の奴よりも強いということと彼に鍛えてもらってる。

・・・ときどき舐めずり回すような目で見るのはやめてほしい。

腰に刺してる剣は同じく魔剣で刃の根っこに大きな目玉が着いてる
悪趣味な装飾が施されている。凄く興味があるけどデュランの戦闘
狂とその剣の装飾からして碌なものではないと思いついてる。
一度彼に前に来た隣国の騎士に勝てるかと聞いたが勝率はとても低
いと言われた。そしてあの男が元2階級の伝説の傭兵だと聞かされ
てさらに驚いた。

「もう？次はどこ？」

「前戦と程遠くないところです、カタロスといいます。あそこは魔
族だけでなくドワーフなどの種族も共存していると聞きます」

ドワーフか・・・そういえばこの世界はいろんな種族がいるって聞
いたけどまだ見たのは人間と戦場で見た魔族くらいだな。人間は言
うまでもなく地球の人と大して変わらないけど魔族はそれぞれが個
性的だったな。全身紫で二本足で立つ牛男だったり、リザードマン
っていう人型爬虫類がいて周りの奴らが言う絵にかいたような容姿
だったが戦っていた中には人間と全く変わらない姿をした魔族もい
た。

なんというか・・・ねえ？

「まあ、あの魔族と共存する種族がいるなんて信じられません。で
すが魔族に手を貸すなど愚かなことを。等しく断罪を受けるべくで
すね」

「・・・そうだね」

ま、別にどうでもいいけど。俺はただハッピーエンドを迎えたら
それでいいさ

おまけ 勇者（後書き）

うーん、よくいるかませ犬？

王女の最後のは別に彼女自身の意志ではなく国の意志のようなものです。

生まれさえよければ・・・みたいな。

27話 これでおれも犯罪者

「あれ？・・・あれ？」

手には“俺のことが書かれている手配書”を持ち、頭は衝撃の事実にショートし口は繰り返し同じ言葉をはき続けた。

「では問うぞ“大バカ者”。お前は何時何処で一体どんなバカをしでかした？言ってみよバカ」

一度で三度もバカと言われた。

「違う！！おれは無実だ！！」

「ホントかのう。とうとう戦闘中に他人も一緒にバツサリいったんじゃないかるうの？」

「するか！！」

もうバツチリ犯罪者扱いである。こっちも何か反論しようとするが頭がついていかず碌な言葉が思いつかない。

「まあ、何をしたかはソレに書いてあるがのう」

「それを早く言えよ！？なにになに・・・」

『この者、我らが領土を侵した魔人である。見つけ次第騎士団への連絡、また、可能なら討伐せよ。』

因みに、この魔人は魔族でも逸脱した実力者である。出来る限り無茶な行動は控えるよう」

・・・・・・・・・・・・・・・・なあジジイ」

「なんじゃバカ」

とりあえず言ってみた

「やっぱ人違い、いや魔人違いじゃね？」

おれの両親は人間だから自分は純粹な人間です。

「じゃのう。大体お前とはヴリトラがいた時からの仲じゃからなあ、それくらいの確信はあるわい」

じゃあ何故散々バカと言ったのだろうかこのジジイ。あれか？日々の扱いの当てつけか？

「じゃがその手配書には魔人『ジーク・クルード』と丁寧に名前までついておる。この人たちは真実を分かってくれるがよそ者や領主はそうはいかぬじゃろうて」

「ジークは何もしてないよ！！こんなの出鱈目だよ！！」

必死に否定してくれるエリイに照れくささを感じる。

「分かっておるよお嬢ちゃん。ワシも彼を信じとる」

「さっきまで何度もバカと言われたんだけど？」

「それはお前がバカをしたからじゃ。本当に何をしたジーク？魔族として手配されるなど前代未聞じゃぞ」

「だよなー。なんでよりによつて魔族に……………」

魔族……………確かいたな……………家に

「あああああああああああ！！！！！！！！」

「ふお！！突然大声を出すでないバカ者！危うく心臓が止まるかと思つたぞい」

「おれ心当たりすつづけええある！」

問題が家に住んです。

「実は……………かくがくしかじか」

ジジイは俺の話を静かに聞いてくれた。魔族を助けたこと、魔族に手を貸してること、ただずっと聞いてくれていた。

「なるほどのう。それだとこの仕業は大会中にいた王都の騎士団のものか。」

しっかし加護持ちと分かりながらお尋ね者にするとはぶっ飛んだことをするのー」

「信じてくれるのかジジイ？おれのやってること」

「お前がこんな時に嘘をつくとは思ってないわい。確かにお前はバカじゃが、それでもちゃんと芯の通ったバカじゃ。お前がすることに悪意がないのはワシらギルドのみんなは誰よりもわかっておる」

バカ、バカ言われたが何だか照れくさくなってきた。

こんな所でなんだかんだで優しいこの老人はおれ達ギルドの親みたいな存在だ。

「オジイちゃん、いい人なんだね」

「そこでじゃ、お前に言い渡すことが幾つかある」

さっきまでの優しい顔は消え、代わりに相手を射抜くような眼をした威厳を持ったギルドマスターがおれを見据えていた。

やっぱそうなるか・・・

「今日を持って我がギルドメンバーである『ジーク・クルード』を・・・破門とする」

静かに、冷徹に、おれの処遇が言い渡された。

「なんで・・・わかってるって言ったのに！」

声を上げて異を唱えたのはエリイだけだった。感情を抑えきれずマスターに走り寄ろうとしたエリイだが手で押さえ制止する。

「いいんだエリイ」

「でも！ジークは「いいんだ」・・・だけど」

これは当然の結果だ。おれは家族に迷惑をかけた。たとえそれが無実だったとしても一度広がった噂は消すことはできない。マスターの選択は家族を守るためだ。そしておれのためでもある。

犯罪者ましてや魔族と噂される人物をもったギルドがあれば下手すればギルドそのものが潰されかねない。そんなことマスターもおれも望んじやいない。

「それでも、ここはおれの家で・・・みんなおれの家族だ。それは変わらない」

「すまないなジーク、ワシにはお前を守ってやれなんだ」

「いーって。皆は信じてくれてるんだろ？それだけで十分だ。大体おれはもう19だぞ、もう守られるだけじゃねえんだよ」

「・・・そうじゃな。」

そういえば、お前にはまだ今回の依頼の報告を受けてなかったのう。どれ、最後はワシが務めてやろう」

ゆつくりとした足取りでカウンターに行き、よっこいしょとその身を椅子に降ろした。

その風景は、昔おれがまだガキでギルドに遊びに来た時と変わらなかった。

そういえば、最初の依頼を受けて報告を済ませた時もマスターが此処にいたっけな。

「・・・確かに、依頼はこれで達成のようじゃ。・・・強くなったのう、ジーク」

「ああ」

「おお！！良い知らせじゃ、ジークお前はこれで3階級に昇格じゃ！！おめでとう」

突然立ち上がったと思うと意味のわからないことを言われた。このジジイは何をほざいてるのだろうか。またボケたか？今のおれを昇格とかするか普通？

「は？いやいやなんでだよ。今このときなんだよ」

「なんじゃ？いやなのかのう」

「べつにそうは言ってねえ」

「なに、旅立つ我が子へのちょっとした贈り物じゃ。もう階級が上がらぬのじゃから此処で上げとかねばな、スマンがこの田舎じゃお

前の階級はこれが限界じゃて。じゃが、我がギルドから初の3階級傭兵の誕生じゃ。胸を張れ！お前は手配される前は3階級傭兵じゃったのじゃー！」

いい年した老人が親指グーするのはどうかと思うが、その贈り物は確かに大きく素直にうれしかった。

俺がとうとう3階級か・・・

「ありがとう・・・マスター」

「ふおっふおっ、頑張れよバカ息子。」

ああ、それとな、旅の準備はゆっくりするがいい。明日発てばよい」

重ね重ねこの人には頭が上がらないな。この借りはきつと返す。

「ほんと、世話になった。・・・じゃあな」

最後の別れを告げてギルドを離れた。

「・・・ぐすっ、・・・ふえ」

「なんでエリイが泣くんだよ」

「だって・・・納得できないんだもん」

「そうか？・・・おれは嬉しかったぜ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

sideエリーナ

ジークは満足したみたいだけど私はあまり納得がなかった。
だってジークは何もしてないのに（ある意味大犯罪犯してます）

！！

話を聞く限りだと原因はこの前ジークが戦ったこの国一番の騎士らしい。

決めた！いつかその人に一発お見舞いしてやるんだ！！

どこぞの勇者と願いが一致した瞬間である。

そして完全に夜になり家に到着すると留守番をしていたリザ達は何とも言えない空気を放って・・・と言うより帰ってきたジークから目をそらしていた。あれから一時間も経ってないけど一体何があったんだろう・・・

「お、おかえりジーク」

「ただいま。なんかあったかお前ら？」

すると核心を突かれたようでジェスは私にもすぐわかるくらいビクツと肩を震わせた。

「えつとね、その・・・ごめん」

「は？いきなりなんだよ。さらでも割ったか？」

「違うよ。・・・そんなんじ」「もういいジェス。私が話す」リザ・・・」

「ジーク、お前が魔族として手配されたことは知っている。私たちのせいだ・・・すまない」

謝罪を口にしたエリスはそのままジークに向かって頭を下げ、それに続いてあとの2人も同様に頭を下げた。

エリスの告白に私とジークは驚いていた。だってあの時はギルドに3人しかいなかった。オジイちゃんもまだ内密だって言ってたし。

「なんでそんなこと知ってただよ？確かに手配されたけど公表はまだされてないぞ」

謝れることに慣れてないジークは困ったなあど頭をガリガリかいた。

「リザを着けていたのだ。リザは隠密に長けているからな」

そつえばリザさんは影を扱う魔法を使う。前に私たちの前で影の

中に消えてくのを見せられたことがあった。それなら誰も気付けないかもしれない。

「そうか」

「お前たちのせいで・・・おれは」

「あ・・・」

急にプルプルと震えだしたジーク。それを見て言葉を無くすジェス。

絶対ワザとだ、俯いてるけど私からはにやけてる顔が丸見えだもん。笑いを堪えて震えてるもん。

この状況じゃ誰だって騙されるに決まってる。

ちよつとジェス達が可哀想だ。この場で唯一主張が許される私になんとかしないと！

「ジーク、もう止めてあげたら？」

「いいんだよエリィ。僕達のせいなんだから」

ジークの怒り（おふざけ）に対してジェス達は何の抵抗も見せない。例え許されなくてもそれでいいといった覚悟が感じられる。

これはジークがいけないよね？

「笑うなんて失礼だよ」

「は？」 「なに？」 「・・・」

「あ！言うなよエリイ！！」

焦って私の口を抑えたジークだけでもう言っちゃった。こればかりは仕方ないと思う。

すると突然何かを感じたジークが硬直する。同じく何か危ない気配を感じた私は早急にジークの手を逃れて安全地帯へと逃げ込んだ・・・こわい。

「あーあ、言っちゃったよ。・・・ったく、エリイは冗談つてもんを知らんな・・・なあ？」

そう言っただけジークはジェス達に問いかけるけど返答は全くない。しかし、ジークの開き直った態度にこの部屋にかかっていた謎の圧力はより大きくなったと思う。

「確かに今回は明らかに僕達が悪くかったよ・・・」

「さすがの私も頭まで下げたのになあ・・・残念だった」

「エリス様・・・命令を」

3人各々が剣に手を置き呪文を唱え始めた。

「や、やだなー。軽い冗談だろう？な？・・・だからその武器を下げる。あと詠唱もやめろ！」

必死の制止も叶わず、さっきの態度から一変し魔族達は断罪を受ける側から断罪する方に変わっていた。

そして愚かな罪人に無慈悲な判決が下される。

「やれ」

ここから目と耳を塞いでいた私にはジェス達は何をして、ジークが何をされたのかは知る由もなかった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「まったくよー。ちょっとした遊び心じゃねえか、あそこまでのことねえだろ」

地獄の一時から解放されたジークは私の治癒を受けて明日の支度

のために家中を歩き回って、それに私も手伝っていた。

治癒と言っても応急処置程度だから私の経験上絶対安静が必要の状態だったけど、完全復活を遂げてピンピンしているところを見るとやっぱり加護持ちは凄いと思う。

「ホントに大丈夫？」

「あー。大丈夫大丈夫、エリィのおかげで 完 全 回 復 だ！」

「そう？よかったあ」

私のせいでジークがあんな目に会ったわけだけど、そのおかげで役に立つことが出来たのは嬉しいな。

私はこれしか役に立てない、・・・ジークがまた怪我をしたら役に立てるかな？

「（ゾクゾク）！？・・・誰かが何かよからぬことを企んでる気がする」

むっ・・・しょうがない、別のやり方を考えよう。

「さてと・・・これで支度は終わりだな」

必要なものを取りだした後、用を終えた各部屋は綺麗に整頓された。

やることを終えたジークはその部屋一つ一つにまた入り、そこで何かをするでもなくただ時間をかけて辺りを見回すと次の部屋に入るのを繰り返していた。

何をしてるのは聞かなくてもわかる。最後となる我が家を見て、その風景を頭に焼きつけているに違いない。この家は数週間私にとっても我が家だった、それに対してジークにとっては長きを共にした大事な故郷だ。何気なく置かれた家具にも小さな思い出がつまってるはず。

「ねえジーク」

「あれ？いたのかエリイ。もう遅いから寝てていいぞ」

廊下を歩いてるあたりから見てたけどジークは私に気付いてなかったみたい。相変わらず笑っているけれどその笑みは何処か寂気だ。

「また・・・また帰ってこれるよ」

「・・・そうだな。また一緒に帰ってこよう」

「うっうん！」

せっかく励まそうと思ったのに、逆に自分がジークの言葉に困惑してしまったのがすごく恥ずかしい。

“ また一緒に帰ってこよう ”

その言葉は私が寝るまで、頭の中で何度も繰り返された。

s
i
d
e

e
n
d

28話 旅立ちと事情

都市を旅立つてからどこへか続く道を唯歩いていた。

何故おれが知らないのか、それは唯単にエリス達に着いて行つて
るだけだからだ。

「すごかったね。あの見送り、ジークもエリイもかなり親しまれて
たんだね」

「ったくよー。ギルド総出、おまけに都市のやつらまで揃って来る
なんて信じらんねえぞ」

あれは驚いた。まだ人が起きるにはまだ早い時間に門へ行つたら
何十人もの集まりが出来ていた。

しかも揃いにそろつておれの見送りなのだと。出発を朝早くに決め
たおれの浅はかな考えは皆にはお見通しだったらしい。

「それ程人望が厚かつたつてことでしょ？皆ジークのこと信じてる
んだよ」

「そう言っておきながらお前、嬉しそうにニヤニヤしていたぞ？」

相変わらずからかい口調のエリスにムツときたがそれに対しては
否定もなければ異議もない。

「まあそうなんだけだよ」

嬉しくないはずがなかった。ギルドの奴らから近所の連中、中には無理して起きてきた子供達まででそろってたからな。ついホロっときちまったじゃねえか。

「一部は違っただけだね」

と笑うジェス。・・・いたなそんなの。感動を返せこの野郎。
中に大きな旗持ったむさい野郎どもがいてさ。振ってる旗ときたら

『いかないでエリーナちゃん!!』

って大きな字で書かれてたからな、そいつ等最後までエリィエリィって叫んでた。

躊躇なく撤去したがな・・・!

そんなのが極一部いたが大概は俺との別れを惜しんで泣いてくれていた。

ギルドの皆に、ご近所さん一同、依頼で世話になった人達、酒屋の飲み仲間、いつもケンカしたジツちゃんこと鍛冶職人達、・・・数えればきりがなかった。

さすがに一緒になって声をかけてきた門番とか兵はどうかと思っ
た・・・まあ知り合いだから良いけど。

『いつてらっしゃい!』

最後に『さよなら』と言われなかったのが凄く嬉しかったな。
また帰ってきてても良いんだと・・・

結局おれ達の旅立ちには静寂には程遠いたくさんの声援で見送られたのさ。

「ホントに良い街だったね・・・」

また昨日の憂鬱モードに入ってしまった。おれにあんなときいてまだ気にかけてくれているらしい。ジエスも結構なお人よしだ。

「だからそんな顔すんなってジエス」

「そつだよ、私達はまた帰るんだから。ねえジーク」

『いつてらっしゃい』って言われたからには『ただいま』って言うつもりだ。

「そゆこと、もうそんなこと気にしないでいいぞ。もうおれ達は仲間だからな」

「ありがとう、わかったよ」

— 先ずジエス達の罪悪感は解消出来たか？

「しかしジークよ、今更んなんだがエリイはつれてきて良かったのか？手配されたのは飽く迄お前一人だったはずだ。あの見送りに来てた連中のどれかに預けるのも一つの選択だったのではないか」

ホントに今更の質問を聞かれた、実際エリイは手配も何もされていないし無関係に近いからそう思ったのだろう。

「それは無理だ。お前らには言っただけ、今魔族と戦争してるアドリアがエリイみたいな性質を持った女性を各地から集めてるらしいんだ。この国とアドリアは同盟関係だから、いつあの都市に奴らの手が伸びるか分からないからな」

「それにジークが私を守ってくれるって言ったんだよ。だから私はジークに着いていくよ」

「あんまり言うなよ。あ！そんなくつつくな！」

放しませんとばかりに右腕にしがみ付いてくるエリイ。振り払おうと思えば余裕だが可哀想になるからしない・・・何よりおれ得だから。

でもあのことはあまりぶり返さないでほしい。よく考えたらあれは結構恥ずい。

勢いとはいえ何しちゃってんの昨日のおれ・・・穴があったら入りたいとはまさに今この状態のことを言うのだろうか？

「・・・確かに言っていたな、2人で抱き合いながら」

リザのさり気ないカミングアウトは突然だった。

「は？・・・お前なんで知ってたんだよ！」

リザ、何故知っている？

あ！確かこいつ昨日おれ達を着けてたって言ってたな。

見たのか！？見たたのか！？あら・・・よく見たら少し笑ってる？
見てたんだな！！

「えへへ・・・」

焦るおれを余所に頬を紅潮させて恥ずかしがるエリイ。満更でもなさそうなのがおれと違ふところだ。

他の反応は予想どうりの結果だった。生温かい視線がおれを貫いてくる。でもちよつと予想外なのがジェスとエリスが少し乗り気でないことだ。この手の話は苦手なのはたまたまウブなだけなのか。

「むむ・・・む」

「・・・いつか・・・僕も」

なんだろう・・・季節はまだ夏なのにここだけが春の匂いがする。おちよくられるのが避けられたことはおれにとって吉の方向へ動いたに違いないが。

「・・・ま、先に進もうぜ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「はい！今から第一回お尋ね者達（1人を除く）会談を始めたいと思います」

「何だ、急にどうしたジーク？」

人気のない森で休憩中、さっきまで煮込んでいた昼飯の鍋を中心に団をとっていたのを期と思い、おれはいづれ問題になるだろう事をここで話し合うことにした。

「議題はこうだ。『これからおれ達はどうする？』どうだ、話し合うべきじゃないか？」

「ああ」「なるほど」「確かに」

おれとエリイは仕方なく都市を離れたわけだが目的は持っていない。行くところはないし行きたいところも特にない。このまま各地をぶらついててもメンドい追っかけっこの繰り返しになるだけだろう。それにこれは互いを知るいい機会だ。これまで一線は控えていたが、もう仲間を口にするからにはエリス達の事情は知っておいても良いはずだ。

「お互い腹の中ぶちまけようぜ。こちらら家もほっぽり出してきたんだ。いやって言うてもついてくからな」

この手を使うのは卑怯な気もするが気にしない気にしない。早く話を進めるためだ。

「そんな！嫌じゃないよ！唯でさえこの地を魔族3人がうろつくのは気が気じゃなかったけど、加護持ちのジークと治癒を使えるエリイ、すごく心強いよ！」

もう少し戸惑うかと思っていたが答えは即答だった。嬉しい意味で否定をしてくれた。

「そうだな。いくら私達が強いといえど前のような不祥事があるやもしれん。その気持ちありがたく貰い受けよう。しかし・・・そうだな、私達に着いてくるとなれば私達の目的を知らねばならんな。ちようど良い、ここで話しておこう」

どんな話が聞けるのだろうか。魔族の事情なんて聞けないからな、オラワクワクすつぞ！

「まずは改めて名乗るとしよう。

私はエリス・ヴァーティア・ヴァルハラ・・・現魔王の一人娘だ」

一瞬世界が止まったかと思った。

「は？」「へ？」

んー。聞き間違えかな？よく聞こえなかったわ。ほら、エリイもおれと同じ風に首をかしげてる。

「ごめん、聞き取れなかったからもう一回言つて。出来ればハッキリと」

「この近さで聞き取れないとは仕方ないな、単純で分かりやすいと思うのだが」

だよなー。おれ等の耳が悪いんだよなー。おれ聞いてないよー。エリスの口から『魔』だなんて聞こえたはずがない。エリスが『王』って言ったはずないさ。
・・・なんでだろう、ジェスとリザが『諦める』って目で見てくる。

エリスは大きくスーハーと深呼吸をする。ドでかいのがきそうだぜ。

「もう一度言うぞ。私は・・・ま！　お！　う！　の！　む！　す
め！　だ！」

音のない静かな世界が生まれ十数秒ほど経った後

[illegible]

人気のない森に男女の叫び声が響き、その声は近くの都市まで届いたという。

「-じゃなくて!!魔王の娘!?!お前が!?!どうして!!なんで!!お前が!?!」

現実逃避をやめ勢いよく立ち上がったおれはまともに機能しない頭の内をそのまま吐き出した。

「そう言っておろうが」

エリスは世間話のように平然と言ったのけた。しかしおれたち聞いた方にとってはとんでもない爆弾発言だ。寝耳に水どころが寝てる所に上級呪文をブチこまれた位の衝撃だ。

よく考えてみる、唯でさえ人間にとってバケモノのような存在のそれまた上の上のバケモノの娘だぞ！これが驚かずにいられるか！！

「落ち着け」ドス！！

「たば！？」

リザによる強烈なパンチがおれの鳩尾に突き刺さった。腹から背中へ突き抜けた衝撃は遠慮が欠片も感じられない。いつかおれが放った獣人への鉄拳制裁のよりも力が乗っていた。肉体の耐久力に自信はあるが、突然それも無防備な急所への攻撃はおれを激痛と呼吸困難の二重苦へと陥れるには十分だった。

「だっ大丈夫ジーク！？」

心配したエリイが凄い速さで駆け付け倒れ伏しているおれの背中を懸命にさする。こういうのに治療術が効かないのが痛いところだ。エリイの行為は正直慰めにもならないがそれでも不思議と治りそうな錯覚を起こす。

「ぐ・・・がふつ・・・ごほごほつ・・・っふうー。ありがとエリイ。もう背中さすなくて良いぞ。

「つーか何しやがる！！魔族のマジパンチとか洒落にならんぞ！！」

「加護持ちのお前にはこれぐらいしないと効かなそうだからな。ス
マン。それなりに本気でいってみた」

反省はしてる、後悔はしてない！この言葉に尽きる返事だった。

「効くって何！？お前は気付かせる度に相手に瀕死の重傷を負わせ
んのか！！」

コイツへの考えはかなり変更がいるな、まともな奴かと思ったら
コイツイイ性格してやがる。

「おれが肉体系の加護持ちじゃなかったら体が爆発する威力だった
ぞ！！」

「ぼくもときどき手合わせしてるから分かるけどリザは結構な筋力
だよ、それによく耐えたね・・・」

自身も顔を青くさせながら言うジェス。おそらく今のと近い経験
をしているのだろう、言葉に説得力が感じられる。

そこでエリスがパンパンツと手を叩き仲裁に入りまた話は戻る。

「続けるぞ。まず簡潔に言つと私は魔王を父に持っている。いわゆ
る王女だ」

「ははあー！！」

間が空いて頭がサッパリしたおれとエリイの反応は早かった。即
座に両膝を地につけ頭も地に着く勢いで下げそこに両手を添えた。

一般庶民が知る典型的な敬い方だ。

「2人そろって急に身を下げな。よい、お前達は私達の恩人なのだ、楽にするがよい」

こっちはノリのつもりだがエリスの方は気に入ってるようだ。
やっぱ姫様だな、『いい』って言うけど口調からして下と上おれら エリス
という関係が出来かかってる気がする。

「あつそう、じゃ楽にするか。それでエリス、なんでこんな所にいるんだ？」

「お前は切り替えが早すぎやせんか？もうちょつとぐらい敬え。敵国とはいえ姫だぞ」

「だって楽にしろって言ったじゃねえか。いいだろ、誰に対しても平等に接するのがおれの信条だ」

第一、ここで調子に乗られたらこのままエリスが偉そうにするだろうが、それがなんかムカつく！」

「今さらつと愚痴こぼしたよね？でも一国の王女にその態度だとむしろ清々しいよ」

「今ほど権力にものをいわせたいと思ったことはないぞ・・・！」

どしたのエリス、全身から黒いオーラが滲み出てるぞ。

ん？なんだエリィ・・・聞こえてた？やべ、またいつの間にか心の声が漏れてた。ここが魔族の領地だったら洒落になんねえ・・・気をつけなければ。

「まあいいさ。それは後にしよう。私達の目的は一つ、『ヴァルハラ』に帰ることだ」

「エリス、しつもん。・・ヴァルハラって何？」

「なぬ！魔族の国だ！！知らないのか！？魔学はこちらほど発展してはいないがこちらと同じように秩序ある立派な国だ！」

エリイの質問に目を開いてエリスは驚いた。大げさな気もするけど自分の国を知らないと言われたら良い気分にはならないだろう。ましてや自身が王女という身分にもなればそれは屈辱に近いのかもしれない。

「そう言えば魔族の国の名前なんて聞いたことがなかった。おれも初めて知ったよ」

「そうなの？でも僕らの国って唯一の魔族の国だからかなりの知名度はあるはずだよ。おかしくない？」

「たぶんおれ達の国からしたらそっちは国としても認めてないんじゃないの？」

昔は魔族がさらに暴れてたっていうし、バケモノが国を持つなんて思いたくないとか？

ほら、魔族の領土は大陸でも孤立して隔離されてるようなものだからおれ達は魔族の国があるところを『魔界』って呼ぶんだよ」

「うん。私も魔界は『悪魔が沢山いて、いつも殺し合いしたり攫っ

た者を食い散らした血で地面は赤く染まってる』って教えられたよ」

「なんだその地獄絵図は」

「要は歴史的な問題だろうな。ってそんないから早くここに至った経緯を話せ。そこが気になる」

話が進まん！！新しいことを言う毎に話が脱線してしまう。人間焦らされるのは嫌いな生き物である。

また質問が出るかもしれないからあらかじめエリイには『黙って聞いとこうぜ』と釘を刺しておいた。

「わかった。・・・ごほんっ！

私達がこの地でさすらい始めたのはほんの3ヶ月ほど前だ。最初は私とリザの2人だけでこっちに来ていたのだ。理由は・・・まあ正直に言えばこっちの文化に興味があつてな。旅行・・・と言うのが真実だ。

お父様も度々こっちに来たことがあるらしい」

おい、もう何度も魔王が襲来してたらしいぞ。大丈夫かうちらの国？

ていうかエリスの知りたがりの原因は魔王かよ、バリバリ遺伝してるじゃん。

「もちろん正体は悟られぬ様にしていたぞ。認識疎外の魔法も完璧だった。悟られることはなかったさ。

ではなぜ・・・？そう思うだろう。問題はヴァルハラに帰還する時だ。ここで問題だジーク。今から3か月前の土の月、大きな出来事があつた。それはなんだ？」

「土の月？待てよ。その時って・・・そうだ！思い出した。アドリアが魔界に対する宣戦布告をして戦争が始まったんだ！」

あの出来事は大陸中に衝撃を生んだ。今までおれが生まれてからと言っよりここ百年くらい魔族との戦争は起こっていない。歴史書に載ってる聖戦を最後に魔族は突然侵攻をやめ今に至る。確かそれは魔王が代わったことが原因らしい。侵攻をやめた魔族は依然何の動きも見せなかった。お互い百年不可侵が続き『平和』の日々が続くさなかの出来事だった。

「そうだ、まさにその行軍中のアドリアに目を着けられてしまった。いくら認識疎外の魔法をかけていたとはいえ虫をも許さぬ警戒網、多数に対して効果は意味をなさなかった。あともう少しで国に帰れる所で逃亡生活が始まったのだ」

エリスは徐々に元気をなくした、思い返した過去は彼女のトラウマとなつて残っているのだろう。

次第に体が小刻みに震える様は何かに怯えるようだった。

「こわかった。・・・生まれて初めてだった、あんなにたくさんの殺気を受け止めたのは。思わず腰が抜けた。

リザが囧になつてなんとか時間を稼いでくれたが、すぐ追いつかれるのは目に見えていた」

そりや怖いに決まつてるだろ。数え切れない程の敵を前にしたら常人は失神もの。

いくら魔族が強くても圧倒的な数の暴力にはなす術はない。・・・魔王は大丈夫そうだけど。

彼女らによくぞ生き残ったと称賛を称えたいくらいだ。

「そこで僕はエリスと出会ったんだ。たまたま狩りに出てて逃げる途中の彼女と」

言葉を繋いだのはジェスだった。なるほど、だから一緒にいたのか。

「でも相手は軍隊だろ、どうして逃げ切ったんだ？」

「そこは僕にとっては庭みたいなものだったからね。秘密の逃げ道を使ったんだ。・ヴァルハラとは逆方向だったけどね。僕にはそれが限界だったんだ」

「なぜ謝る。ジェス、お前も私達の命を救ってくれた。お前がいなかったら私とリザはここにはいない。だから謝るな、私はお前に感謝している。その・ありがとう」

「そっ・・あの・・うん、どういたしまして」

あれ？二人だけが違う世界にいるみたいだ。
この二人って『何か起こる アイアンクロー ギャー!!』って関係じゃなかったっけ？

ここはずっと一緒にいたリザに聞いてみるとしよう。

（リザ・・おいリザ！。こっちこっち）

（なんだ）

（前々から思ってたんだがあの二人ってどうなんだ？もしかして・

・コレか？

通じるか分からないが右手の薬指を一本立てて見せる。

（分からない。私も日々影に隠れたりして2人きりになったところをのぞく・・じゃない、見守っていたがどっちも奥手なのか進展がない。互いに気はあるかもしれないが。機会さえあれば・・！）

通じたよ！ていうかアンタ結構楽しんだのな。それなら・・・

（なんだその手は？）

（協力するぜ。お前はエリイと組んでエリスを、おれはジェスを・・
・どうだ？）

（・・・フツ）

ガシイ！！

魔族と人間が世界で初、二つの意味で手を組んだ歴史的な瞬間が生まれた。

「リザ、ジークと手を組んでどうしたのだ？」

お、2人が異世界から帰ってきた。

「いえ、新しい仲間と親交を深めていたのです」

「?・・そうか。これから付き合いは長い、仲良くやれ。ジークも

な」

「はい」「おう！」

この時おれとリザには早くも団結が生まれていた。そして今自分等の考えていたことは同じだろう

『お前らがな！！』

「・・・い！・・・おい！聞ってるのか！」

「へ、なんか言ったか？」

「エリスが私達に何か欲しいものはないか？だって」

「なんでまた。別に要求した覚えはないぞ」

「お前達は私達のせいで巻き込んでしまったからな、何かしなくては私の信条に反する。なんでもいい、何か私にできることはないだろうか」

「そう言われてもなー」

今はあいにく足りない物はない。金も前の依頼でかなり貯まっているし。

「じゃあさ、こんなのはどう？」

ジークはギルドをやめてるけど元は傭兵でしょ？だったら僕達を『ヴァルハラまで送る』って言う依頼として受けるっていつのはどうかな？」

それって・・・すごくいい考えなのでは？

「ジエスくんそれ採用！ってことだエリス。今からおれとエリイはお前らに国へ返すまでの護衛として雇ってもらう。報酬は帰ってからで良いし、いるもんが見つかったらこっちで提示する」

「わかった。それまでお願いするでしょう。よろしく頼むぞ、ジーク、エリイ！」

「了解！」「おう！」

依頼受諾！目指すはヴァルハラ・魔族3人の護衛！！

28話 旅立ちと事情（後書き）

一応投稿しましたが多分また修正します。

29話 森での出会い（前書き）

すいません。ほんとすいません。

29話 森での出会い

結論。おれとエリイはエリス達をヴァルハラへ向かうまでの護衛という形で雇われることになった。

因みに経路はと言うとアレステイナ アドリア ヴァルハラとなっている。徒歩だ。わざわざ敵地を通らなければいけないのはヴァルハラはアドリアとしか国境を持たない。地形的にひょうたんのくびれの部分の様な感じだと言えは分るだろうか？つまりどのみち避けられない道ということだ。周りは海で囲まれているから一応『海路は？』と言ったが即却下された。

そして、おれ達は相変わらず森をさまよい続けてたりしている。

「にしても・・・この森って広いよー。見て、向こうに山があるけどその麓^{ふもと}まで続^ついてるよお」

「確かに。まだ疲れはしないがいい加減うんざりしてくるところだな。気分転換に此处一帯を焼き払ってみるか」「やめとけ」

「なに、この私に掛ければ5分もかからん」

「そういう問題じゃねえんだよ。やめてくんない？おまえ仮にも魔王の娘だから冗談に聞こえないんだよ！！」

「エリスは前からこうだよ。退屈が嫌いで暇つぶしに小さな池を蒸発させたり草原を焦原に変えたんだ」

「なんちゅう自然に迷惑」

「これからはジークも一緒に止めようね・・・」

いやだ！！そんな悟った目でみんな！誰がそんな胃が痛むような仕事をするか！

・・・わ、話題をそらさねえと。

「あ、あれー。エリイが見当たらないなー」

「・・・ふう・・・あつ待つてー」

声はちよつと離れた後ろから。息を切らしたエリイが走ってきた。

そもそもこの森に入っておよそ3時間、それだけ歩いてはまだ終わりの見えない森の大きさにエリイの心身は共に疲れきっていた。もともと馬車も使わず山道から獣道を通る厳しい旅、異常体質ぞろいの4人にエリイが着いていくには苛酷な話だった。むしろ気付いてあげられなかった自分達が愚か者だ。

そのうち馬車か何かでも調達しとくか・・・

エリイの言葉で気づいたことだが、最初にこの森に入った時に見えた山の距離が今見ても縮まった気がしない。だつこの森に入ったときに見た山との距離が変わった気がしないから。

「大丈夫かエリイ？結構歩いたから一休みでもするか、きついんだろ？」

「いつ今のは違うよ！靴紐結んでたんだよ。だから気にしないで先に行こうよ」

迷惑をかけまいと必死に元気をアピールするエリイ。その行動は仲間の中で自分だけがお荷物になっているのではないかという後ろめたさから来ていた。もつとも息は次第と絶え絶えになり己の首を絞めたことに気づいて落ち込む結果となってしまうた。

「ジークの言うとうりだ。まだ先は続くだろう。定期的に休憩を挟もう。なに、追手もここには来るまいしな。何も無理をして先を急ぐ必要はないから辛い時は素直に辛いと言っておけ。エリイが倒れてしまつてはそれこそ困つてしまう」

「・・・はあい」

自分のふがいなさを感じたエリイが首を垂れる。

「じゃあお前らはココで休んでろ、おれはちよつとそこら辺を回つてくる」

「えー。一緒に休もうよ。ジークもたくさん歩いたんだから」

「はははっ、氣遣いありがとな、でも遠慮しとくわ。大体このぐらいでバテるほど柔じゃないんだよ。それに氣になることがあるからな」

「氣になること？」

「ああ、この森はどこかおかしい。これほどバカでかいくせにまだ一度も魔物と遭遇してないんだぜ？今まで何度もこんな所に来たことあるけど、これだけでかけりやもう十回は出会つてもおかしくない。」

「それって良いことじゃないの？」

「まあ普通はそうなんだけどな。ここは静かすぎて逆に不安になるんだよ。だから、リザ」

「わかつた。ここの警戒は任せておけ」

「よろしく。ま、このメンツだと出会つた魔物の方が可哀想だけだな」

この4人・・・やっぱ一人除いて3人は強い。

一番は爵位持ちであるリザだろう。あの影を使った戦術は一言でいえば反則だ。自分の影からウジャウジャ触手を出し、それが一斉に

敵を串刺しにせんと攻撃する。他にも使用方法があるらしい。

エリスはあの魔王の娘、遺伝したもののの中にはその才能も含まれている筈。

そしてジェスは魔界で狩りをしていたと言った。苛酷な弱肉強食の世界で生き残った彼の技量は疑うまでもないだろう。かつてのベヒモスだろうが彼らの敵ではない。

「ジーク、私は？」

「あつ、エリイも凄いらな。治療術はエリイしか使えないんだから期待してるぜ！」

「うん！頑張る！」

さつきまで疲れてたんだからほどほどにな・・・

そしておれは一人離れてあたりを調査しにさらに奥へ進んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「にしてもほんとになんにもでてこねえな。こんだけ広くて森も豊か・・・。アイツ等の餌になる動物も皆無ときた。ホントにどうなってるんだ此処？」

調べた結果、結局生き物一匹見つからなかった。あちこち探して何かの巣らしきものをいくつか発見したがどれもめけの殻と化していた。茂みに隠れてるかと思ったがそれも外れ。職業柄魔物特有の匂いや動物の気配には敏感なのだがまず生き物の気配すらない。気

持ち悪いくらいに孤独を感じる。

「ここまで何も出ないなんて・・・いや、これはまるで」

ふと経験したことがある感覚が頭によぎる。

そう・・・これは依頼の行き先でよくある現象だ。

内容はどれも魔獣やそれに匹敵する敵の討伐だったはずだ。武器片手にその場にたどり着くまでその配下の魔物以外は大概いない。危険を察知した生き物はすべて逃げ出しそこにはその『危険』以外は残らないのだ。だとするとこれが意味することとは・・・

「この森『ナニカ』がいるのか？・・・む」

この匂い・・・

「くさいな」

さつき見た見た周囲を見渡す。そして無造作に生えた茂みの奥に先ほどまでは気付かなかった気配があることに気づいた。またそこから鼻にツンとくる傭兵にとっては慣れた生臭い鉄の匂い、しかもかなり濃密だ。

「なにが出るかな・・・つと！」

邪魔な草や大木を大剣で一閃して吹き飛ばしそれまで見えなかったものが露わになった。

「うわぁ・・・」

その光景に思わず顔を歪めた。

そこは血の海だった。狼の魔物の死体でできた……。辺りにあらゆる肉片や内臓が飛び散りどれも原形を保たず四肢を欠損させている。

そこは激戦が繰り広げられた後のようで、紅い地面には深い爪跡や魔法でも使ったのか3つほど爆心地が出来て周りの木々もへし折られなぎ倒されていた。

時折見える大人くらいある大きな胴体、人間の子どもを丸のみしそうなでかい口、たしか狼の魔物の中でも大型に入り強さでも一二を争い高い知能も持っている天狼だったはず。それを数えるとその数はなんと三十にも及んだ。

これまた不可解だ。ここで死んでいる数の多さ、そして天狼と言えば一体一体が並みはずれた強さを持ちしかもその上群れで行動する。もし遭遇すれば大概は数秒もたたずに骨にされると言われギルドでも特に危険視されている部類に入る。それが全滅……。ハッキリ言って信じられない。

そして特に気になるのは、死体が残りが過ぎていくところだ。

もしこれをやった犯人が同じ魔物だとしたら此処まで死体は残らない。ソレを食糧として持ちかえるのが自然の摂理、魔物同士の縄張り争いだとしてもそうだ。この有り様だとコレをした犯人はそういった目的ではなかったということだ。しかし群れの天狼を全滅させる魔物なんて聞いたことがない。誰かが討伐で来たにしても群れの天狼討伐は騎士団でも手に負えない。

・・・一体どんな奴がコレを？

「早くあいつらのところに帰るか。もし近くにコレをした奴が残ってるならリザは大丈夫として・・・エリィ達は荷が重すぎる、つかピンチ？」

『オオオオオオオオオオオン！！！！』

「おわ！なんだ！」

突然空に野獣の咆哮が響いた。武器を掴んだ手に力を入れとつさに辺りの警戒をするが何の影も見当たらない。そして二度三度と続いて聞こえた咆哮でおよその位置を知る。

「あーもう。よりもよってあいつらの所かよ。心配はするだけ無駄かもしれないけど・・・やっぱり不安だよなあ」

来た道を見殺し音源に向かって直進する。邪魔になる物は全て斬り払いながら。

・・・・・・・・・・・・・・・・

sideリザ

私達を取り囲むのは狼の群れだった。しかし毛の色が統一でない、見る限り3色はある。種類の違いの見分け方の最たるものとしてまづ外見の形や色を見る。それからするといまここには3種類の魔物がいることになる。そしてそれらが空に向かって咆哮し何処かの仲間を呼ぶ。

別に脅威ではないわけで負けることはないが……。

「随分と沸いてくるな」

「……だね」

この群れ、とにかく増える。私達の周りはすでに五十体を超える狼で埋め尽くされ木々の影の中まで唸り声が聞こえてくる。さっきまでは虫一匹いなかったのというのに一体何だというのだ？

「見て！向こうに誰がいるよ」

エリイの声にしたがってその方を見ると狼たちの後ろにある木の下に人型の影が見えた。

そしてそれが進むと前にいた狼たちはそれに襲いかかることなく逆に道を空けてどいた。

「魔物を人が従えてる？」

「違う、彼らは同士だ。従えてるのではない」

ジェスの疑問に答えたのはこちらに進んでくる影、そして森を抜けその身が露わになった。

シークより一回りも二回りも大きい体躯。

一目で分かる鍛え抜かれた屈強な筋肉に包まれた肉体。

二の腕や胸の周りに生えた人間には決してない毛深く白い獣毛。獣毛と同じく白い無骨に生やしたたてがみに似た荒々しい髪。髪から飛び出した耳は毛に包まれている。

獣人がそこにいた。

そして私はその獣人から漏れだす闘気とその後ろからから発せられる容赦ない殺気を感じ取りいち早く行動を映した。

この殺気の濃密さと獣人の後ろにまだ控えている輩の数は決して油断できるものではない。特に前に見える獣人の強さは自分と同等と考えられるだろう。

すぐさま自分の影を伸ばし黒い円でエリス様達もろともを中に入れる。

「リザ。奴は・・・」

「はい。かなりの腕前そうですね、私でも油断すれば討たれかねません」

「それだけじゃない。後ろに数人いるよ。あとでつかい狼も」
「・・・うう」

「お前達はもう帰っていいぞ、良く知らせてくれた後は私達がしよう」

獣人は私達に目もくれず此処に集まる狼たちにそう言う。そしてそれを聞いた狼たちは頷いて散り散りに去って行った。・・・分かっていたがこの獣人は狼の獣人か。

そしてこの場に残るは私達4人と森から出てきた新手の獣人4人とそれぞれの横に寄り添うように立つその獣人達と同じくらい大きい白い巨狼。確かな足取りで進み来る彼らは私が敷く影の周りを一定の距離を置いて取り囲んだ。

癪に障るがその判断は正しい。この円は相手にとってのキルゾーンだ。一度踏み込めば足元の影は刃となり敵を容赦なく切り刻み、串刺しにする。この敵に何処までそれが通じるかわからないが牽制にはなる。しかしこのままでは緊張状態が続くだけだ、防御を捨てこの影を攻撃に転じることもできるがそれでも確実に安全といえるのは私だけだ。エリス様とジェスはそれなりに戦えるがこの状況はさすがに分が悪い。護衛としてエリス様の安全が最優先なので防御に徹しなければならぬ。

「ふん。ここはお前達の住処だったか。しかし大層な出迎えだな」

この状況でも欠けることのない気丈さを見せるエリス様・・・さすがです。

「よく又ケ又ケとそんなことが言えるな。・・・この醜い魔族風情が！」

今度は別の獣人が応えた。見るからにジークと同じくらいの歳、しかし彼の顔はいつも笑顔のジークとかけ離れており目を血走らせ私達をにらみ殺すかの如く見て、今にも襲いかかってきそうなくらい興奮していた。

「なんで分かったの！？三人ともマントは脱いでないんだよ！」
「はっ。そんな布切れ一つで魔力を遮断した所でおれ達の鼻を騙せ

と思うなよ。いくら人に似せたところで意味はない。形は違えど貴様らからはあいつらと同じ匂いがするんだよこの化物が！！」

「そう怒鳴るな。エリイが怖がつているだろうが、落ち着け、禿げるぞ。・・・む、そういえばお前さつき『あいつら』といったな？此処には前にも魔族が来たのか？」

相手の怒り狂った声に揺るぎもせず逆に煽ってむしろ自分の質問をするエリス様・・・さすがです。

そして当然その態度に獣人の青年は一層顔を赤くさせる。

「戯言を！！あれは貴様らが仕向け「沈まれシャドット」ヘルケン様・・・」

遮ったのは最初に出てきた男。^{ヘルケン} どうやら彼がこの獣人達のまとめ役のようだ。

「ほう。まともに話が出来そうな奴がいたな」

「いや、もとより話し合うつもりはない。・・・我らが此処にいる目的は唯一つ」

「結局話しにならない。いいだろう、早く始めようではないか、こちらもずつと歩かされていて飽きていたしな。ジークが帰ってくるまで戯れるとしよう」

「此処にいない仲間がいたか・・・だがそれは期待しねえことだ。一度離れたならもう戻ってこねえよ！！」

シャドットの言い方に絶対の自信が感じられる。もしや・・・

「この森に入ってからひよつとすると迷ってしまった気がしていたのだがそれはあなた達の仕業か」

「やっぱり僕達って迷ってたのか・・・」

そうだと頷きヘルケンが応える。

「この森のあらゆる木々に『まじない』を掛けてある。それを知っている我ら以外はこの森を出ることもできず延々とさ迷い・・・後は餌となるだけよ」

「さながら『迷いの森』、いや『獣人の隠れ里』と言つべきか。だがどうしてこうもよくしゃべる？」

「知れたこと。貴様等を此処で始末するからだ」

なるほど、確かにいつていたな。

「リザ、私の守は良い、その獣人が危ないのだろうか？リザはそいつを抑えておけ。心配するな・・・私もアレを使う」

そう言つてエリス様は服から取り出した皮袋に手を入れ中からアレを取り出した。それを見てある程度の安心を得た私は広げていた影を閉じ元の大きさに収めて剣を抜いた。

エリス様が切つた啖呵に準じてジェスが剣を抜き周りの敵が身を構える。

「行くぞ」

誰のものかわからない言葉で戦いの火ぶたが切られた。

30話 迷子の迷子の……子犬とおれ

sideエリーナ

私達の中で一番強いリザに最初に現れたムキムキのお爺さん（プラスおっきな狼×2）を任せて私たちは残りの3人と2匹の相手と対峙していた。

そして一人の獣人が（シャドットではない）エリスに話しかけてきた。

「見る目はあるなその娘、確かにヘルケン様は我が部族でもさらに腕の立つ方だ。さすればヘルケン様と戦っているあの女はお前たちの中で一番の腕の持ち主、全員で当たらず二つに分けたということか」

「私の生まれたところではどれも強者しか居なかったからな、戦いについての鼻が効くのは当然だ」

強者の代表は『魔王』だもんね……

「ほう、しかしそれは自身が強者ということではないだろう。残念ながら私の鼻はお前達3人が私達を相手に出来る程の力は匂わない」

敵は自信気にそう告げ自分達の優位を主張する。

「それ位弁えている。集団戦なら相手が連携が得意な狼ではなおさらだ」

「えー！」

「大丈夫だよエリィ」

ジェスが声をかけてきたがエリスのやり取りを聞いて物凄く不安が沸いてきた。エリスは事実上『勝てません』と言ったのだ。

いつもと変わらない態度で向き合っているから勝てると思っていたのにエリスはそれをバツサリ否定した。でもそんな危機的状況になっっているのにエリスどころかジェスも自信の気に満ちた顔を崩さなかった。

「ならば何故そうも自信にあふれている？」

「お喋りはそこまでにしろ！さっさと逝きやがれ魔族！」

「危ないエリスー！！」

瞬間、後ろで耐えていたシャドットが怒りを爆発させエリスに飛びかかった。

その勢いはまさに疾風、咄嗟に叫んだがエリスが迎撃に魔法を使うには致命的な早さでシャドットは接近する。

その時エリスは臆することなくそれどころか微笑んで自分に迫りくる敵を見ていた。

「言っただろう？『集団戦なら』と。だからこそコレなのだ！」

エリスはそう言うときから持っていた拳ほどの青色の小瓶に管を刺して引き抜くとそのまま口に入れて目の前に迫る敵に向かってそれを笛のように吹いた。だがその管からは音は出ず代わりに巨大で透明な丸い膜が出てきた。

「ふざけるな！！こんな子供遊びなど割ってしまえば！！」

このときシャドットは誰よりも怒っていた。魔族に肉親であるまだ幼く自分を良く慕ってくれた弟を殺され、魔族と相見えた時全力を持って仇を取るという復讐に燃えていたのだ。

しかしそれは愚行、普通の狼ならそのわけのわからない透明な玉にさえ警戒をしたに違いない。なによりこの状況で出るものに意味のないものが出る筈がない。だが怒りに我を失っているシャドットは今ほ怒り狂った野獣と化し、完全に警戒というものは消え失せていた。

それを見てエリスは言う。

「まず一人だ」

シャドットがつっ込んだ透明な玉は割れることなくそのままトプンと小さな音を立ててシャドットをその内へと収めた。なのに中のシャドットはその途端嘘のように動かず中で浮いたまま止まり彼の戦いは始まることなく幕を降ろしてしまった。

そしてその光景に私と他の敵は驚きを隠せない。

「シャドット！！・・・だからあれほど怒りに身を任せるなど言ったのに」

「仇を討つぞ！」

「「ヴォフ！！」」

「ねえジェス、あのシャドットって人はどうなってるの？もしかし

て死んじやったの？」

念のため問いただした。エリス達は良い人だと知っている、だからこんなにあっさりと他人を殺せるのかと思わずにいられない。それにこの人たちは何か勘違いしてるみたい、聞くに多分悪い人達じゃないと思う。それにこの人たちが敵意を向けているの飽く迄私を除いたエリス達だけで私にそれを向けようとしてない、私には手を加えないとしているのが分かる。

そしてその問いにジェスは笑って答えてくれた。

「大丈夫だよ。あの人は今幻術にかかっているんだ。体に害はないよ。あの膜は一見すぐ破れそうに見えるけど唯触ったりしても壊れない。術にかかった本人が術に打ち勝つかエリスが解くまではあのままさ」

つまりあれに捕まった者は後は煮るなり焼くなりなんでもござれ、エリスの気分次第ということだ。

それにエリスもそうだと微笑んで・・・

「安心しろエリィ。別に殺しはせん・・・せいぜい半殺しだ」

笑顔で悪魔のささやきをした

「は、半分殺すの？」

「やめてよ、安心するところだったのに台無しだよ！」

エリスのこれは唐突で内容が半端ない。私が慣れない物の一つだ。

「ふふふつ。エリィは可愛いな、そう真に受けるな冗談だ。それよ

り、これで相手は4人。これなら一人2つだ。・・・行けるなジェス」

「え・・・うん、こっちは任せて！」

声を掛け会つと二人は互いに背を任せるように立ちそれぞれの前に立ちはだかる敵を二人は考えを共有してるかのように笑って見た。その眼は絶対の自信に満ちている。

やっぱりこの二人は仲がいい。

あとと思うことがあるとすれば・・・空気を呼んでまだ襲ってこないときの人たちはやっぱり良い人達なんじゃないかと思う。

s i d e e n d

「だあゝもう！なんで着かないんだー！？」

やつ当たりも兼ねて目の前に立ち並ぶ巨木を走りながらに両断する。状況を考えておれはそれなりに本気でダッシュしてるつもりだ。自分が来た道は覚えてるが急いでいる為記憶を無視して直線ルートを

選んでけもの道を爆走中。道を隔てる数多の巨木も大剣一振りですパンだ。

だが何故着かない！？

おれあれから結構走ったからね！あいつ等とはぐれた時よりも走ってるから！

それなのにおれの周りには相変わらず木、木、木・・・いい加減飽きたわ！

しかしそんなおれの心の叫びも虚しく同じような風景は終わる気配がない。

走って斬って走って斬って・・・おれがやってるのは道を作る伐採作業か！？

「あーもうやめたやめた！仕方ないから一旦もと来た道に戻るか・・・イダー！！」

前進を諦めて踵を返した途端目の前が真っ暗になり同時に顔面、主に鼻の頭を強打してしまった。

「いってゝ。ったくなんだよ・・・って木かよ」

ぶつかったのはそこら辺にあるのと変わらない木だった。おれとしたことがうっかり振り向く方向を間違えたらしい。

「こつちだったっけ？・・・ってまた木か。んじゃあこつちか・・・」

ドーンと木が生えていた

「……じゃあこっちか」

ドーンと木が……

「じゃあ」

ド
ン
・
・
・

おれは見渡す限り（伸ばせば手が届く距離の）木に囲まれていた。何故か頭がいつもよりもさえている。こんな時は気を乱さず深呼吸だ。

スウ・ハア・スウ・ハア・スウ・スウ・スウ・スウ・

せいの

「どうなってるんだよこれええええええええええ!!?」

なんで？え、なんで？さっきまでおれは我武者羅に木を切り倒して此処まで突き進んできてたよね！それがどうしておれの後ろにあるはずの切り株とか丸太が一つもないの？無い筈ねーだろ！！

「ねーよ。どうやったらこの状況で迷子になれるんだよ。来た道すらないつてもはや空間移動だろこれ。でもこの森にそんな大掛かりな術施してるはずねえし・・・」

この森に何があるのか、はたまた今おれに何が起こっているのか皆目見当もつかない。結局現状を打開する術をおれは持ち合わせていない。パニックを起こした頭はすでに目指す方向さえ忘れてしまった。

「やつぱ道間違えたのか」。19にもなつて迷子になるなんて・・・くう（泣）！ おれ何か悪いことしたか？おれ最近こんな目にはつかあつてゐるぞ！」

嫌ホントに。思い替えしたら次々とそんな思い出が沸いてきやがる。もうその星のもとに生まれたんじゃないかと思うくらい。

ああ小さい頃は母さんに迷惑ばかりかけたっけ？ごめん謝るから助けて・・・。

（実際は生えている木一本一本にかけられた『まじない』によって強制的に迷わせられているのだが、エリイ達と共にいなかったジークは知る由もないのである）

「よし！そうとなればやることは一つだ！！」

自分の置かれている状況を素直に受け止めたおれは唯一の方法を見出し賭けに近い策に希望と羞恥心を抱いて上を向いて大きく息を吸い込んだ。

「誰かあああああああ！！たーすけーてくうーださあ
ーーーーーい！！！！！！」

“たーすけーてくーださーい！！！！”

“すけーてくーださーい！！”

“くーださーい！！”

“ーい・・・”

帰ってくるのは期待する肉声ではなく自分『達』が発した声が向この山に当たって帰ってくるやまびこだけ。逆に孤独感が際立ってしまった。

「ふっ、来るわけ・・・ないよな。なんだか目から熱いものが出てるぜ・・・」

「本当やで。これから自分等はどうなってしまっやー（泣）」

「どうなるって、決まってるだろう。誰とも会わずにこの不思議な森をさまよいつけるのさ・・・死ぬまでな」

「嫌やー！誰とも会えずに孤独死なんて耐えられへん！」

子犬の泣き声に似た悲鳴が上がる。自分は言っていないがかなり共感が沸く。おれと同じ境遇のかわいそうな奴がいたのだろう。

「泣きごと言うなよ。辛いのはお前だけじゃ・・・」

「そつやな。くよくよしてても仕方あらへ……………」

そして気付いた大きな疑問

・・・あれ？

おれは何を言ってるんだ？誰に言ってるんだ？

そもそも『おまえ』って言葉は話す相手がいないと使えないと思うんだが

・・・というか“くやで”とか“くや”ていう変な口調をおれは使ったことなどない。

「「うーん……………」ん？」

後ろから同じ疑問の声が聞こえて振り返り……………おれはいつの間にか後ろに立っていた人物と初めて顔を見合わせた。

「「おまえ（アンタ）は誰だ（や）？」」

一先ず孤独死は避けられたようだ。

……………

「なるほどなるほど。話をまとめると・・・

お前の名前は『カトル』。この不思議森改め獣人達の隠れ里に住むウル族（天狼を祖とする）。

此処にいるのは昨日仲間と採集に出ていたところを謎の怪物に襲われた。

付き添いで数人の戦士がいたがおそらく全滅。

（おれがあの時見たのがそうかもしれないな・・・）

なんとか逃げれたがその時に足をけがして身動きが取れなかったと」

それに目の前の幼い獣人カトル（因みに9歳）は頷いて続ける。

因みに容姿を上げるなら背丈はジツちゃんぐらい。茶色い獣毛はまだそれほど生えておらずそらの人間の子と変わらない。しかし狼型の獣人の証である獣耳と尻尾は小さいながらもツンと生えている。顔は大きな青色の瞳を持ち活発に遊びまわる悪ガキのようだが可愛い気がある。

なんつーか・・・和む。

「そや。誇り高き森の狩人ウル族の戦士や！

でもってジークの兄ちゃんの方は・・・

とある理由で此処にいない4人の仲間とこの森に踏み込んだ。

あるうことか仲間と離れ一人で散策に出た。

異変に気づいて仲間の所に戻ろうとしたけど案の定この森に掛けられてる『まじない』に囚われて迷子になったと。

・・・いい年してだらしないのう」

ムカツ、こいつ言いやがったな。

「うつせい。歳は置いといてお前もおれと大差ないからな。そんなこと言つてつと置いてくから、頑張れよ」

そう言つて立ち上がるとカトルは目の色を変えて足の傷はどうしたと問いたい勢いでおれに迫ってきて
立ち去らんとするおれの足をガツチリと両腕で抱きとめた。

「嘘やウソ！アンタがこないな所におつてホンマに助かったわ！だから行かんで、置いて行かんで、一人にせんといてーや！！（泣）」

その姿はまさに『必死』を形容していた。

絶対に離さないと子供にも拘らず尚も腕に力を込めしかしおれを見上げる顔は泣きそうであるで雨の日に道端に捨てられた子犬のようだ。それに捨てられた子犬というのもあながち間違えていない表現だ。カトルはその謎の化け物という恐怖に怯えながら一人で一夜を過ごしたのだ。そこに現れたおれが唯一の希望になっているのだから。

それを見て物凄く罪悪感を感じるおれ。勿論冗談だった。最初から身捨てようとは思つてないし身捨てても後味が悪すぎる。それにカトルはおれが迷子という現状を解決してくれる糸口になるはずだ。こつちだつて抱きとめてでも逃す気はないのだ。

「わ、悪かった。冗談だつてジョーダン」

「グスツ・・・ホンマに？」

「ほんまほんま。だから一旦放せ。一緒にいてやるから。誇り高いウル族が泣いてどうする」

「ヒグツ・・・分かった。放す」

なんとか言いくるめおまけで頭を撫でまわして子犬を泣き止ませる。罪悪感と言う名の毒がおれの心を壊す前の応急処置だ。

「とにかくだ、日が暮れる前におれかお前の仲間と合流するぞ。おれの仲間はそこまで遠くにはいないはずだしお前の仲間だつて探しに来てくれるだろうさ。だからお前は道を教えるよ、あいにくおれの眼には相変わらず木しか見えん」

「こ、これだけやつといて木が見えるつちゅうのも凄いもんやで。アンタホンマに人間？こくら辺の木ほとんどその剣だけで斬り倒してきたんやろ？軽い広間になつとるで」

見えないがそれ程切り倒したのかおれ。引かれる程つてどんだけやつちやつたんだろうか。

「誉めるな、照れるだろうが」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何故か変な空気が流れた。

「まあ心強いに越したことはないからええけど・・・でもジークの兄ちゃんの目が見えないのは不都合やな。よし、『まじない』を払ったるからこつち来てや」

「マジか！？スグよろしく!!」

これ異常にない提案におれはまさに一瞬でカトルに飛びついた。そ

れにカトルはのけぞるが直ぐに持ち直して負けじと顔をおれの眼前に突き出して・・・

ペロンッ

とおれの顔を一舐めした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

思わず言葉を失うおれ

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・キ
ヤッ」(byカトル)

何を思ったのか両手を頬にやって乙女のように恥ずかしがりやがった。

それを見たおれはと言うと・・・

ガシィ！！

その顔へアイアンクローを決めた。

「イダダダダダダ！？」

「何してくれとんじやこの犬ところがあああ！！人のこと舐めやがつてバカにしてんのかあああ！！」

「誤解や誤解！！いや確かに舐めたけども人としては舐めとらんつて！！試しに周り見てみいや！『まじない』が解けてジークの兄ちゃんが見る光景も元に戻つとるはずや！」

何？それを早く言え。

カトルを掴んでいた右手を放す。

「あつホントだ。ありがとな！・・・まったく誰だよこんな酷えことしたのは」

言われて周りを見渡すと根元から切り倒されて木の後がおれより後ろへ大きな曲がりまくっているが一本道を作っていた。『まじない』のせいで方向性が失われているのが分かる。
誰の仕業か・・・勿論おれ自身である。

「・・・・・・そやな」 痛みから解放されたが下手にツツこんではいけないと踏んだカトル

「ごめんごめん。ついついカツとなっちまった。まあ気を取り直して仲間探しに行こうぜ。ほら乗れよ怪我治ってねえんだろ？おぶってやるよ」

そう言っておれは屈んでカトルに背を向けた。

「お、おう………」

背中に乗ったカトルは何故かおとなしくなった。

「どうした？」

「なんや……ワイのアンちゃんみたいな背中やなあって」「あんちゃん？誰だそれ」

「ああ。兄ちゃんのことや。いつもワイのこと構ってくれて、ほんで強くて……心配しとるやろーな」

さっきまでの元気は見る影もなくぼそりと呟くカトルの声は心なしか震えているようだった。

「すぐに会えるさ。だから元気出せて。あーあと道案内してくれよ。どっちにしろおれが迷子なのは変わらないからな。お得意の鼻で見つけてくれ」

辛気臭い空気を変えようと話を振るとカトルは予想外の反応を取った。

「あーアンちゃん達の匂いやー!!」

早えなおい!!

しかしカトルの言葉はなおも続いた。

「あとワイらを襲った化け物と人間の匂いや!!」

「・・・・・・・・」

この時頭によぎった思いは間違いであってほしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9835w/>

特殊能力？ハイ、馬鹿力です。

2011年12月29日18時53分発行